

北大東村教育委員会 文化財シリーズ③

聞き書き・個人史 沖山昇  
—沖縄・北大東島の語り部—

北大東村教育委員会

発刊のあいさつ

(作成予定)

北大東村教育長 仲嶺仁介





沖山昇・島田美智子の結婚式  
(昭和 36 年)



ご両親 沖山守身・美ゆ記夫妻  
(昭和 32 年ごろ)



沖山守身・昇親子の八丈太鼓  
(昭和 61 年)

近影



沖山 昇さん（インタビュー時）



沖山昇さん（左）と妻・美智子さん（右）

<目次>

発刊のあいさつ

近影

口絵

はじめに 7頁

第1章 祖父たちが拓いた北大東島に育つ【家系と戦前】 8頁

沖山一家の来島／養子になったこと／住まいについて／兄弟のこと／お父さんのこと／祖父母・両親・その兄弟のこと／沖電アワー（沖山守身）／生まれた家のこと／家畜のこと／風呂場・トイレ／子供のころの過ごし方／社員の子と農家・鉦夫の子／夜の過ごし方／魚の話／食べ物／農夫のこと／日常の買い物／大神宮祭／運動会／映画鑑賞会／郷友会／製糖工場／燐鉦山の記憶／病院のこと／沖山昇さんからの北大東島の戦争についての聞き取り記録／積出船の沈没／守備隊の上陸／貯蔵庫の取り壊し／戦争中の祭り／得意だったこと／所長と大隊長／仲の良かった兵隊／戦時中の被害／防空壕／戦争の二大記憶

第2章 燐鉦山で働き、一念発起進学する【戦後間もなく】 65頁

鉦業所に入る経緯／鉦業所の体制1／鉦業所と役場／燐鉦課長／日報整理／鉦業所の体制2／米軍による機械化／スクレイパー道路／ブルドーザーの役割／戦後の人口増／高校生活のこと／戦後の燐鉦山就職の前／現地確認（土手の手前から港湾事務所前まで）（貯蔵庫横のコンクリート構造物付近で）／守身さんの人命救助／

第3章 島に戻って働き、一家をなす【民間時代】 89頁

最初の仕事／借金のための働く／伊波竹善さんのこと／ワイヤー荷役／北大東郵便局への臨時採用／結婚したころ／製糖工場への転職／製糖の仕事／含蜜工場から分蜜工場に／外国船の難破／全島電化／气象台観測所／電気の資格／結婚と養子縁組／結婚までの詳しい経緯／披露宴の様子／新婚旅行／出産のこと／お子さんの消息／子育ての思い出／農協への転職／電業所長として／地域団体での活動／趣味の時間／囲碁について／土地所有権／

第4章 請われて助役となり、語り部となる【役場時代】 130頁

助役就任の経緯／知花村長のこと／医師不足／空港のこと／助役の役割／秋葉神社建立／火葬場建設／葬式の継承／メモをとる習慣／テレビ放送・親子太鼓／歌がうまい守身おじい／海水淡水化／知花村長の人柄／宮城一夫村長／城間村長・教育長への異動／マルチメディア事業／村営塾／沖電アワー（沖山昇）／教育委員長へ／島のガイド／文化財／最近の日課／八丈太鼓／ラサ島のこと／

第5章 奥様とともに 168頁

守身さんの人となり／東京の守身さん／八丈を訪ねて／ヤギで怒られる／面倒見のよさ／厳しくて優しい／歌が上手い／獣魂碑／祭事の取り仕切り／太鼓の名手／美智子さんが島に来る時の話／結婚のこと／出会った頃の話／子育てのころ／清四郎兄さんへの結婚報告／助役を頼まれる／一緒の職場になる／助役時代の苦勞／健康のこと／昇さんの趣味／島田清四郎さんのこと／おわりに／

あとがき 202頁

付録 204頁

沖山昇個人年表

家系図

子供時代の地図

生家略図

著者 沖山昇 沖山美智子 服部敦

監修 北大東村教育委員会

企画・編集 服部敦

記録 石垣綾音（株式会社国建）

はじめに

本書は、沖縄県の国境離島である北大東島の長老、沖山昇さんの個人史を聞き取った記録である。

聞き取りを行った2018年6月現在、昇さんは御年88ながら、すこぶる元気である。島一番の語り部であり、島のことなら昇さんに聞けと誰もがいう。

昇さんは、1930年に北大東島に生まれた。父親の守身さんは、明治になって開拓された南大東島に八丈島からやってきた移民であり、後に北大東島に移り住んだ。少年時代は戦時下で父の開墾を手伝い、守備隊の上陸を目の当たりにし、戦後は燐鉱山で働いた経験を持つ。

19歳で一念発起して沖縄本島の高校に進学して電気工学を学び、一度は那覇で就職したものの、島に戻って、製糖工場、農協の勤務を経て、沖縄電力北大東電業所の初代の所長を務めた。その後、請われて村役場の助役に転身し、教育長、教育委員会委員長を歴任した。

退職後も各種委員会の委員に引く手あまたであり、頼まれて観光ガイドを務めることもある。小学校からは平和学習の案内役を頼まれる。史跡や戦跡がいつもきれいなのは、昇さんがこまめに草刈りをしてくれるからである。

八丈島から伝わる太鼓の名手であり、祭事、冠婚葬祭の故事に詳しく、誰彼となく困ったときには相談にのってくれる。

北大東村では村制70周年を記念して2017年に改訂版の村誌を編纂したところである。また、戦前に栄えた燐鉱山の遺跡が国の史跡に指定されるとともに、2018年には当時の景観を伝える字港一帯が国の重要文化的景観に選定された。島では、歴史・文化を後世に伝える事業に積極的に取り組んでいる。

島の歴史・文化の継承のためには、沖山昇さんの個人史を記録し、後世に伝えることが不可欠であることから、聞き取りを行うこととなった。

聞き取りは、2018年6月1日から4日までの4日間、北大東島において計14時間にわたって行われた。最終日には奥様の美智子さんが加わり、別の視点から昇さんの個人史に彩りを加えることができた。

本書が北大東村誌と併せて末長く読まれ、北大東島の歴史・文化を後世に伝える一助となることを期待する。

聞き手・編集 服部敦

## 第1章 祖父たちが拓いた北大東島に育つ【家系と戦前】

### < 沖山一家の来島 >

- 聞き手 昇さんのお父さんが守身さんで、そのお父さん、つまりおじいさんが、まず島に来られたということですよ。
- 沖山昇 うちの父が15歳のとき。おじいちゃんに連れられて、北大東に来て、北大東で結婚をして、我々が生まれたということ。最初は、南大東に最初行ったって。北大東が3年後でしょ。あんた方は北大東へ行きなさいと、船夫で。船の櫓こぎでね。
- 聞き手 おじいさんが来られたのは、一番最初の開拓団ですか。
- 沖山昇 ううん、一番最初じゃないですよ。その後の開拓団。父が15歳のとき来たんだから。
- 聞き手 1916年ぐらいですね。1902年生まれなので、1916年ぐらいのころに大東ですね。

### < 養子になったこと >

- 聞き手 昇さんのおうちは生まれたときから、ずっと同じ場所なんですか？
- 沖山昇 私は養子ですから。うちの父の兄貴、長男の養子になったんです。父親は三男ですから、次男は亡くなっていて、だから、三男の三男が長男の養子に行ったわけ。
- 浅沼拓道 モリミヤ（守身さんの家）ですよ。
- 沖山昇 いやいや、ミットシヤ（光利さんの家）。
- 浅沼拓道 あ、ミットシヤ。じゃあ中野区育ちなんですよ。
- 沖山昇 中野区育ち。
- 聞き手 今お住まいの場所が生家ではないですか？
- 沖山昇 生まれた場所じゃない。養子に行ったから私は。うちの父の兄貴のおうちだから、ムートウヤ（本家）だから。
- 聞き手 養子に行かれたのは何歳ぐらい？
- 沖山昇 結婚するころですな。
- 浅沼拓道 え？ トートーメーを継ぐためにです？
- 沖山昇 そうです。あっちは子供がいないから。ムートウヤだから、家系

継がんといかんでしょ。

浅沼拓道 戸籍上養子になったんですか？

沖山昇 戸籍上。養子になったところに結婚したんですけど。養子縁組をしてから、結婚して。

聞き手 奥さん連れて、跡継ぎに入ったと。

浅沼拓道 大東ってよく、そういうのありましたっけ？

沖山昇 少ないね。

浅沼拓道 あんま聞いたことないな。

沖山昇 養子っていうのは、あんまりない。

聞き手 ということは、守身さんは実の父。  
守身さんが三男で。その長男に子供がいなくて、その本家に入ったと、そういうことですね。

沖山昇 そうそう。

<住まいについて>

聞き手 今のお住まいの場所はつまり。

沖山昇 おじさんのおうち。

聞き手 昇さんの生まれたおうちは守身さんのおうちということですね。

沖山昇 私が生まれたおうち、守身のうちは、長男が東京に行ったので、次男が継いで、守身は隠居して港区行ったんですよ。

浅沼拓道 いまの昇さんのおうちを過ぎて、ちょっとすぐに、石垣の家がありますね。

沖山昇 あっちが生まれたおうちの場所。

聞き手 それがモリミヤーですね。長男は東京に行っちゃっていて、守身さんのおうちは次男さんが継がれて、三男は本家を継いだと。

沖山昇 お父さんは隠居して港におった。長男が東京に行って音信不通になっているので、父も結局私が世話をした。港区の屋敷に1坪のおうちをつくって、位牌をそこに置いて、墓は向こうのほうにあるんです。

聞き手 それ港区の一番北側の社宅。

浅沼拓道 石垣があって。

聞き手 あそこの離れのところが、遺影があるところですね。

<兄弟のこと>

- 聞き手 御兄弟8人兄弟でしたよね。男、女はそれぞれ。
- 沖山昇 4、4。長男、次男。長女。それから、三男。四男。次女、三女、四女と。
- 聞き手 昇さんは四番目の三男ですね。御兄弟のお名前は？
- 沖山昇 長男が良夫。次男が光利。それから三男が昇でしょ。四男が尚。長女、房子。次女、悦子。それから美代子。それから勝子。
- 聞き手 お父さんが守身さんで、お母さん美ゆ記さんで、守身さんのお父さんのお名前は？
- 沖山昇 おじいちゃんは四郎、おばあちゃんはツグ。
- 聞き手 お父さん自身は三男で御兄弟は何名？
- 沖山昇 長男は孝。次男はね、尚ですよ。
- 聞き手 じゃあ、昇さんの弟と同じですね。
- 沖山昇 これが死んだけど、余りいい子だったから、弟に尚ってつけた。
- 聞き手 つながっているんですね。
- 沖山昇 そうそうそう。
- 聞き手 昇さんは、孝さんのおうちに養子として入ったと。  
なかなか、すごい難しかった（笑）
- 沖山昇 これができたら東大に入れます。
- 聞き手 本当ですね。で、良夫さんはもう島を出られちゃった。東京に行っちゃった。
- 沖山昇 この人はもう、高等2年卒業だから、14歳で卒業をして、すぐ鹿児島商業行った。鹿児島商業から、造幣所。それから兵隊に行つて。終戦で帰ってきて、北大東まで来ていたんだけど、北大東で結婚してから、また、行ってしまった。
- 聞き手 で、東京出ちゃった。
- 沖山昇 そのまま音信不通。
- 聞き手 光利さんはずっと島におられた？
- 沖山昇 光利は、うん、亡くなるまで。
- 浅沼拓道 議員もやっていました。製糖工場ですか？
- 沖山昇 いや、農業をして、村議だね。



聞き手 房子さんは。  
沖山昇 東京で亡くなった。  
聞き手 尚さんはウミンチュですよ？  
沖山昇 ウミンチュで。  
聞き手 悦子さんは。  
沖山昇 これはもう横浜。  
聞き手 美代子さんが？  
沖山昇 横須賀。  
聞き手 なんか神奈川にみんな行ってますね。  
沖山昇 勝子は那覇在住。  
聞き手 女の子はみんな外へ出ちゃって、島には3人残ったってことですね。

<お父さんのこと>

聞き手 お父さんの守身さんも、ずっと農業？  
沖山昇 守身はですね、最初、南大東から来たときは船夫。  
聞き手 船夫？  
沖山昇 燐鉱を積む舢（はしけ）の櫓（ろ）をこぐやつですね。  
聞き手 舢船夫ですね。  
浅沼拓道 ウミンチュもやってたって、言ってませんでしたっけ。  
沖山昇 あれは後から。うちらが子供のときにはもう農家の、今の光利のおうちに来てますから。そう長いことは、あっち（港区）にはいなかったですね。農業しながら、船が来たら燐鉱積みには行ったわけですよ。  
聞き手 船夫のころは港区のほうにいて。  
沖山昇 大正15年ごろからだから、5、6年ぐらいじゃないかね。  
聞き手 港のほうに住んでいて、船夫をやめて、農業をやって、今の光利さんの家に来られて。  
沖山昇 子供はみんなミットシヤーの方で生まれたんですよ。  
子供が生まれる前と、隠居した後は、港区でした。  
聞き手 港区のおうちは？  
浅沼拓道 コハツシゲルさんの社宅があるじゃないですか。そこが長屋だっ

たんです。そこに住んでた。

聞き手 三軒長屋か何かの1つに入っていて。それが除却されて。昔、船夫をやったところもその辺に住んでいたってということではないですか？

沖山昇 その辺がわからない。船夫のころ、どこに住んでいたのかね。我々は、生まれたところ、あっちしかわからないから。

浅沼拓道 今のマサユケヤーの畑は、じゃあ守身さんの畑だったってこと？ 今大東では一等地と言われる畑ですね、長幕のそば。

沖山昇 八丈から来た人だから、先にこう、いいところをね。

聞き手 昭和の初めのころの地図に、守身さんの畑って、書いてありますよね。

沖山昇 みんな八丈の人がずら一つと並んでおる。

聞き手 そうですね、幕内は。

浅沼拓道 区長は何年しましたかね。結構やってますよね。

沖山昇 あれはもう隠居してからね。

聞き手 守身さんはその船夫をやめて、農業に来たとき、その前にその畑を持ってた人がいるわけですよ。

沖山昇 小作で土地を与えられたわけ、会社から。私が小学校のころ、畑は、このビロウの根元がいっぱい、開墾したんですよ。ヤマグスの木の根元とかいっぱいあって、その間にサトウキビ植えてましたから。この根元を薪割りですべて、切って、元の根元にみんな薪積んで焼いたんですよ。こんなして畑にした。

浅沼拓道 うわー。すごいな、それは。

沖山昇 昭和14、5年ごろ。もう小学校になったら一生懸命やらされたね。

聞き手 守身さんはもともと南大東にいて、来たに来たときは船夫で、そのうちに小作権を与えられて畑を耕したという形ですね。

沖山昇 そうそう。そして、船が入ったら荷役しに。

聞き手 荷役しに。

沖山昇 アルバイト、アルバイト。

聞き手 荷役仕事は続けてる。

沖山昇 四郎さん、ツグさんは南大東にずっとおられた？

沖山昇 四郎さんもこっち。

聞き手 四郎さんと一緒に来たんですよね。

沖山昇 四郎さんはね、会社の一軒家を与えられて、山監督。松の木とか何か生えてるでしょ。これの監督。なぜかっていうと、薪がないもんだから青い木の枝をみんな切って、薪にしようとするわけですよ。せっかく植えたのにね、だめって言ってからに。そしてこれを監視するわけよ。

聞き手 これは社員なんですか？

沖山昇 社員ではない。

聞き手 でも一軒家与えられるってことは、社員扱いですよ。

沖山昇 アルバイトみたいなもんです。

聞き手 四郎さんの一軒家って、どこにあったんですか。

沖山昇 池の沢っていうところ。学校の近く。今の役場の近く。

聞き手 四郎さんが、孝さん、尚さん、守身さんの御兄弟を連れて。

沖山昇 南に来て、南からまた北へ。

聞き手 四郎さんは南に来たとき、向こうでも山監督されてるんですか。

沖山昇 あのとときは何したかわからない。

聞き手 孝さんは？

沖山昇 孝おじさんはね、港区の海岸係。今で言えば港湾係。船がいたら荷役したり、荷役する道具つくったりするところ。

聞き手 荷役そのものをやるのか、その監督者というか管理する人みたいなことではなくて？

沖山昇 もう会社がちゃんとやってるから、その労務の監督するぐらい。

聞き手 労務監督してたんですね。

沖山昇 で、荷役を受け取っていた。

聞き手 南から来たときはそれをやっていた。

沖山昇 守身おじいは農業しに来た。

聞き手 孝さんのおうちも社宅なんですか。

沖山昇 港区に社宅がありましたよ。

聞き手 孝さんは最初社宅に入っていて。でも行く行くは、孝さんのおうちに昇さん入ったわけですよ。

沖山昇 戦争で足をやられましたからね、魚雷で、西港で。船を係船するために待っていたら、1発の魚雷が船に当たって轟沈して、2発目が

船の上を歩いて石にぶつかって。吹っ飛ばされたわけよ。足がまるっきり曲がってたって。これをこのやろうつつって、真っ直ぐ伸ばして。はって助けを求めた。

聞き手 それで、海岸の仕事ができなくなって、中野のほうに移ってこられた。

沖山昇 うちの父が隣に畑を分けて。4町歩ぐらいありましたからね。守身おじいは8町歩ぐらい持ってたんですよ。

聞き手 じゃあ生まれた家の隣に、孝さんが越してこられて、そっちが本家だからそっちに移ったと。

(ここまでの話をもとに、家系図<添付資料>をまとめる。)

<祖父母・両親・その兄弟のこと>

聞き手 こういうの(家系図)があると、整理がしやすくなるんです。昇さんからすると、おじいさんの四郎さんは、大東島に来る前は何かをしていたかっていうのはご存じですか。

沖山昇 話は聞きました。八丈島で個人で木炭を焼いてたって、山で。

聞き手 炭焼きですか？

沖山昇 炭焼き。炭を焼いていたのを集めて、まとめ役ですな。魚市場みたいな。

聞き手 炭焼きの卸みたいなものですかね。

沖山昇 そうそう。みんなが炭焼いたものをね、集めて商売してた。

聞き手 仲買人か。

沖山昇 仲買人だね、商売したと。

聞き手 で、外へ出すという人ですね。

沖山昇 そうそう。

聞き手 仲買人、それで山監督って。専門職として見込まれたというか。

沖山昇 ヤマトウンチューとして頼まれたんじゃないですか。

聞き手 見込まれて入ってきたわけですね。で、北でも山監督をされていて。山監督って具体的には。

沖山昇 山の監視員。森林が荒らされないようにという、この監督。

聞き手 みんなが勝手に薪をとっていくとか。

沖山昇 勝手に、枝なんかを切り落としてね、そうするとダメージを与えるからということ。

聞き手 会社が、そういう薪も管理するから、勝手にもってかないように見張っていると。

沖山昇 あのころは、植林だったですからよ。

聞き手 植林作業なんかもされていたんですかね。

沖山昇 植林作業はしてないですね。ただ、山の見回り。

聞き手 まさに管理人だったんですね。

沖山昇 管理人ということで。例えば、大東宮がありますでしょ。木が生えてますでしょ。ばち一んっていう音がしたら、棒にこうして、**カッキジャ**をつくってね、枝落としているんですよ。こうして、まきに。ばち一んばち一んて音がするでしょ。すぐ走って行きよったですよ。うちがこう、小さいときに。

聞き手 勝手にやってる人がいて、そういう音が聞こえると、誰かが薪をとりに来た。

沖山昇 そうそう。薪とりに来た。御飯、生活するのはみんなまきですからね。ガスもないし、石油コンロもないわけだから。

聞き手 四郎さんは、会社に雇われていたってことですね。

沖山昇 そういうことでしょうか。

聞き手 社員ではない。

沖山昇 社員ではない。フリーでやってましたから。

聞き手 傭員ってことですね。

沖山昇 そうそう。

聞き手 お父さんと一緒に、孝さん、尚さん、守身さん、3人兄弟が来られた。

沖山昇 尚さんはいなかった。

聞き手 尚さんはもう来る前に亡くなっていたんですか。

沖山昇 もう、死んでいたから、2人きょうだい連れて。

聞き手 奥さんも一緒に来られて。四郎さんは、池之沢に来て、社宅に住まわれたってことだったんですけど。これ、池之沢の戦前の地図ですけど。**(付録の地図参照)**

沖山昇 ああ、この家だったかな。

聞き手 ああ、番小屋。  
沖山昇 番小屋ですか。  
聞き手 番小屋っていうのは、森林の番小屋だったんじゃないですか。  
19号、ここに住まわれたと。  
沖山昇 そうです。  
聞き手 じゃあ、やっぱり会社の、あの、いわゆる社宅に住まわられていて。  
沖山昇 はい。こっちにいたのを私は覚えていますよ。  
聞き手 1、2歳の頃にですね、台所にすぐおしっこをしたりしてね（笑）  
叱られたことがあります。覚えてますよ。  
聞き手 これは木造の。  
沖山昇 木造の、茅葺き屋根。  
聞き手 お生まれになったころは、昭和5年ですから、池之沢の開墾が終わったあとですね？  
沖山昇 ああ、そうですねえ。  
聞き手 もうこっちの畑に移ってきたんですね。  
沖山昇 もうこっちにいたのは私なんかもわかりますから。  
聞き手 昇さんはここ（畑の中の家）で生まれていて。  
沖山昇 して、こっち（番小屋へ）は遊びに。  
聞き手 お祖父ちゃんとお祖母ちゃんはここにいて。  
沖山昇 こっち（番小屋）から、その後は向こうに移ったわけでしょ。  
聞き手 はい。向こうというのは。  
沖山昇 私の現在いるところ。沖山孝のおうち。番小屋から移って、まず四郎さんが先にそこにいて。  
聞き手 あ、そういうことですか。  
沖山昇 その後に、港区の荷役作業していた沖山孝が、戦後こっちに来た。  
聞き手 身体をやられて。  
沖山昇 戦後こっちに来た。  
聞き手 四郎さんは戦前からもうそちらに移られていた。守身さんの畑の方へ。  
沖山昇 守身が、カヤぶき屋根をつくってこっちに住まわしたと。  
聞き手 引退した四郎さんをこっちに住まわせて、2人で農業やってたと、  
いうことですかね。

沖山昇　　もう定年だから農業はしない。  
聞き手　　じゃあ、定年して、隣の敷地に引き取って。そこに孝さんが移って  
きたと。

沖山昇　　うん、長男だから来たと。  
聞き手　　四郎さんはお幾つぐらいまで生きておられた？大体の、記憶とし  
ては。

沖山昇　　5、60 じゃないですかね。  
聞き手　　で、四郎さんが島に来るときには、奥さんも連れられて来てるわけ  
ですね。ツグさんを連れてられて。その直前は八丈島から、こちら  
に来られた。守身さんは、八丈島で生まれているわけですね。

沖山昇　　生まれて、南大東へ来て。  
聞き手　　四郎さんは島に来たときにはお子さんいらっしゃったわけですよ  
ね。

沖山昇　　うん、守身はもう 15 歳なってるわけですよ。孝は 17 歳ぐらいに  
なってたんじゃないですか。

聞き手　　八丈島で四郎さんは結婚されていて。  
沖山昇　　そうそう。  
聞き手　　それでは、お母様の美ゆ紀さんは。  
沖山昇　　南大東にいた人。  
聞き手　　南大東に、八丈から来ていたってことですね。  
沖山昇　　そうそう。  
聞き手　　守身さんが南大東のどこかで出会った？  
沖山昇　　南にいたときに見初めたのか、北大東来てからだったのか、ちょっ  
とわからないですね。

聞き手　　いつぐらいに、守身さんと美ゆ紀さんが結婚されてるかもわから  
ないんですね。

沖山昇　　南大東にいた母が父と結婚して、我々が生まれたということしか  
わからないですから。

聞き手　　守身さんが美ゆ記さんを南大東から連れてきたと。  
沖山昇　　南にあの、母の両親はいましたから。  
聞き手　　沖山家の御親類っていうのは、一緒に島に来ているとかそういう  
ことは。ほかにおじさんとかお婆さんとか。

沖山昇 母のいとこの染井さん。この方が一番近いですね。  
聞き手 それは沖山家ではないわけですね。  
沖山昇 うん、染井家。母方だから。  
聞き手 母方はもともと染井家。  
沖山昇 沖山家の親戚はいないですね。  
聞き手 いないですね。昔はつながっているかもしれない。  
沖山昇 ほんとは、いところぐらいになるよっていうぐらいになるかもしれ  
ませんが、ちょっとわかんないですね。  
聞き手 結構、沖山姓の方はたくさんいらっしやったと思うんですけど。  
沖山昇 みんな、同じ八丈の人。  
聞き手 特に、親類関係ではない。

(守身さんが来島の頃を語ったラジオ番組の録音があったので、次に収録する。)

沖電アワー「ふるさとを訪ねて」

聞き手 佐渡山美智子

出演 沖山守身

聞き手 おはようございます。佐渡山美智子です。南北大東島は八丈島からの開拓者によって開かれた島です。北大東村でも人口の20%を八丈島出身の人たちで占めています。島の歴史に詳しい八丈島からの開拓者一世、90歳になるおじいちゃん、沖山守身さんにお話をうかがいます。

沖山守身 私が来たのは大正6年の1月9日。八丈は当時芋食ですからね、ここに来ると飯が食べられるということだけはよくわきまえておりました。聞いておりましたよ。南大東へあがって2カ年向こうで、サトウキビを背中で運搬やってね。南の製糖工場ができたのがその時、東洋会社という会社がその製糖工場の機械を運搬する船で私が南に来たのですから、いい景気でしたよ。

聞き手 沖山さんご自身が南から北に渡って来られて、その頃、北というのはどういう感じになってました。



沖山守身	どこもかしこもジャングルみたいなところでしたな。南大東からはなぜ来たかという、こっちで燐鉱がでるから、北大東へ行けと言って大勢南からよこしました。この島はそれまで会社直営でやってたんです。それが南で製糖工場ができたもんだから、牛車が余る、牛が余る、牛車の製糖用具が余る、そのものを全部こっちへ送って、牛も北大東に小作をするから行けと言って、ワーワー言ってみんな来ましたよ。大正7年です、それが。
聞き手	沖山さんたちがいらっしゃったときには、まだ人も少なくて。
沖山守身	私らが来てからどっと来たんですよ。あの燐鉱を掘る人夫が沖縄からどんどん、どんどん募集して来ましたからね。それでたちまちのうちに4千人くらいいましたよ。
聞き手	そんなにいましたか。
沖山守身	あの、黄金山というところがありました、灯台の。あそこがラサ島とおんなじ高級燐鉱でね。だから、山成さんは黄金山とって名前をつけたんだ。あれ、大神宮山という山だったんだ、昔は。
聞き手	ああ、あとから黄金山と名前をつけられたわけですね。
沖山守身	はい
聞き手	沖山さんは北に来て、それからずっと北大東にいらっしゃるわけですか？
沖山守身	そうですね。こんなになるとは思わなかったですよ。知らず知らずに、ずるずる、ずるずるともう浦島太郎です。はっはっはっ。
聞き手	一生一代のうちにいろんなことがあると語る沖山守身おじいちゃん。今ではおばあちゃんと静かな島の暮らしを楽しんでいらっしゃいます。

<生まれた家のこと>

聞き手 生まれたおうちの話をお聞きしたいんですけど。当然今残っているおうちとは違うわけですね。

沖山昇 あれは戦後のおうちですから。戦前のおうちは。がら一んとしたおうちでね（笑）隔てがないおうちで、10 畳間か 12 畳間ぐらいの大きな部屋に、カヤぶき屋根で。台所はまた別棟で土間。

聞き手 絵で描いていただくことができますか。（書いていただいた絵を清書したものが付録の見取り図）

沖山昇 よし、こっちを北としますとね。こっちから玄関。道路がこっち。こっちに石垣が積まれていますから。

聞き手 この石垣は今でも残ってるやつですね。

沖山昇 残っています。

聞き手 この石垣は、生まれたときからありましたか？

沖山昇 ああ、小さいときからありましたよ。これしないと暴風の時に大変だから。

聞き手 お父さんがご自分で積まれたんですかね。

沖山昇 自分では積みきれないね。石積む人、石工を頼んで。石工。上手な人がいますからね。

聞き手 で、おうちの方ですが。

沖山昇 ここに押し入れがあって。ここから、台所に行くんだから、台所はこうあって。台所も大きかったですよ。こちらは土間。ここが、流し。炊事場。こっちが、かまど。こちらはまき置き場。してこちらに、食卓。

聞き手 あ、ここで食べるんですね。

沖山昇 腰掛け置いて、大勢ですからね、こうして食べよった。

聞き手 ここは 2 間になっていて、ここが 10 畳ぐらいの。で、ここ押し入れで。

沖山昇 はい、10 畳ぐらいね。ここに、小さな間が 6 畳ぐらいかな。10 畳の方にずら一つと布団引いて。

聞き手 みんな全員ここで雑魚寝ですか。

沖山昇 はい。お父さんとお母さんは朝早く起きるから、こっちに寝て、ここに子どもがずら一つと並んで。

聞き手 きょうだい 8 人だから、最大で 10 人ですね。こっちの小間は何に使われたんですか。

沖山昇 小間は出たり入ったりする通り道ぐらいのもんです。

聞き手 じゃあ、ここが生活の場で。で、回り縁とか。  
沖山昇 これはない。雨戸をこうしておいてね。  
聞き手 雨端が出てるとか、そういうことはないんですね。  
沖山昇 雨端はありました。半間くらいで柱が立ってね、軒が出てて。  
聞き手 雨端の下は回り縁ではなくて土間。  
沖山昇 はい。牛を殺したりしたら土間にぶら下げてました。土間は涼しい  
ですから。土間にぶら下げていると、周りが固くなるでしょう。こ  
れを少しずつ切って食べるわけ。  
聞き手 そうなんですね。  
沖山昇 だからもう、臭いしよったですよ。すき焼きなんかするとね、臭い  
しよったですが、それでもおいしかったから食べたんですけど。  
聞き手 水をためるものはありましたか？  
沖山昇 台所のそばに、丸いタンクがあってね。  
聞き手 これは、土を掘って、壁をモルタルでとめてるんですか。  
沖山昇 土を掘ってですね。して、小石を打ち込んで強度をつけてから、上  
からモルタルで薄く仕上げ。現在のが 150 石だから、100 石ぐら  
いかね。ドラム缶 100 本ぐらいの丸タンクでね。いまの兄貴のタン  
クは 300 石くらいあるはずですよ。  
聞き手 戦後に 300 ぐらいのコンクリートタンクに直したんですね。  
沖山昇 はい。コンクリートの四角いタンクつくってる。  
聞き手 タンクの上は、カヤかトタンで覆ってましたか。  
沖山昇 上はなかったですね。露天で。して、藻が生えたり、カエルが飛び  
込んでみたり（笑）丁寧な人は、トタンを置いてましたがね。  
聞き手 屋根のほうに降った雨を、樋を渡して落とすとか、そういう形です  
か。  
沖山昇 そうそう。うちの父がブリキ細工の経験がありましたから、トタン  
を細工して樋をつくって、それでためてましたよ。  
聞き手 守身さんは何でもできるんですね。  
沖山昇 お菓子屋もできたそうですし。東京に何かで行って、帰れなくて、  
お菓子屋で煎餅をつくったこともあるつつて。  
聞き手 島に来る、15 歳になる前にそんな経験をしてるんですね。  
沖山昇 いや、島に来てから、会社の用事とか何かで行ったときに。そうい

ったこともしたと。

<家畜のこと>

聞き手 家畜小屋はありましたか？

沖山昇 大きいのがありましたよ。これを屋敷としたらね。こっち入り口でしょ。この辺を庭にしてね。

聞き手 庭の周りは防風林が囲んでましたか？

沖山昇 いやいや、もうすぐ畑だから。サトウキビを植えているか、植えてないかが境目。で、庭のこの辺に、大きな柱を立ててね。何本か、こういった柱を立てて、そして、茅葺き屋根でね、破風屋根ていうんですか。間仕切りなし。風が素通りするようにして。して、屋根裏には床を引いて。ジャガイモなどの保管庫。とても涼しくて、よく保管できよったですよ。冷蔵庫がわり。1年分のジャガイモをね。この前があいてるでしょ。ここはね、堆肥の堆積場。牛の糞を出してきてね。

聞き手 この小屋には牛がいましたか？

沖山昇 7頭ぐらいいましたよ。乳牛が1頭。耕牛が6頭くらい。子どもたちが1頭ずつ、飼い葉をやったり、池に水飲ましに連れてったりね

聞き手 それぞれ担当がいるわけですね。水は、どこまで飲ませに行かれたんですか。

沖山昇 沼地っていうか湿地帯に行きよったです。天水がないときは、井戸があるんです。これがユキノブヤーだから、この湿地帯。ここに井戸があつたですよ。

聞き手 それは塩が入って飲み水にはならんわけですよ。

沖山昇 飲んでましたよ。

聞き手 そうですか。

沖山昇 塩分も入ってましたし、濁っているし。これを一晩沈殿させて、して、上水を飲みよったですよ。

聞き手 井戸水は飲み水にも。

沖山昇 お茶水とかは天水を使うけど。天水がだんだん減っていくと、井戸水をドラム缶で汲んできて使いよったですよ。

聞き手 牛7頭というのは、当時の農家としては割と普通ですか？

沖山昇　　まあ、多い方ですね。うちの父は、獣医の心得もありましたから。何でもやりよったですよ。

聞き手　　獣医っていうのは。

沖山昇　　前は、会社が雇った本当の獣医もいたんですよ。父がその人とお友だちになってね、鞆持ちっていうんですか、一緒に歩いてましたから。それで、牛が気分悪い、草食わないとかしたらね、

聞き手　　何となくそういう心得ができていて、ほかの農家の方から調子が悪いよって言われると見に行ったりして。

沖山昇　　そうそう。

聞き手　　ほかには、いなかったですか。トリとか。

沖山昇　　トリも300羽ぐらいいましたよ。

聞き手　　トリ300羽（笑）

沖山昇　　放し飼いだから。畑の周りとか、敷地内とか。キビ畑の中に卵探しに行きましたよ。すぐ、母がゆで卵してみんなに食べさせてね。これが楽しみだったんです。

　　で、餌をどうするかっていうと。飛行場の近くの長畑（ナガバタケ）っていうところに、1町歩ずつ麦畑を割り当てられてましたよ。何月ごろでしたかねえ、時期になるともう、牛車で家族みんなで行って麦を植えて、して、収穫のときはまた行ってみんなで刈って、脱穀機で、麦つくって。それが鳥の餌だったですよ。

聞き手　　麦は、食用ではなくて、家畜の餌として。

沖山昇　　いやいや、家畜の餌にもするけど。味噌をつくったり。大麦を植えたら、はったい粉。小麦は、メリケン粉。挽き臼がありますでしょう。あれでやりましたよ。

聞き手　　麦作はみんな、長畑に小作農家が割り当てを受けて。

沖山昇　　サトウキビ畑の近くにつくると、畑が枯れるし、害虫が発生するということで、島の片一方に麦畑を集めたんですね。飛行場のあたりにずらーっと。

聞き手　　トリはいわゆる鶏ですね。

沖山昇　　鶏。

聞き手　　他の種類もいました？

沖山昇　　アヒルを養ってる人もいましたがね。うちは養わなかったです。な

ぜかという、アヒルは糞がすごいですよ。ばーってやるもんですからね。

聞き手 ほかの家畜はいないですか、豚とか。

沖山昇 あと、ヤギ。あ、豚も。

豚のえさも残飯で。例えばサツマイモの悪いのがあるでしょう。これはみんな豚の餌つつって炊いて。

聞き手 豚は何頭ぐらい。

沖山昇 うちが親豚を養ってました。親豚を養って、子を産んだら、これをみんなに売ってね。ほかの人はこれを買ってって、大体20キロから30キロぐらいになったら潰して食べるでしょ。

聞き手 親豚ってことは、つがいで2頭。

沖山昇 つがいじゃない。雌豚を。雄豚は持つてる人いますから。

聞き手 種豚は連れてきて、種を植えて。

沖山昇 時期になったらね。

聞き手 雌豚を1頭飼っていたってことですね。

沖山昇 1頭。2頭は養いきれないですよ。大きいですから。

聞き手 ヤギは何頭ぐらい？

沖山昇 ヤギは5、6頭もいましたよ。山に逃がして。

聞き手 山っていうと長幕ですか。

沖山昇 幕。だから私ら子どものころは、はだして山の上、ヤギと走り勝負したんです。あのころは足の皮も固まっていたね。もう毎日のはだしでしょ。かえって石が割れよったんですのに。とがってる石が。

聞き手 え、足のほうが強くてですか（笑）

沖山昇 険しくこう尖っていますよね。踏んだらちっと割れよったですよ。そのくらい足が固まってました。靴がないわけですから。そういうふうにしてヤギを養って、今度これを捕まえるときは、みんな両方から攻めてって、穴があるから、穴に追い込んでから捕まえおうちで養っている人もいますがね。牛の飼いや刈らんといかんからヤギまでは大変ですよ。だから山に逃がして。

浅沼拓道 すごいね。捕まえきれんのですねえ、追い込んでから。

聞き手 ヤギはどういうとき食べたんですか？

沖山昇 ヤギはお祝いするとき。それから、サトウキビの植えつけのとき。

今は機械でやりますがね。あのころは人力だから。鍬で、サトウキビ1本ずつ植えたですから。これは隣近所で10名くらい一緒に、ユイーマールですよ。はい、御苦労さんでした、ってしてからに、ヤギ汁を振る舞ったりするの。これはお互い様。どこの家に行っても。あしたはどこだよって。

聞き手

これで全部ですね。

沖山昇

あと、ウサギなども養ってはいましたが。あれは、マスコットだから。

#### <風呂場・トイレ>

聞き手

お風呂はどうされていたんですか？

沖山昇

お風呂は、どこだったかなあ。豚小屋のこの辺。ここに、五右衛門風呂。

聞き手

便所はどこですか？

沖山昇

豚小屋に、水肥タンクというのがあるわけです。豚のおしっことかはこっちに流れるでしょう。して、豚小屋は洗わないと汚いでしょう。そこを洗った水もこっちに流れる。水肥タンクって言いよったですよ。(便所は)水肥タンクにケタを置いて、露天で。

聞き手

水の肥料ってということですか。

沖山昇

はい。いっぱいになったら、これを担いで行ってキビにかけるんですよ。豚あれと、人間のあれが一緒になって。だから、露天で囲いも何もないですよ。

聞き手

屋根もなし。

聞き手

風呂は薪でたいた。

沖山昇

薪でたいた。五右衛門風呂で。

雨が少なかったら、このお風呂も沸かされないから、その時は井戸。

聞き手

家の外の井戸ですか？

沖山昇

そう。井戸のそばに、ドラム缶を切って置いて、そこで水を沸かしてからお風呂入りよった。

聞き手

共同ということですね。家風呂に入れないときはみんなでそこへ。

沖山昇

共同の露天風呂だった。

だから、女の方たちは大体もう、暗くなってから。

聞き手 誰かに聞いたんですけど、製糖工場で、釜炊きをするんで、お湯ができる。で、そのお湯を使って風呂に入ったっていうような話を聞いたことがあるんですけど、そんな話は聞いたことありますか。

沖山昇 小さい工場の時？

聞き手 ええ。

沖山昇 小さい工場でもやっていたんですかな。大型工場でも、ドレーンでね、蒸留水風呂ていうのがあって。蒸気を使うもんだから、蒸気のドレーンていうのがあるでしょう。そこで蒸気が固まって。水になっていくの。これ蒸留水風呂つつたんですよね。それでお風呂入ってました。

聞き手 じゃ、当時のことはお聞きになってないですね。

沖山昇 はい。

#### <子供のころの過ごし方>

聞き手 子供時代の思い出で、よく覚えていることはありますか？

沖山昇 もう学校にははだしで行くし、学校へ行く前は牛の乳を搾ってね。牛乳を沸かして、御飯にひっかけて牛乳飯をつくって食べてね。洗剤がないもんだから、昇、手が臭いねってしてからに。お乳搾ったらね、臭いが抜けないんですよ。そういった思い出もあるし、家のお手伝いなんかってというのはすごいですよ。

私は、母にね、もう炊事を一生懸命させられた。昇、おまえは上手だ、おいしいよって言われてね。小学生のころね。だから、今でも炊事なんか問題ないですよ。

聞き手 小学校のころからやっていたんですか。

沖山昇 小学校のころから。褒められて使われていた（笑）だから、家内といつも話すんですよ。私はこんなして褒められてやったんだから、子供は褒めて使いなさい。

聞き手 子どものころ、大体、小学生ぐらいでしょうか、一日をどんなふうにご過ごしていたかを聞かせてください。平日とか、休日とか、農繁期とかでちょっと過ごし方が違うんじゃないかなと思うんですけど。

沖山昇 そうは違ってないですね、農家の子どもだから。飼いや刈りは毎日



あるし。

学校通うときに、牛の乳を搾って臭いがしたというのが、ありましたよね。あれがちょっと困ってましたね。やらなければいけないし。

聞き手

それは、起きてすぐですか。

沖山昇

学校行く前。

聞き手

まず、朝起きると、学校行く前に何をされてたんですか。

沖山昇

もうぎりぎりですよ。

聞き手

朝御飯をみんなで食べて。

沖山昇

朝ご飯も、牛乳絞って、木綿でこして、沸かして、これを御飯に引っかけて食べてから学校行くと、そういったのが主だったですね。ないときもありましたけどね、雌牛一頭だから。

聞き手

乳搾りがほぼ日課というか。学校は朝何時ぐらいに。

沖山昇

時間はちょっと、8時ぐらいじゃないですか。

聞き手

終わって、何時ぐらいですか。

沖山昇

3時ごろですかね。

聞き手

3時ぐらいに終わって帰ってくると。

沖山昇

牛の飼葉刈り。それから、母の手伝いで、芋掘り。

聞き手

サツマイモの畑があるんですか。

沖山昇

いえいえ、キビ畑の片隅に。4町歩、8町歩ぐらいあるわけだから。

8町歩あったのを、沖山孝に4町歩分けたでしょ。

私が引き継いだのが4町歩だったですから。

聞き手

3時に帰ってきて、遊ぶ時間はありましたか。

沖山昇

遊ぶっていても、たまーにしかないですよ。

どんな遊びかというと、棒の先にボロを巻いて、打って、銃剣術の練習。

聞き手

それは戦争がもう始まってたってことですか。

沖山昇

戦争中だから。私が尋常高等を卒業したのは19年ですからね。

聞き手

戦争が始まる前は、戦争の訓練ではなくて、別の遊びをされていたんですか。

沖山昇

もっとほかに遊びはあるんですよ。家庭では、例えば野球のボール投げとか兄弟2人だからできないでしょ。その時は戦争のごっこ、しようねえって行ってね。銃剣の真似してね。ここに当てたら、当

てた人が勝ちだよって。そういうふうな遊びをしたり。  
学校なんかで大勢で遊ぶときなどは、ハンシーって言うんですよ  
ね。ボールを打って、壁に当てたら勝ちっていう、こういったの。  
打ってきたらこれを反対に打ち返すんですよ。

浅沼拓道 手で打つんですよ。

沖山昇 手でテニスボールをこうして打つんです。打つの上手な人がいる  
んだよ。100メートルぐらい打つのほんと。

沖山昇 そしたら 100メートルの地点に待ってって、これを反対に打ち返  
すわけ。打ち返して、落ちたところが、始点ですな。それからまた  
今度打つと。そういう遊びをしたりね。それから、木登り。あのこ  
ろは植林ってってからに一生懸命、マツやモクマオウ植えてまし  
たよ。家の周りなんか。防風林って。モクマオウが生えてす  
ぐはとても上等なんです。しなれてね。はい、ターザンの真似っ  
ていってね、木に登って木から木に移るわけ。

聞き手 しなわせて。

沖山昇 うん、しなわせて。こういった遊びをしたりね。

#### <社員の子と農家・鉦夫の子>

聞き手 同級生は何人ぐらいいらっしゃったんですか。

沖山昇 同級生は45名と記憶していたが、うちのマサコ姉が、同級生だけ  
ど、え？48名いたよ一つつってからね。

聞き手 子どものころに、社員の子とそうじゃない子どもとか、八丈の  
子と沖繩の子とか、違いみたいなものを感じたことがありますか。

沖山昇 これは生活の問題だけど、社員の子は、靴も洋服もあったし、して、  
百姓の子は、着物と裸足。せいぜいお祖母ちゃんがつくる草履。

聞き手 アダンの根っこの。タコナシ草履。

沖山昇 タコのアシ。そういったのを履いたりしてましたがね。

それと、弁当。社員の方は御飯の弁当でしょう。して、農家の子ど  
もたちはサツマイモ。これを炊いて、火であぶって。それから、タ  
オルに包んで担いでいくんだね。そうすると、あの、あれ、社員  
の人は、芋食べたいでしょう。御飯と交換して食べよったですよ。  
それから、黒糖。黒糖をポケットに入れといてね。これと御飯と交

換して食べたりね。

聞き手 黒糖はもらってくるんですか。

沖山昇 家庭用っていつてちゃんと置いてありました。親からもらってね。包んで、ポケットに入れといてから。

聞き手 そういう服とか、食べ物の違いはあるとして、グループが分かれちゃうとか。

沖山昇 あ、そういうなのはないですね。

聞き手 子どもとしては平等ですかね。

沖山昇 もう、平等。

聞き手 先生の扱いが違うとか、そういうことも特になくて。

沖山昇 やっぱり、悪さしたりすると上級生に怒られたりね。北大東はそういったことはすごいですよ。どこの子どもであろうと、どこの兄弟であろうと。お互いに、上の人が下の人を教育していくという。これは、やっぱりよかったですよ。

聞き手 社員の子どものも、小作人農家の子どものもあると思うんですけど、さらに、農夫とか、鉾夫とか、労務者の方もいらっしゃいますよね。

沖山昇 一緒、一緒。

聞き手 そんなに、子どもの中では、差はなかったですか。

沖山昇 はい、差はなかったです。親同士の問題はあったかもしれませんがね。特に、うちの父は、会社から色々信用あったみたいで、会社のお手伝いいろいろやってましたよ。

うちにまた遊びに来る人もいっぱいいましたしね。だから社員が遊びに来たら、はい、鳥殺せーってからすぐ、うちなんか料理さー。だからを潰してやるのは30分でできますよ。はい、鍋に入れてどうぞ炊いてくださいっていうぐらいにね。

聞き手 それは子どもの仕事だったんですか。

沖山昇 子ども。子どもにさしよった。褒められて一生懸命使われよったです(笑)だから料理もさばくのも上手になったしね。魚さばくのも、みんな上手になった。味付けなどは、うちの弟のほうが上手だったですよ。

聞き手 尚さん。

沖山昇 兄貴も上手だったしね。

だから、社員の子とは別に隔てるちゅうのはないですね。ただ、あれ、子どものころ聞いたのは、会社の言うことを聞かないとあんたがた許さんぞー、退島にするぞー一つってからに、言われたことはあったそうです。

聞き手　　そういうことを言われた人がいると。

沖山昇　　そうそう。で、退島された人もいる。例を挙げると、八重山の白保っていうところに沖山っていう人がいるんですよ。したらこれ、南大東から行った人だって。会社に、盾突いてから、して、退島にされたもんだから八重山行って開墾して、ミズイモだったかな、何かを植えて、もう繁盛して。

#### <夜の過ごし方>

聞き手　　学校から帰ってきて、親の手伝いをして。夕食を食べるころには暗くなってきた、夜は、どういうふうに過ごされていたんですか。

沖山昇　　夜はねえ、高学年になると、勉強もしよったですよ。電気もないでしょう。ランプも石油もないしね。どうしたかっていうとインガンダルマ、バラムツという魚。あれの油を皿に入れてから、これを燃やして、おうちの片隅でね。勉強しよったですよ。あ、この部屋でね。

聞き手　　小間のほうで。

沖山昇　　あっちはみんなが寝るところだから。

聞き手　　こっちのほうに机を置いて。勉強してた。

聞き手　　インガンダルマの油っていうのどうやって調達するんですか。

沖山昇　　肉を切って、塩漬けして、押さえるんです。重しをつけて。そしたら、油が出ますよ。その油をこぼして。今度、ろ過するわけ。水と油が、ちゃんと分かれますから。油だけをとるわけですよ。

浅沼拓道　　ダルマって、ナワキリもかみ切るぐらいの暴れ魚が昔から釣れたんですね。

聞き手　　ダルマの油は自分たちでつくるんですか。

沖山昇　　おやじ連中がみんなが集まって、ダルマ持ってきて、塩漬けして、油もとる。

聞き手　　塩漬けしたのは食用になるっていうことですね。

沖山昇 おやじが釣りに行きよったんですよ。私のおうちは農家だったけど、テンマセンというのがありましたよ。サバニとは違ってね。

沖山昇 ボートみたいなので。櫓でこぐやつがありますでしょ。

聞き手 テンマセンというのは、あの、伝える馬の船ですか。

沖山昇 そうそう。はしけを小さくしたようなもんですかな。それを、うちでつくってましたから。大工さん頼んで。沖山シュウジさんという大工の棟梁がいました。その人が毎日台所でね、つくってましたから。

浅沼拓道 ほお、すごいなあ。

聞き手 台所に船があったんですか。

沖山昇 だからこの台所がいかに大きいかっていうの。

聞き手 で、家から船を持ち出して、漁はどこから出るんですか。

沖山昇 西港からでも、上陸からでも、凧いでいるところから。牛車で積んでいけるくらいですから。岩のところは、アダンの骨を切って並べて、シダに使って、この船を流しておろすんです。

聞き手 で、守身さんが、時々漁に出ていくと。

沖山昇 そうずっと、うちの兄貴連中がね、牛車に乗って、港に迎えにいくわけ。大きなあの牛車にはみ出るぐらいのインガンダルマが釣れよったですよ。

聞き手 ほおー。

浅沼拓道 すっごいなー。

#### <魚の話>

沖山昇 今、魚の話だから、戦争中の話になるけど。昭和19年の3月に卒業して、私は兵隊さんの水くみ。牛車で井戸から水をくんで、炊事場に運んで、ドラム缶を30個ぐらい、そーっと並べて、(不純物を)沈殿させて使うわけだ。それから、まきを運んだり、洞窟から米を運んだり、天気のおときは、夕方になったら、漁獲班というのがいましたから、魚とりに行ったりしてね。

聞き手 専業の漁師さんもいらっしやった？

沖山昇 専業の漁師というのは、戦争中だから疎開してもういなくなって。それから現地召集ちゅうのがされて、漁師が兵隊さんになった。おま

えは漁獲班って行ってからに、訓練しないで魚釣り行ってた(笑)

聞き手 召集されてもそんなやってたんですか。(笑)

沖山昇 うん、召集されて。軍服着て魚釣り。

聞き手 戦争が始まる前は、専門の漁師さんは当然いらっしゃったんですよ。

沖山昇 はいはい、いました。2000名ぐらいの人口だから。7、8名はいましたよ。サバニは2人乗りだから、4、5杯だね。

聞き手 専門の漁師さんっていうのは、西港の近くにいらっしゃったんですか？

沖山昇 そうそう、西港の近くに金比羅宮がありますでしょ。その近く、あの石垣のうちの市場だからね。

聞き手 菊池さんのおうちですね。キクチさんは、網元というか。

沖山昇 そうそう、網元ですよ。

聞き手 その関係者がその近くにいらっしゃった。

沖山昇 金比羅宮の下のほうにもいたり、それから、大正村つつって、茅葺き屋根のおうちの人もいたしね。

聞き手 専門の方は、大体そっちにいらっしゃって、で、農家の方でも、守身さんみたいに、そういう船を持って、漁に出るっていう方がいらっしゃったんですか？

沖山昇 いましたよ。それは、もう、売り物ではなくて、自分のおかず釣り。

聞き手 当時の話で、会社は、魚介類でも管理してたっていう話を聞いたことあるんですけど。

沖山昇 それは、うちらがまだ小さいとき。我々が大きくなってきたときはだいぶ緩和されていましてから。その前は大変だったですよ。釣りに行くぐらいだったら畑の草とりなさい、サトウキビを増産しなさいといわれる。小作人だから。それが、だんだんと和らいでね。

聞き手 途中から、自分のものは自分でとりに行っていいよという形になったんですか。

沖山昇 前は農家の方は夜、人に見られないように磯釣りに行くわけ。釣り竿なんかは、ススキの中とかアダンの中に隠しておいて。

聞き手 やっぱり隠れてなんですね(笑)。

沖山昇 そしてまた後始末。そこに魚の骨なんか置いてあったら、お前らは

って、あんばいにやられるからね。  
聞き手 厳しく統制されていたんですね。  
沖山昇 それが大部分もう和らいでね。個人で釣りに行くようにもなったんですよ。  
浅沼拓道 アンマクはよく食べてたんですか、ヤシガニ。  
沖山昇 アンマクは、うん、ヤシガニはいっぱいありましたよ。

<食べ物>

聞き手 普段よく食べていた主食は、サツマイモなんでしょうけれど。  
沖山昇 サツマイモで。  
聞き手 ほかにはどんなものを食べられていた。  
沖山昇 タビオカ。キャッサバ。  
沖山昇 あれもおいしかったですよ。つくり方によってねえ、ガジガジのがあるし、クーフチョーンって言いますでしょう、ホロホロしてたのもありますしね。  
聞き手 キャッサバは炊いてですか。  
沖山昇 サツマイモと一緒に。茎が木だけれど、根元に芋がつきますでしょ。芋は、サツマイモと大体にしていますよ。これを、そのまま炊いて食べたり、また、よく皮をむいて真っ白くしてから、そして一口大に切ってから、ふかすっていうこともあったしね。砂糖を少しまぜてつついて、田楽みたいにして食べたりして。いろんな食べ方がありましたよ。  
聞き手 ほかに、おかずはどんな。  
沖山昇 おかずはいっぱい。野菜いっぱい植えてるから。  
聞き手 野菜は家の周りで植えていたんですね。  
沖山昇 いや、野菜畑をちゃんと確保してね。一反歩も使わないですよ。サツマイモのときは一反歩ぐらい使うけどね。  
聞き手 青菜とか、年がら年中あったということですかね。夏はちょっと厳しいでしょうけど。  
沖山昇 ニラとかね、年中できるものは、いつでもあるわけだから。  
聞き手 余り野菜は不自由してない。  
沖山昇 野菜は不自由しない。サツマイモも不自由しない。米がないだけだ

な。戦前は配給で少しづつ米があったんですよ。そしたらね、タイ米っち言ったかなあ。細い米ね。これは腹いっぱいならないですね。ぱさぱさして。

それから、戦後だったですかあ、白米が俵で来たですよ。玄米じゃなくて。それをきねで突いて食べたら、あっさー、本当に銀飯。銀飯っていうでしょ、ぴしゃっとした米の御飯。これ食べたときには、ああー、すばらしいってからもう。幸せだなと思いましたよ。

聞き手 ふだんも、お肉を食べていたんですか。

沖山昇 まあ、途切れるときもありましたけどね。

聞き手 お肉って何を。

沖山昇 豚肉とか。豚肉は塩漬けして置けるでしょ。しょっちゅうありましたよ。それと、鶏肉。

聞き手 もう 300 羽もいるから。(笑)

沖山昇 鶏汁はよく食べよった。特に、農家はね。雨降りは持て余すでしょう。牛の飼い葉を刈ってきたら、それで終わりだから。鳥を潰して食べたりね。

聞き手 食事は余りこう不自由した感じはないですね。

沖山昇 食事は不自由しない。米がないだけだな。

聞き手 それは、農家だからですかね。

沖山昇 農家だからでしょうね。

#### <農夫のこと>

聞き手 沖山家が雇っている農夫とかいうのはいらっしゃったんですか。

沖山昇 会社からの強制で、あんたの家は何名使いなさいって。製糖期になると 5、6 名はいたでしょうね。

聞き手 製糖期に雇うんですか。

沖山昇 製糖期に、キビ刈りがあるから。普通は 1 人か 2 人ぐらいですよ。

聞き手 ふだんも、1 人 2 人はいらっしゃるんですか。

沖山昇 もう、何十年って行って、いる人もいましたからね。今も、製糖工場で季節工って言ってからに、製糖期だけ雇う人があるでしょう。

聞き手 2 島の外から来る？

沖山昇 そうそう、島の外から。宮古からが多かったですね。やんばるから



も来ましたがね。キビ刈りさすと、宮古の人が上手だったですよ。  
トン数、量を切るのがね。

聞き手 農夫で来られて、小作化して、戦後も残ってる方もいらっしゃるわけですね。

沖山昇 うんうん、いますね。。

浅沼拓道 宮古はいますか。

沖山昇 宮古はいないねえ。出稼ぎだけだ。

聞き手 やんばるの方で残った方が多いでしょうね。

沖山昇 やんばるの方がね。

聞き手 農夫小屋、農夫の方のお住まいは、家の近くにあったんですか？。

沖山昇 ありましたよ。(家の間取りの絵を見ながら) ここに、これだけ小屋を出してね。ここに住まわしていた。

聞き手 ここに4、5人泊まるわけですか。

沖山昇 みんな、雑魚寝だから。短期間でしょう。後からは、別室をつくったりもしましたけどね。

聞き手 後っていうのは、戦後の話。

沖山昇 戦後の話。

聞き手 農夫の方々のお食事なんかは。

沖山昇 うちはもう一緒。

聞き手 一緒にここに並んで。

沖山昇 家族もみんな一緒ですよ。炊事の手伝いもするし、みんな。

聞き手 にぎやかなおうちですね(笑) 家畜もたくさんいるし、すごく人口密度が高いですねえ。

聞き手 お聞きしていると、思ったより食事の事情はよいのですが、鉾夫の方なんかはそんなに豊かではなかったんじゃないでしょうか。

沖山昇 そうそう。米が食べられるだけでね。支給されるから。

聞き手 だけど、畑もないし。

沖山昇 畑もないし。野菜をちょこっとつくるだけだから。

聞き手 前庭で自家菜園みたいものですか？

沖山昇 ええ、一坪。

聞き手 そんなのすぐ尽きてしまいますよね。

沖山昇 一坪ぐらい植えても、ネギとか、ニラとかで、葉野菜なんかは到底

できなかつたと思いますよ。

聞き手 肉もなかなか買えないでしょうし。農家のほうに分けてくれ、というようなことはありましたか？

沖山昇 分けるっていっても、大根とか、大量に植えられるものしかないでしょ。畑は、サトウキビを植えるためであって、野菜の商売をするっていう人いないですからね。

#### <日常の買い物>

聞き手 日常の買い物では、何をどこに買いに行かれたんでしょうか。

沖山昇 小売販売。あっち（港区）まで行って。

聞き手 池之沢にも販売所があったんですよね。

沖山昇 池之沢にも小売店がありましたけどね。こっちは、日常使う、ちょこちょことしたもの。スーパーに行くみたいなもんです。大きなものはやっぱり本店ね。

牛車で小売販売に行って、米は5斗俵を1袋とか2袋とか、それから、油1缶、しょうゆ1樽、こういうふうにして買って。1週間か、10日分ぐらいね。今みたいに、はい、きょう行ってこようってな感じはできないから。

このときは、（支払い）掛け売り、延売ですから。して、サトウキビ、あのころは砂糖だね。砂糖を何丁出した、はい、あんたの砂糖は幾らで売れましたよ、あんたが品物買ったのは幾らですよ、差し引きプラスマイナス何円。そんなしてやりましたよ。

聞き手 買い物に行くときは、子どもも一緒に行くんですか。

沖山昇 親が連れて行くときもありましたし。

聞き手 池之沢じゃなくて、港まで行って。

沖山昇 はい。港まで行くっていうのはなかなかですからね、あのころは。

聞き手 港の販売所までついてくと何か買ってくれたりすることはないですか？

沖山昇 そういうのはないですね。

聞き手 池之沢の販売所には何を買いにいきましたか？

沖山昇 お菓子なんかは、たまに買ってきよったですから。

聞き手 お菓子なんか売ってるんですか、池之沢の販売所。

沖山昇 菊池さんがお菓子屋だったでしょ。池之沢にもね。  
聞き手 港でも、菊池さんとお菓子を買ったとありますね。  
沖山昇 港にもありましたし、池の沢にもありましたよ。  
聞き手 (地図 付録\*\*を見て) 販売所がこれですよ。して、番屋がこ  
ちちですか。お風呂場がこれ。お風呂場の、この辺に菊池さんのお  
菓子屋がありましたよ。  
聞き手 池の沢の菊池さんはいろんな商売されていますね。服をつくった  
り、ミシン屋さんとか。  
沖山昇 そうそう。  
聞き手 お菓子買うときは、小遣いがあったんですか。  
沖山昇 小遣いもらったときだけ。常平生は買えないですよ。  
聞き手 小遣いは、何かお祝いのときなんかにももらえるんですか。  
沖山昇 お菓子買ってきなさいってもらうときはありましたよ。よっぽど  
じゃないとしなかったですよ。  
聞き手 港の小売販売と、池之沢の販売所では、規模が違うって話でしたけ  
ど、池の沢で購入するのは主にどういうものですか。  
沖山昇 あっちは大物でしょう。米。油なんか。こっちは小さい。日用品。

#### <大神宮祭>

聞き手 1年通じての大きな行事っていうと、大神宮祭と運動会というこ  
とでいいでしょうか。  
沖山昇 そうですね。  
聞き手 大神宮祭は今の大東宮祭と一緒にすよね、やってる時期は。  
沖山昇 はい、はい。9月23、24日。  
今と違うのは、大神宮のときは、おみこし担ぐ人は、近衛兵みたい  
にイケメンで体格のいい青年。して、これを1カ月ぐらい、賄いし  
て、鶏肉食べさせたり、牛肉食べさせたりしてね。  
聞き手 えっ。そうなんですか。  
沖山昇 運動会の部落で賄いして、牛汁とか豚汁とかってからね。そういう  
ことをしてからに、担いでもらったんですよ。  
聞き手 力をつけさせて。  
浅沼拓道 アスリートですからね。

聞き手 (写真を見ると) 何かすごいもんね、体が。  
浅沼拓道 もう、ムキムキムキ。  
沖山昇 ふんどししてるだろう、ふんどし。これが選ばれた青年。  
聞き手 誰が選ぶんですか。  
沖山昇 会社が。  
聞き手 会社が選んで、飯を食わせるのも会社ですか。  
沖山昇 笹本さんって言ってね。会社と懇意にしている人が。  
聞き手 笹本さん、ああ、お隣のこの方ですか。  
沖山昇 はい。お隣のササモトさんのおうちでやってました。会社から頼まれて、請負してたんでしょね。  
聞き手 ムキムキの元気になった青年たちが担ぐんですね。  
沖山昇 今は交代して担ぎますでしょう。あのころ交代しないで、ずっと担ぎっぱなしですから。やっぱり体力は要りますよ。  
聞き手 当時、お神輿はかなり広い範囲を回ったんですか。  
沖山昇 学校、会社から、港区までは行きよったですね。  
聞き手 港まで行ったんですね。  
沖山昇 会社の本社があるから。戻ってきて、学校回ったりして、大神宮。これだけしか歩ききれないですよ。  
聞き手 すごいですねえ。  
沖山昇 戦後は、島中、各部落を回ったですけどね。交代交代しながら。車があるようになると、最初は担いで、あとは、車にお神輿を乗せて行って、各部落で降ろしてもむと。わっしょいわっしょいして。これが幾らか続いたですね。そのうちに、交通法で縛られて、これはだめつつて。  
聞き手 お祭りの構成は今とそんなに変わらないですね。1日目にお神輿やって、演芸会があつて。で、2日目に相撲、奉納。  
沖山昇 うん、構成は一緒です。  
聞き手 昇さんの子どものころ、大神宮祭の演芸会はどこでやってたんですか。  
沖山昇 大神宮でではなかったですか。戦後は、何回かは大神宮でやりましたがね。お神輿を入れてる倉庫の辺りに舞台をつくってだが、もう向こうではしないようになったです。

聞き手 公民館前で、やられるようになったんですね。  
沖山昇 公民館前ね。

#### <運動会>

浅沼拓道 運動会はかなり大規模そうですね。  
沖山昇 運動会ね、学校でやりました。うちらが小さいときは、柱立てて、100メートルコースに。柱立てて、ロープをこう引いてコースつくったんですよ。今はもう、柱は取り除いてますけどね。線引っ張ってやっていますでしょう。

聞き手 柱の近くを走るの、結構危なかったって話がありますね。  
沖山昇 子供たちが多し、入っちゃいかんっていうこともあったんでしょうね。犬もいっぱいいましたしね。犬が乱入したら、(飼い主がいる) その部落から減点しますよということをやられましたから。だから、飼い主は一生懸命、確保しないと、部落の人に対して申しわけない。

聞き手 運動会は、部落対抗ですか。

沖山昇 部落対抗で。

聞き手 みんな会社が主催しているんですよね。

沖山昇 戦前はね。

#### <映画鑑賞会>

聞き手 映画の上映会が楽しみだったという話を聞きますが。

沖山昇 ああ。映画もたまにありましたねえ。私、無声映画というのは見ましたよ。弁士がついたのね。

聞き手 どこで見られたんですか。

沖山昇 会社のテニスコートで。弁士が上手に映像と同じように話すもんだから、すごいなと思いましたよ。

聞き手 それはお幾つぐらいのころですか。

沖山昇 私が小学校のころですよ、戦前だから。

聞き手 テニスコートのあたりに、人が結構集まるんですか。

沖山昇 島中から、牛車で。

聞き手 千何百人も集まるんですか。

沖山昇 集まりました。テニスコートは、もう周りまでいっぱい。  
聞き手 空の下でやってるんですね。  
沖山昇 ちょうど昔から同じようなあれがあるでしょう。丸太を立てて、テ  
ント張って、」幕立てて。  
聞き手 映画の上映会は、年に1回必ずあるということではないですか。  
沖山昇 年に1回は必ずということじゃないです。たまに。  
聞き手 たまに、降って湧いたように上映会があるんですか。  
沖山昇 そうそう。

<郷友会>

聞き手 ほかに、何か行事で覚えておられることってないですか。  
沖山昇 会社の郷友会。下坂のお風呂場があるでしょう。あれからちよつと  
中に入ったところに、もとの別荘、ゴルフ場跡ね。あっちで、シンメ  
ー鍋で牛汁を炊いて、(出身の)村ごとに郷友会ちゅうのやって。  
何年生だったかな私、はっさみよー、牛汁がおいしかったこと、ほ  
んとに忘れられない。  
聞き手 郷友会は、沖縄出身者だけではなくて、八丈の方も。  
沖山昇 八丈と内地の人は少ないから、伊平屋、伊是名の人と一緒に。  
南大東は伊平屋、伊是名が大勢いるんですよ。北大東は漁師しかい  
なかったから。  
聞き手 そういう意味では、本当に沖縄の出身者と八丈出身は分け隔てな  
く一緒にやっていたんですね。  
沖山昇 分け隔てない。沖縄の方は、八丈語を一生懸命習うし、私なんか方  
言一生懸命習うし。かえって私なんかのほうが方言が上手になっ  
たりして(笑)  
聞き手 郷友会は、何度かやられたんですか。  
沖山昇 毎年1回ありましたよ。  
聞き手 毎年1回。郷友会ごとに集まるのではなくて、会社が主催して。  
沖山昇 そうそう。式典はどんなにしたかわからない。子どもでね。  
聞き手 その前に総会みたいのがあって。  
沖山昇 あったでしょうねえ。所長の訓示とか何とか。ただ、飲み食いでは  
なかったと思うから。

聞き手 紀元 2600 年のころは、特に何かイベントをしましたか。  
沖山昇 旗行列だったかね。  
聞き手 それは覚えてらっしゃいます。  
沖山昇 覚えてる。「きげんはにせーんろっぴゃくねんっ」で言って、行進した覚えがある。  
聞き手 2 学校で歌っていたんですか？  
沖山昇 記念日に歌ったわけ。行進するとき。多分学校から行かされて、やったんでしょうね。

#### <製糖工場>

聞き手 昇さんのおうちのあたりは、工場で言えば第 1 工場ですか。  
沖山昇 第 1 工場。  
聞き手 製糖作業をしているときに、子供はそこに行けるものですか。  
沖山昇 子供は行けないです。行けないけれども、思い出がありあます。砂糖の汁を煮詰めて、黒い飴になってますでしょ。して、攪拌して、これを黒糖にするわけだから。攪拌するときに、まだどろどろのときにね、サトウキビをきれいに洗って皮はついたままで、「飴頂戴っ」で言ってから行くと、これを、こんなして（鍋に入れてかきまわして）くれるわけですよ。そこに飴がつくでしょう。これをもらって食べたというのがね。うっかりするとやけどするんですよ。  
聞き手 子供が作業中に行くところですか。  
沖山昇 すぐはくれない。危ないから帰れー、どけどけーっちからね。大変ですよ。  
聞き手 結構殺気立ってる現場なんですね。  
沖山昇 子供っていうのはもう見たいでしょう。サトウキビを機械が噛んでいくところなんかもねえ。して、汁が出る場所なんか、もう見たくてしょうがないですからね。それから、砂糖がたぎっているところなんかもねえ。見たいんだが、危ないから来るなというふうに追い払われるわけだから。だから、弁当を持って行くぐらいしかありません。  
聞き手 製糖期には、農家がみんな集まってそこで製糖作業してるわけですよ。

沖山昇 そう。キビ刈りする人、機械で絞る人、炊く人、まきの準備する人。絞ったあとの殻をね、大きな大きなヤードで干してから、倉庫に入れて、これを薪で燃やすわけでしょう、煮詰めるために。

聞き手 第1工場の農家の方がそれを役割分担してやるわけですね。

沖山昇 はい。工場に勤める人は誰、誰、して、工場長ってというのがいて、決めるわけですよ。

聞き手 そのころの、第1工場長は。

沖山昇 テラダトウイチロウさんもいたし、オニヅカフジさんもいたし、沖山守身もいたし。

聞き手 それは持ち回りみたいなもんですか。

沖山昇 そうでしょうねえ。その連中が決めるわけでしょう。あんた今度やりなさいという感じで。

聞き手 町会長みたいなもんですねえ。

沖山昇 部落長みたいなもんです。

#### < 燐鉍山の記憶 >

聞き手 子供のころは、あまり港区のほうには行かれてないと思いますが、子供のころの記憶として、燐鉍山について覚えていることはありますか。

沖山昇 戦前は燐鉍のことは知らなかったですね。

聞き手 ほぼ行ったことがない感じですか。

沖山昇 ただ、人がバ이스ケで、土を入れていると。こういったのはうちから見えよったですよ。

聞き手 お家からでも、燐鉍採掘をしている現場が。

沖山昇 現場が見えよった。

聞き手 そういう働いていた風景は見たけれど、港周辺には。

沖山昇 余り行けない。

聞き手 出張所に買い物なんかに行けば、当然その周りはお覧になっているんでしょうけれど。

沖山昇 レールが右往左往に引かれているとか、茅葺き屋根がいっぱいあるとか、こんなことしかない。

聞き手 建物の形とかそんなの余り覚えていないですかね。



沖山昇 住宅街は茅葺き屋根だし、それから、施設は、貯鋳場とかね、トタン葺きでしょう。ボイラー室とかね、1号から4号倉庫まであるとか。こういったもんですね。それと社宅。

聞き手 社宅に遊びに行ったとかそういうことも特にはないですか。

沖山昇 孝おじいさんが海岸に勤めているころ、社宅にいましたから、そこに行ったことはある。

聞き手 孝さんのいた社宅というのは。

沖山昇 孝おじいさんの社宅はね。この4軒長屋ですかね。

聞き手 じゃあ、16号に住んでおられたんですね。

沖山昇 そしたらねえ、農家の子供でしょう。はだしでしょう。もう、家にも上げない。ひもじい思いはしているもんだから、御飯を持ってきて、お茶ぶっかけて、して、玄関で座って、はい、ここで食べなさいってから。家にも入れないで。こんなして食べたことある。

沖山昇 それからもっと小さいとき。

聞き手 はい。

沖山昇 うちのおばあちゃんが遊びに連れて行ったのかなあ。そしたらねえ、足も泥だらけの子供を、おじいさんが、おいでおいでしてからに、すぐ膝に座らして。して、はい、ラジオ聞きなさいて。だから、こういったのがただ2回だけあって。

聞き手 やっぱり港と池之沢くらい離れると。

沖山昇 何回も行くことできない。

聞き手 16号に住んでたということは、傭員扱いだったんですね。海岸係ということで。

沖山昇 そうそう。社員ではない。

#### <病院のこと>

聞き手 病気になって、お医者さんのところに行った記憶はありますか。

沖山昇 うちの母が入院していたことはよく覚えています。腸チフス。

聞き手 チフスは流行ったって記録があります。

沖山昇 そいで、牛乳を搾って一生懸命運んだね。避病棟にいるもんだから。

聞き手 あ、避病棟に入られたんですね。結構長く入院されたんですね。

沖山昇 1カ月ぐらいはいたんじゃないですか。

聞き手 避病棟があったってことは戦前ですよ。

沖山昇 戦前ですね。

沖山昇 戦前。私が小学校のころだから。牛乳絞って、沸かして、持ってったわけだから。病院までに行くのを観音坂通っていくでしょ。ちょっと怖かったですから。

聞き手 ああ。一人で歩いていくわけですね。

沖山昇 怖かったですよ。戦前の小さい頃。もう5, 6年になったら一人前に仕事させられたですからね。

聞き手 ふだんは、ちょっと風邪引いたりすると、病院には気軽に行けましたか。

沖山昇 ああ、気軽に行けました。

聞き手 当時の先生にみてもらった覚えもありますか。

沖山昇 あ、ないですよ。後藤先生しても外で見たばかりなのに。病院で診察受けたのはちょっと覚えてない。戦後にね、おばあちゃん、うちの母の親、の胃が悪くて、採鉱事務所に勤めているときに薬もらいに行ったことはある。

聞き手2 予防注射とか、健康診断とか。

沖山昇 予防注射、健康診断なんかないですよ。子供だから覚えてないねえ。

聞き手 社員じゃなくても、小作人でも、農夫でも鉱夫でも、病気になれば、病院には行きましたか？

沖山昇 ああ、行けたんですよ、うん行きよった。

聞き手 敷居が高かったわけではないんですね。

(このインタビューに先立って、村では戦争体験に基づく紙芝居を制作するために、紙芝居作家のさどやんと村教育委員会が、沖山昇さんから戦争体験に関する聞き取りを行っている。本インタビューは、この聞き取り記録を前提に行っているため、その全部を掲載する。)

沖山昇さんからの北大東島の戦争についての聞き取り記録

201\*年\*月\*日

聞き手：さどやん（佐渡山安博）、北大東村教育委員会教育課長 知花\*\*

沖山昇 北大東に兵隊さんが来たのは昭和19年4月頃で、先ず西港に着いて、今の県道を通って学校に向けて来たんですよ。私たちは子ども(中学2年の年)ですから、学校で待っていた。観音坂から列をつくって、兵隊さんがタッタカタッタカ下りてくるんですよ。

兵隊さんが小銃担いで、進軍ラッパを鳴らしながら行軍してきた。最初は一個中隊が来ました。柴田隊の兵隊が来たんですよ。一個中隊は大体175名だそうです。7月に須永大隊が来ました。それで、最初来た柴田隊は南大東に引き上げた。

残った須永大隊が北大東を守備した。本田隊がこの辺(\*\*\*\*)を守備。竹林隊(後に浅井隊)が港区あたりを守備。上田隊が北港から島の真ん中の方を守備。白崎隊がこの辺(\*\*\*\*)。こういうふうに、陸軍の中隊が4箇所ですべて島を守っていた。

学校の講堂を宿舎としたわけですね。須永大隊の本部は学校の職員室、他の兵隊達は講堂を利用した。学校一箇所では間に合わないのので浅井隊は港区方面に兵舎を造った。上田隊は学校を利用した。白崎隊は4工場あたりに兵舎を造った。

これらは土地を守備する隊で、その他に、小林隊が銃器中隊、上村隊が大隊砲隊、岡田隊が連隊砲小隊、浅田隊が通信隊。島全体に分かれて駐屯していた。陸軍は約千名。

それで仕事ができない女、子ども、お年寄りは引き揚げた。仕事できる戸主(お父さん・65歳以内)だけが残った。

私は、昭和19年4月に尋常小学校高等科を卒業。校舎は兵舎になっているので、式は(学校前の)松林の中で行った。卒業後は、兄貴と交代して、兵隊さんのための水汲みをやった。

在学中は、勤労奉仕で兵隊さんの玉磨きをしたり、陣地構築するための材料に使う松の皮を剥いだりした。同級生は40から48名位いました。結構人数いました。

聞き手 残っていた子ども達は中学生以上でしたか？

沖山昇 私たちが何故北大東に居たかという、沖縄県出身者や内地本土から来た人は全て疎開したんだが、私たちは八丈島から来たでしょう、だから私たちは疎開しなくとも良いと、残してくださいとお願いしまし

た。何軒か残してくださいました。

聞き手 だから島で戦争を体験されたんですね。

沖山昇 8月15日が終戦でしょ

8月1日から8月15日に、島の先輩が15日間の教育招集、訓練を受けた。次は、一番若い我々の番で、8月16日から25日までの10日間だった。戦争が終わったにも関わらず、小銃かついで訓練したんですよ。それだけ北大東村は情報不足でした。アメリカさんは携帯電話で戦争していました。日本軍は人間発電機でモールス信号やっていました。

陸軍は毎日どうしていたかという、学校を本部として、港につながる道を造ってました。幅1m50cmから2mの交通壕を毎日毎日掘って。人間が弾薬をかついでいくところを。

聞き手 交通壕は残っていますか？

沖山昇 ブルで埋めました。埋めた年は明らかに憶えていません。

畑は畑でなくなっていました。みんな壕を掘られた状態で、キビ畑はみんなサツマイモ畑に変えられて。陸軍の兵隊さんが千名もいるわけだから。朝から晩までサツマイモ植える、掘る、炊事場に運ぶ。こういう状態でした。

私たちも8月16日から26日の10日間の食料は、細いサツマイモ5、6本が主食でした。野菜はサツマイモの葉を塩でもんで、コーコみたいにしたもの。これが食料でした。

だから、兵隊さんは苦しい思いと、ひもじい思い、交通壕堀の重労働、これが大変でしたね。

交通壕を海際までつないだところに、上陸しそうな所に向けて、岩を割って水際陣地を造り、機銃を置いていた。

昭和19年には、海軍が500名で配置された。高角砲隊で飛行機を打ち落とすためにね。高角砲は3箇所に分けられました。1箇所は灯台の所に鈴木隊が大砲4門を据えました。井上隊が名嘉重雄宅の一带に4門、西浦隊が宗伸道路のところに4門、計12門の高角砲を整備した。池辺隊が軽迫撃砲、曲射砲と言ったかな、山を越えて港に攻撃する大砲ね。瀬戸口隊が12cm水面砲。大田隊が8cm水面砲。江副隊が飛行機を照らす探照灯、赤池側の空き地に発電機据えてね。

聞き手 武器は西港から上がったんですか？

沖山昇 港は西港の1ヶ所。燐鉱を積み出しするために造ったもの。

聞き手 その時もクレーン？

沖山昇 据付クレーンで港に据え付けられていた。マストがね。荷役する時はデリックを取り付けた。

25mm機銃を9丁、黄金山の廻り、一番高い所に配備。13mm機銃6丁、7.7mm機銃4丁も持っていた。敵機が襲撃したものだから、灯台から機銃を撃って、飛行機1機が北海岸沖に墜落したということが1回だけあった。アメリカさんはパラシュートで脱出するでしょう。そうしたら、海に浮いているのを水上機が来て救助して行った。灯台の掲揚を利用して本部の監視哨とした。各隊が小高い山に監視哨を設けていた。

聞き手 昇少年は機銃を運んだりしましたか？

沖山昇 機銃ではなく、戦争中は牛車にドラム缶3本積んで井戸から水汲み。兵隊が一人付きました。兵隊さんの炊事場にはドラム缶が2、30本並んでいて、朝から番まで一生懸命汲んで入れて、晩までにはいっぱいさせて、一晚沈下させ、朝から兵隊さんが使う、使った後から足してゆく。水汲みがいっぱいになったら、陣地構築のための松の皮を剥いだ材料の運搬だった。

北大東に初年兵がいたんですよ。19年の10月頃に現地入隊というのがあり北大東17名、南大東21名の計38名が初年兵になりました。二等兵ですな。これを訓練していました。北大東の17名の中に漁師がいたんですよ。この人たちは訓練しないで、天気がいい日は、漁獲班になりました。（獲った魚を）私が牛車で運びにいくわけ、各部隊に配給した。

聞き手 兵隊さんが来ることは事前に知らせがあったんですか？

沖山昇 子ども心ながら、兵隊さんが来るということで、学校で待機していました。

聞き手 昇さんには戦争とはどんなものだったですか？

沖山昇 戦争というものが解らなかった。兵隊さんを見ただけで、素晴らしいなど。昇、お前は大きくなったらなんになるか、兵隊さんになりますと言ったら、偉いと褒められました。今だったら考えられない、そん

な教育ばかりだったですから。

聞き手 疎開で別れた同級生等のことをどう思いました？

沖山昇 戦争自体がどんなものかも解らないから、自分の生まれた島に帰るんだなとしか思わなかった。

聞き手 最初に攻撃があったのは憶えていますか？

沖山昇 なんで攻撃されたかという、長幕の内側に人工洞窟を掘っていて、陸軍の病院、縫製工場、弾薬庫、重機庫、避難壕があったので、飛行機が低空飛行してきて機銃掃射された。これを、灯台の陣地が迎え撃つ仕組みだった。

爆弾は、家の近く、兵隊の待機場があった所に落ちました。大きな爆弾が落ちたのは南区の畑で、窪地になったものだから爆弾池と呼ばれた。これは基盤整備で無くなった。牛が機銃でやられた事が何回かありました。

飛行機が通ったので完成した高角砲で撃ったがはるか上空なのであたらない。暫く時が経ってからに艦載機が20、30機来て島中機銃掃射になった。それから大変だということで、敵機が通っても撃つなということになってね。それで撃たなくなったら、敵機は飛来しなくなりました。

聞き手 魚雷で舟が沈んだと聞きましたが。

沖山昇 西港付近で。燐鉱船（2000トン級）が生活物資を積んで係船している時に、1発の魚雷でやられ轟沈した。2発目は沈んだ舟の上を通過して、岸（燐鉱栈橋）にぶつかりヒビが入った。そこは、台風の度に削られて今は湾になっている。

江崎港付近に待機していた船も魚雷で沈められたが、その時、事務長が一人上陸してたんですよ。したら、その事務長は兵隊さんにスパイだと疑われ内地に送られた。大変だったそうです。

終戦間近は、島の廻りは潜望鏡だらけでした。

聞き手 魚雷で沈められた船の乗務員は助かったのですか？

沖山昇 みんな全滅だと思う。わからないが。大東の人は舳をぶんなげて泳いで上がった。4人乗りの舳に乗っていた舟夫の1人が、泳げないのに海に飛び込んで亡くなった

聞き手 島が上陸しやすい所だったら上がってきていますよね？

沖山昇 後から聞いた話だが、上陸なんか簡単だったそう。軍艦1隻あれば爆弾で岩を砕き、水陸両用で上陸できた。

聞き手 戦争の期間というのは？

沖山昇 兵隊が上陸してから、僅か1年と5ヶ月で終戦になりました。

聞き手 終戦はどのタイミングで知りましたか？

沖山昇 教育招集を受けた時に、15日間やるべきが10日間になった時にわかった。兵隊さんの引き揚げ船が来たときは見送ったが、大変でしたよ。憎しみというのか、階級の下の方の兵隊が上級階級をいじめて、いじめられたから逆にいじめて。港で喧嘩して班長の荷物を海に投げたりした。班長達はビクビクしていた。

聞き手 威張る後ろ盾が無くなった？

沖山昇 どんな訓練をしたかという、あっちからリヤカー引いてくるのですよ。リヤカーを戦車に見立て。爆破（自爆）できる人を出させて、ビール箱を持たせてね、リヤカーの下に投げ込み、その場所に伏せた。学校の運動場では、匍匐前進してね、皮が剥げ油がにじみ出て、大変な訓練でした。訓練は朝から晩まで、休憩はさんでね

聞き手 ご自身が訓練された話をお願いします。

沖山昇 小銃がついで巻脚絆を履いて、雨降りは足袋に土が付いて歩けないものだから、小銃も重くてかつげないものだから、班長さんががついでくれました。

聞き手 行進は月に何回ありましたか？

沖山昇 1年あまりのうちに1回か2回あったかね。学校の運動場の端から端まで中隊毎に並んでいました。職員室を前にぎっしり。陸軍ね。

聞き手 兵隊さんは馬も持ってきましたか？

沖山昇 持ってなくて、全員歩いてました。須永大隊長にうちが馬を貸したが10日くらいで返してきました。腹痛をおこして、ワラでお腹を擦った。父親が獣医の端くれだった。

聞き手 食糧の貯蔵庫は何処にありましたか？

沖山昇 池の沢の洞窟、正己さんの畑の上の洞窟、大正村の洞窟を利用していた。

聞き手 兵舎は島にある木で造ったんですか？

沖山昇 燐鉱石貯蔵庫を壊したりして。相当の材料だったので、その材料を使

用して長幕のふもとに兵舎を造った。貯蔵庫の上屋は、戦後は再建した。

聞き手 戦争中に祭はありましたか？

沖山昇 戦争中は無かった。戦前6年生の時はありまして、相撲甚句をやりました。染井幸信のお父さん、染井初次郎が相撲甚句の歌える人でした。

聞き手 いまでも歌えますか？

沖山昇 青年の頃は憶えていましたが、忘れてしまいました。

聞き手 兵隊さんがほっとする時はなかったのでしょうか。例えば娯楽をやるとか、難儀な仕事をおいといて楽しみができることはあったのでしょうか？

沖山昇 娯楽は無かった。生きるのに精一杯だった。

聞き手 北大東は戦争が激しくなかったので、余裕が持てたと思いますか？

沖山昇 生活するのに精一杯。交通壕を掘っていたのだが、まだまだ小さい。それから円帯壕（1 m × 1.5 m位の深さ）というのもあった。道の側には、みんな円い壕を掘って空襲があった時に入るもの。兵隊さんの娯楽ねー、無いよー。青年学校の銃剣術、木の小銃を作ってから先に布を巻いてから胸を突くやつ、銃剣と短刀もあった。子ども達の遊びに軍艦遊戯、軍艦駆逐、水雷艇（人に名前を付けて追っかける遊び）があった。

#### <積出船の沈没>

聞き手 戦争中の話はですね。以前、紙芝居をつくるときにかなりいろんなことをお聞きしてるんですけど、幾つか確認をしたいと思います。まず、昭和19年3月に、燐鉱船の沈没がありますけれど。

沖山昇 4月1日だったですか。

聞き手 そうですね。

聞き手 沈没は、2回ありますよね。

沖山昇 1回は西港ですけど。2回目は江崎港の沖ね。

聞き手 戦争の被害っていうのを一番最初に感じたのは、燐鉱船の沈没からですか？

沖山昇 これが最初です。それから、兵隊さんが派遣されたんじゃないですか。ああ、戦争ってこんなしてやるんかってからね。アメリカの潜



水艦がいて、うようよと、潜望鏡が見えるわけですから。

聞き手 うようよという感じですか。

沖山昇 あっちにもおる、こっちにもおるといぐらい。

聞き手 積み出し船が沈没するちょっと前ぐらいから、そういうのがうようよ来るようになって、積み出し船に魚雷が当たるとい事件が起こるんですね。昇少年はそのとき。どこにいらっしやった？

沖山昇 ちょうど卒業したすぐだから。船が沈んだときは、実家の土間で食事していたんですよね。したら、ドドーンと揺れたから。後から聞いたから、船が沈没したと。して、うちのおじが怪我をしたといことになってね。それでわかったんです。

聞き手 おじさんは海岸係として監督してて。

沖山昇 そう。そして、船を係船しに行ったと。ワイヤーかけに。そしたら、吹っ飛ばされたって。

聞き手 積み出し船も係留するんですかね。

沖山昇 係船ブイがあって。これにもやいをとる。今度は、陸（おか）にもとるでしょ？陸に引きつけるために、沖に流れないようにと。船がやられたもんだから、ロープ引っ張っていたおじが吹っ飛ばされた。はしけの人は、漕いでいると遅い、間に合わないから、海に突っ込んだわけさ、みんな。泳げる人はよかったわけよね。泳げない人まで飛び込んでしまっってね。亡くなったんです。

聞き手 相当亡くなった方はいらっしやるんですね。

沖山昇 だから、はしけに乗っていて泳げなかった人が一人。

聞き手 積み出し船に乗っていた方は、かなりお亡くなりにな。

沖山昇 もう、みんな終わり。2000 トン級の船だから相当なもんですよ。轟沈ですからね。

聞き手 そのときに亡くなられた方の名簿とか、慰霊碑とかっていうの、特にないすよね。

沖山昇 わかんないすね。会社が持つてるかもしれんすけどね。

聞き手 記録にないみたいで。実際にその被害の状況を見に行っってはいないすね？

沖山昇 うちに行っってない。ドドーンしてから初めてわかったんすから。おじが怪我したといから、初めてわかったわけだから。

まだちょうど 14 歳か 15 歳ぐらいでしょう。今の中学 2 年生ぐらい。卒業してすぐじゃない？ 3 月卒業だから。4 月 1 日で入学式やろうっていうときだから。

聞き手 海に潜望鏡がうようよしている状況は、ごらんになった？

沖山昇 これは見ました、はい。

聞き手 それは港に行って？

沖山昇 いや、山から見えるから。

聞き手 沈没したときに長幕に上がって様子を見に行くということはしてないですか？

沖山昇 そのときは、やってない。

#### <守備隊の上陸>

聞き手 その直後に守備隊の上陸があるわけですけど、守備隊が上陸してきたときに昇少年はどうしていましたか？

沖山昇 学校にいました。

聞き手 高等科を卒業した後ですね。

沖山昇 卒業した後でね、きょうは兵隊さんが来るよーつつったもんだから、学校にいたんですよ。

聞き手 それは集められた？

沖山昇 いえ。学校に見物に行って。そしたら、観音坂、いまのハマユウ荘の前からね、ラッパをトッテッチッテッターって吹きながら、行軍して来るし。は一、日本の兵隊さんすばらしいなーと思ってね。

聞き手 みんな旗を振ったわけではないんでしょう。

沖山昇 そうじゃなくて、島の人みんな静かに見てた。

して、学校明け渡しでしょ。学校はすぐ兵舎になったから。

聞き手 守備隊が来るってことで、その前に島の中では何か騒ぎがありましたか？

沖山昇 兵隊さんが来るそうだから、それは楽しみにしていたんです。

あのころはもう、兵隊さんなるっていうのは、夢みたいなもんですからね。戦争終わってからかね、そんなばかな考えするなっことになったんだけど。

聞き手 守備隊がやってきて、その直後に引き揚げが始まるわけですか？

ど。

沖山昇  
聞き手

あー、疎開ね。  
記録によると八丈出身者はほとんど引き揚げをしてないとありますが。

沖山昇  
聞き手

してない。  
で、社員と沖繩出身者が帰っていった。

沖山昇  
聞き手

して、残れる戸主だけは残ったでしょ。  
戸主？

沖山昇  
聞き手

お父さん。働ける人。  
八丈出身者は、全く、引き揚げなかったですか？

沖山昇  
聞き手

引き揚げた人もいますよ。引き揚げた人もいるし、我々は、親が向こう行ってももう何も無いよって言う考えでしたから。

聞き手  
沖山昇

八丈に引き揚げるとっていうことは、もうないですか？  
うん、ないですね。うちの長男が、いま東京ですが、結婚して籍を移すときも、おまえ北大東で生まれたんだから、思い出に本籍は北大東にしたらと言ったら、だめ、自分は東京都にするっつってね、私が言うの聞かなかったですよ。

聞き手  
沖山昇

八丈の方の多くは引き揚げしなかったんだけど、残った人の中には、沖繩出身者も残られて。戸主の方は残って。

沖山昇  
聞き手

家族はみんな疎開して、働ける人は残った。して、勤労奉仕みたいに軍作業を行いました。

聞き手

それで700名ぐらいまで減ってしまったんですね。

#### <貯蔵庫の取り壊し>

聞き手

当時、学校も兵舎として提供していて、それでも足りなくて、いろんなところが兵舎になったということですが、貯蔵庫も兵舎に利用したっていうことを聞きました。

沖山昇

あれは、幕の麓に兵舎をつくる時の材料ですな。仮小屋をつくるための。

聞き手

あっ、貯蔵庫の建屋を壊したということですか。木造建屋。

沖山昇

兵舎の材料がないから。

聞き手

木造の建屋を壊して、幕下の兵舎を建造した。

沖山昇　　そうそう。  
聞き手　　そのときに貯蔵庫の上屋はなくなっちゃったということですか。  
沖山昇　　艦砲射撃でやられたっていうのもありますけど。  
聞き手　　その前にもう、かなり取り壊していたんですね。  
沖山昇　　ほとんどね。  
聞き手　　木造部分はかなり取り壊して、兵舎のほうに使っている。だから、石積みと下のトンネル部分だけが残っている。  
沖山昇　　それを戦後また直して。  
聞き手　　艦砲射撃でやられる前に、ほぼ木造の上屋はなくなっていたと思っ  
ていいですか。  
沖山昇　　全部は使わなかったはずですからね。  
聞き手　　多少は残っていたんですね。  
沖山昇　　多少は残っていた。  
聞き手　　艦砲射撃でやられて、もう焼けちゃったという感じですか。  
沖山昇　　焼けてはないでしょう。火事にはなっていない。  
聞き手　　火事になったのは、砂糖倉庫だけですか。  
沖山昇　　そう。あれは、機銃掃射ですから。曳光弾の火吹く弾があるでし  
よ？あれで入っていた砂糖がみんな焼けてしまった。  
聞き手　　貯蔵庫がどのぐらい壊れたかっていうのは目撃はされていない？  
沖山昇　　目撃してないですね。

#### <戦争中の祭り>

聞き手　　あとですね、昇さんの話で、戦時中は娯楽はほとんどなかったよっ  
ていうふうにお話しされていたんですけど、記録によると、昭和19  
年にも大神宮祭をやっているようなんですね。それは記憶ありま  
すか。  
沖山昇　　昭和19年。  
聞き手　　守備隊が来た後に、大神宮祭をやっている記録があるんですけど。  
沖山昇　　ありましたかね。  
聞き手　　戦時中でもやったんだなーと思って、感心したんですけどね。余り  
記憶にないですか。  
沖山昇　　そうね。記憶ないな。

聞き手 あと江越所長が来られて、金刀比羅宮をつくった。そのときは、何か記憶ありますか。

沖山昇 これも話聞いただけですね。

聞き手 農務係だった井上昇さんの日記で、昭和 19 年のなぜか 11 月です。22 日に大神宮おみこし、23 日に式典、相撲、芝居とあります。

沖山昇 これ 11 月ですか。

聞き手 11 月の 22、23 でやってるんです。

沖山昇 何でまた 11 月かね。9 月はどうなっている？

聞き手 9 月はやってないです。9 月には、江越所長が来られています。このころ何かやれない事情があって、延びてこの辺になったのかなと思って記録を見たんですけど。

沖山昇 いやー、ちょっと記憶ないな。もう卒業してすぐだから、相撲もとらないし、だからもう無関心だったんですかね。

聞き手 無関心だったんですか（笑）

沖山昇 生徒のときは、背が高いもんだから、背の順で体格のいい連中と当たって、いつも投げられ役だったから。

聞き手 昇さん背が高かったんですか。

沖山昇 背が高かったですよ。私はひよろひよろだしね。ほかの沖縄出身の方、もうすごいんですよ。背の順に組み合わせだから、強い人と組んで、もう投げられ役、毎年。

#### <得意だったこと>

聞き手 昇少年は何が得意な少年だったんですか。

沖山昇 私は得意というのはないですよ。

聞き手 お料理は上手なんでしょうけど。

沖山昇 これは母のお手伝いだから。

聞き手 勉強はできる？

沖山昇 まあ、習字。習字をやって貼られるのはね。

聞き手 字のうまい少年で。

聞き手 運動は？

沖山昇 運動もいいほうだったですよ。力があるほうではなかったから、相

僕は負けたけど。走ることはよかったですよ。

聞き手

足速かった。勉強も？

沖山昇

まあまあというところだね。一回、席次が11番まで落ちたことがあります。もう、びっくりしてね。それからまた一生懸命巻き返して、5番以内には入ったんですけど。

聞き手

やっぱり優秀ですね。

聞き手

子供のころから理数系が得意っていうことはありますか。

沖山昇

もう全科やりましたからね。

聞き手

後に高校で電気科に入る片鱗はあるんですか。

沖山昇

あれは、一つ理由があるんですよ。採鉱事務所に勤めていて、先輩がトロッコを巻き上げるモーターを操作してるんですな。して、スイッチでこうやるわけですよ。スターデルター式つつつね、力をだんだん強くしていって、モーターを回す装置なんです。こんなしてモーターは回るんかというあんばいでね、電気全然わからんから、珍しいなと思ってやってたんです。その時、弟に工業高校ができたから行かんかという話があったけど、自分は行かない、漁師で過ごすということで、私に行かんかっていうから、行きますっていうことになって。じゃあ、何を勉強するかっていうから、このモーター回すのが好きだから電気科に行くつつつ。

私は採鉱事務所で、事務整理しながら勉強してたんですよ。会社の方が、全科参考書っていう、いろんな科目ごとの参考書を持ってきて、おまえは事務所勤めだから、これ勉強しとけつつつてからに、これを一生懸命やってた。3年、4年目にですね、工業高校の話が来たんです。

聞き手

鉱業所で見えたものに興味を持ってってことなんですね。

沖山昇

はいはい。こんなしてモーターは回るんかって珍しくて。

<所長と大隊長>

聞き手

当時の、島で偉い人といえば、江越所長で守備隊では須永隊長がいらっしゃったんでしょうけど、隊長とか所長とかっていうのは、子供から見るとどうでしたか。じかに見たことはないですか？

沖山昇

須永大隊長には会いました。なぜかっていうと、うちで馬を養って

ましたから、大隊長に馬を提供したんですよ。

聞き手 馬もいたんですか。

沖山昇 馬1頭いました。

聞き手 牛小屋にいたんですか。

沖山昇 うん、牛小屋のところに。

聞き手 で、馬をスナガ隊長に提供されたんですね。

沖山昇 提供しなさいっていうもんですから、提供した。だがもうね、向こうで養い方が悪かったんでしょ。体調崩して、すぐ返されたんですよ。

大隊長さんのおうちは、今の保健センターあたりですから、そこから学校に通うだけのことで乗ってたんですよ。小さい馬なもんだから、あんな大きな人が乗るもんですからね、それで体がもたなかったんじゃないですか。

すぐ、草食わなくなったして、返してきてましたよ。したら、うちの親父は獣医の心得があるもんだから、おーっし、来た、はいはい、みんな集まれってからに、わら持ってこ、わらつつって、わらでおなかを一生懸命こすれつつってね、一生懸命こすって元気になったんですよ。

聞き手 元気に戻したんですね。それはすばらしい。

沖山昇 元気になってね。それでもう、提供しなかったですけどね。その馬がどうなったのか、わかんない。那覇に持っていったのかな。こっちで死んだっていうのは聞かないしね、殺したっていうのも聞いてないし。

聞き手 馬は荷物を引いたりするための馬ですか。

沖山昇 誰からか譲り受けたんですよ。

聞き手 何に使っていたわけでもない？

沖山昇 何も使ってない。

聞き手 ただ飼ってた？

沖山昇 飼って、養ってただけ。珍しくてね。うちの父も珍しがりやだから。

聞き手 須永隊長との直接の話は、その馬を提供したときに。

沖山昇 見てるだけ。別に話もしない、何もしないですよ。

沖山昇 所長も見ました。子供のころ、所長のうちにお正月に行って。  
聞き手 お正月に行くんですか。江越所長は19年に来られてますけど。  
沖山昇 待ってよ。江越所長でしょうね。  
聞き手 最後の所長。  
沖山昇 最後の所長。じゃあ、あれだ。うちのいとこの染井、母方の親戚のお姉さんが、その女中に行ってたんですよ。  
聞き手 あっ、所長住宅の。  
沖山昇 うん。そのお姉さんの妹が私の同級生だから。で、お正月と一緒に連れられて行って、ごちそう食べたことがありますよ。  
聞き手 ということは昭和20年のお正月ですね。  
沖山昇 そうそう。20年の正月。そのときはいろいろなものがあつたね、本当ね。ごちそう食べたんですよ。同級生のお姉さんがあそこで女中してたおかげで(笑)妹たちを連れてきて食べさせなさいって言われたのがきっかけで、隣にいたから私も行くことになってしまつて。  
聞き手 なるほど、お相伴にあずかつて。

<仲の良かった兵隊>

聞き手 戦時中にですね、兵隊の方と仲よくなったとか、よく話をした兵隊がいたとか、ということはありませんか？  
沖山昇 ありましたね。学校の校門のところには衛兵所というのがありましてね。2人が立っていてね。14、5名も待機していて。みんなが出入りするときにこう、合図するのがあるでしょう。  
そこでうちら、14、5歳ですからね。そこに遊びにいった。兵隊さんとお友達になって。そしたらみんなまた、かわいがりよつたですよ、子供たちをね。  
聞き手 結構若い兵隊さんですか？  
沖山昇 ええ。そうして友達になって。そしたら、金平糖とか乾パンとか、小さい布袋に入ったのをもらいよつたんですよ。もらったら今度、母がね、じゃあこれをお礼に持っていきなさいと言って、てんぷらをあげてよ。  
聞き手 何のてんぷら？



沖山昇           メリケン粉で。サーターアンダギーみたいなのですな。それからサツマイモをふかしてから、火であぶって焼き芋みたいにして、これをザルにいっぱい。14、5名だから、生半可じゃないですよ。これを持っていったらまた喜んでね。食料の少ない時期だから。

聞き手           そのときの兵隊の方で、後で交流が続いている方はいらっしゃいますか？

沖山昇           後で来た人は水くみで一緒だった兵隊さん。19年の3月に卒業したら、すぐ兄貴と交代して、兵隊さんの炊事場の水くみしたんですよ。井戸からね、馬車でドラム缶3つ積んで。そのときに兵隊さんも1人ついているんです。で、兵隊さんと2人で、私が井戸から水くんだら、兵隊さんはこれをドラム缶にこう入れる。こうして2人でリレーして、水くみやっていたんですよ。

沖山昇           その兵隊さんが何年ぶりかに来ていましたよ。(守備隊訪問の)何回目の時かね、私と水くみした兵隊さんは見えていないですかねって言ったら、あ、俺だよって言うてからにね、そういうこともありました。

聞き手           守備隊の戦後の訪問っていうのは何度もあったんですか。

沖山昇           何回もありましたよ。思い出になっているのが一番最初のとき。私は助役でしたよ。横断幕を書いてね。「歓迎、北大東駐屯…」って。役場の、前の建物の2階ですね。最初のことだからね、隊長も来ていましたよ。

聞き手           須永隊長？

沖山昇           いや、須永隊長じゃなくて中隊長。竹林中隊長だね。して、その時、おい、酒飲むなよ、酒飲むなよって言うてね、島民がどう思っているかわからんからっていうのでね。

聞き手           ああ、恨んでいるやつもいるかもしれないって。

沖山昇           もう悪さしたっていう人もいるわけだから。村民の感情がどうなっているかわからんって言うてからに、静かにしろよ、飲むなよ、飲むなよって言うてた。私はこれ聞いてから、何で、隊長、せっかくあんたもこうして元気になって帰ってね、そして島を、青年時代に過ごした島をね、見に来ているのに何で、もう戦争も終わったのに兵隊もくそもないですよって言うてからね、一緒に、歓迎会だけ

ら一緒にやりましょうって言ってから。ああ、ありがとうって言ってから、それから飲むようになって、こんなして、歓迎会したこともあります。

浅沼拓道  
沖山昇

灯台のところに、石碑建てたのはそのときですか？  
あれは最後のとき。陸軍 1000 名のうち、100 名までは見えていないですね。何十名かですよ。5、6 名とか、2、3 名とかして、7、8 回来ていますから。そして最後にあの碑を建てて行った。5 万円ぐらい預かって、これで管理してくれって言って。それから、賃金払って草取りさせたりしてずっと。今はもう予算はないから、自分で草取り。たまにね、月に一遍ぐらいですかね、まだ管理していますがね。名目は、観光地だから。観光のお客さん来るから、草生えていたら見苦しいからって言ってからに口実してやっていますが。

#### <戦時中の被害>

聞き手

戦争中は、燐鉱石の積取り船の沈没以外は、島民には死亡者はいなかったですか？

沖山昇

島民にはいないですよ。

沖山昇

兵隊さんで敵の被害で死んだという人は、私はわかりませんがね。兵隊さんは黙秘ですから。

聞き手

記録には少なくとも 1 人は亡くなったとあります。

沖山昇

あるけど私なんかはわからなかったですよ。

聞き手

島民の方々はそういう情報は全然知らされなかった。

沖山昇

わかっているのはあの一件。陣地構築が厳しくて起きたこと。水際陣地ってあるでしょう。

聞き手

あれはスイサイと読むんですか。

沖山昇

スイサイ陣地。そこでダイナマイト仕掛けてから、厳しく、いじめられた班長を落として。自分は海に泳いでずーっと行ってしまって、行方不明。自殺ですよ、要するに。この班長さんはかろうじて助かったって、爆発したのによ。

聞き手

そんな恐ろしいことが。

沖山昇

よっぽどこの受け身がよかったんでしょうね。石割るためにマイト仕掛けて導火線をこうやって燃やしてから、班長を押し込んだ

んだから、これ爆発するよ。それでも助かっている。  
聞き手 恐ろしい。  
沖山昇 こういったのが1人。もう1人は余り苦しくて自殺。  
小銃を親指でね、引き金を引いて。  
この2件しかわからないですね。  
聞き手 それは島民にもわかった。公表されたんですか。  
沖山昇 私が聞いた範囲のこと。こういうふうにして、兵隊さんが死んだよ  
って。  
聞き手 やっぱりそれは、環境が厳しかったんですね。  
沖山昇 また厳しかったですよ。兵隊さんでも、少尉さんは、うちに回っ  
てきては、そしたらお茶出しますでしょう。お茶菓子出して、一生懸  
命話して。そこに兵隊さんが来るんですよ。そしたら、貴様、何し  
に来たかって。何のためにこっち来たかって言ってからね。自分は  
そこでお茶飲んでいながら。  
聞き手 理不尽なことはいっぱいあったんですね。  
沖山昇 それから引き揚げるときに、みんなリュックサックに砂糖いっぱ  
い持っていくでしょう、お土産に。余りにいじめられた班長のリュ  
ックサックを探して海に捨ててやるとかね。港はもう騒動だった  
んですよ。憎しみ合いっていうのかね。兵卒が今度は上官をやる。  
聞き手 帰り際にいじめの仕返しを。  
沖山昇 おまえ、やったなということだね。かわいそうだった。これはもう  
惨めだなと思ったんですよ。  
聞き手 黒糖をリュックに詰め込んで持って帰ろうとしたら、液体になっ  
ていたって聞きました。  
沖山昇 あるね、そういうのも。始末が悪いからでしょう。ちゃんと上等に  
包装すればよかったのにね。  
聞き手 そんなに溶けちゃうもんなんですか、あれ。  
沖山昇 空気にさらすと、びしゃびしゃになりますから。密封しておかない  
と。でもあれで本当に助かったらしいですよ、引き揚げて行ってか  
ら。湯飲み1杯ずつ売ってね、生活したって聞きました。  
聞き手 生活の糧になったんですね。  
沖山昇 そうそう。

<防空壕>

- 聞き手 戦争中に、長幕に壕を掘って、授業はそっちのほうでやったっていう話を聞きましたが。
- 沖山昇 授業は松林でしかやらなかったですけどね。
- 聞き手 松林っていうのはどこで。
- 沖山昇 学校のすぐ前。
- 聞き手 そういうことですか。
- 沖山昇 校門のところにも大きな松がありますでしょう。そのあたりが松林。
- 聞き手 学校の前の松林で屋外授業をやっていたという。
- 沖山昇 私なんかは卒業式もそこですから。19年の3月ですからね。
- 浅沼拓道 壕で実際に暮らしていた時期はあるんですか？
- 沖山昇 壕で暮らしましたよ。学校の上の。
- 浅沼拓道 昇さん、長幕に結構、壕あるじゃないですか。
- 沖山昇 これがモリミヤーだよ。テルジヤ。この辺だな。
- 聞き手 この辺に壕があった。
- 沖山昇 掘った壕が。岩をずーっと奥行きに掘っていった壕が。ここはこの大正村という鉱夫の方々が避難するところ。
- 聞き手 ああ、そういうふうに。
- 沖山昇 それからこの辺、学校の北側ね。この辺は、兵隊さんの衣類修理、縫製工場か。沖山謙作さんのこの上だ。
- 浅沼拓道 何カ月ぐらい過ごしたんですか。
- 沖山昇 行ったり来たりだからね。
- 聞き手 避難のためっていうことですね。
- 沖山昇 危ないよというときはここに来ていた。これが私のおうちだから、これから行ったところのここに、壕があるんですよ、自然壕が。これはは我々の壕。3軒か4軒ぐらい。守身、染井、山田。この辺に山田つってないですか。
- 聞き手 これ浅沼ですね。
- 沖山昇 ああ、浅沼だ。戦争中はもう山田でしたから。この辺の人がみんなそこに入っていた。それから部所、部所でよ、この辺にも壕がいつ

ばいあるしね。

聞き手 結構たくさんあったんですね。

浅沼拓道 北港の人たちは、カンセイヤーたちは鍾乳洞に行っていたんですか。

沖山昇 この寺田から上がってこの辺だからね。この辺の人も小さい壕に。聞き手 長幕のほうに。

沖山昇 うん。それから、鍾乳洞、北泉洞にも行った。みんなそういった自然壕を利用したり、大正村の学校の上というところは、ずーっと掘って壕をつくったり。そういったところにみんないたんですよ。だからアメリカさんは飛んできてバラバラバラバラと機銃掃射したわけですよ。

浅沼拓道 やっぱわかるんですね、ここに作ってそうっていうのが。

沖山昇 うん、わかるわけよ。南から北に飛んでいってパラパラパラと機銃掃射したよ。

聞き手 幕のところに広角砲とか置いていたわけだから。

沖山昇 いや、高角砲はね。ミヤギスケヘイ、この辺にね、広角砲4門、それから寺田から上がったこの辺に4門。それから鈴木隊。灯台の辺に4門。で、12門でしょう。3カ所からこうして撃てるように。

#### <戦争の二大記憶>

聞き手 この機銃掃射は、その壕を狙ったんですか。

沖山昇 まだ、これ（高角砲）ができないとき。不幸中の幸いですよ。完成したころはそろそろ終戦に近いときでしょう。

だから1回、さあ、できあがったから撃てって言ったんですね。ボンボンボン撃ったら、敵が一気に来るのによ、ボンボンボン撃ったもんだから、黒煙はボンボンやるんだけど飛行機には全然当たらない。さーっと行ってしまったよ。

それからしばらくしたら、アメリカの艦載機が2、30機来て、もうバラバラバラバラ…。それから隊長が考えて、よし、もう撃つなど。そしたら飛行機素通りですよ。1機か2機ぐらいですからね、素通りしていった。だからこっちはもう静かになって。そしたら終戦になったでしょう。命拾いましたよ。

聞き手 整備が遅過ぎたというか。  
沖山昇 ええ。だから一番私がばからしいなって思ったのは、20年の8月15日に終戦でしょう。そして、8月1日から15日までは先輩が15日間の教育招集って言って毎日訓練したんですよ。そして、その弟たちが、我々。15歳の少年兵が教育招集に呼び出されて、8月16日から10日間。本当は8月31日までやるべきのを、終戦になったのがわかったわけだよね。それで10日で終わった。それまでは兵隊さんがついていてね、前へ進め、匍匐前進。小銃担いでよ。短剣って言ってからに、小銃にまた短剣をさしたりね、こんな訓練ばかりした。

聞き手 戦争終わってもやったと。  
沖山昇 戦争終わってから訓練したっていうのはね、こんなばかなことがあるかっていうのがね、戦争っていったらこの話ですわ。肘はもう油が出るぐらいね、匍匐前進でやるし。体はまだ小さいでしょう、今の中学2年生ぐらいだから。巻き脚絆って言って巻いても、これぐらいの足にぶっくりと巻いたぐらいなもんでね。そして地下足袋でしょう。雨が降ったら行進する。泥だらけの道だから。足袋に泥がいっぱいくっついて、もう小銃は担ぎきれない。そしたら班長が後ろから来てね、私の小銃とってから担いで、私はもう歩くので精いっぱい。泥がいっぱいくっついて、足袋に。それがもう一番の思い出です、戦争の。その訓練と、それから陣地はつくったが撃つなっていうのと。

聞き手 昇少年は少年兵扱いだったわけですか。  
沖山昇 少年兵だったんですよ。  
聞き手 もう高等科が終わっていて。  
沖山昇 一般の青年になるわけですよ。島民の教育招集で兵隊検査も何もしない。

## 第2章 燐鉍山で働き、一念発起進学する【戦後間もなく】

### <鉍業所に入る経緯>

聞き手 戦後になると、まず、北大東の鉍業所に入るわけですがけれども、この鉍業所に入ったときの経緯を教えてください。

沖山昇 鉍業所はアメリカが始めたわけですな。大日本製糖はもう帰っちゃった。大日本製糖の施設をアメリカさんが接收して。アメリカさんが1人、通訳が2人、メイドが2人付いてきて。この人の指図で鉍夫も扱って、燐鉍採掘も荷役も始めたわけですよ。大日本製糖みたいにして。

聞き手 アメリカさんが、いわゆる鉍業所の所長ですか。

沖山昇 所長して。

聞き手 所長なんですね。

沖山昇 そうそう。最高責任者でね。して、燐鉍、今までどおりにやってね。貯鉍場に燐鉍を積んだり。トロッコで積み出したり。農業は次男の兄さんがやるから、私はじゃあ勤めに出るということで、その燐鉍採掘に行ったんですよ。

聞き手 お兄さんは戦前から農業を継いでいた。

沖山昇 農業する人はもう兄貴がいるから、おまえは勤めに行きなさいって言ってから。それで勤めに行った。鉍夫に行ったわけですな。

聞き手 鉍夫として行ったんですか。

沖山昇 鉍夫として。だから、最初の3カ月ぐらいは、ちゃんとするはしで掘ってね、おじさんたちと一緒にね。鉄つるはしで掘って、バイスケで担ぎ上げたんですよ。

そして3カ月ぐらいしてからだったですかね、事務所の沖山オサムさんという方だったが、この人は人事担当だったらしいですがね。して、昇、おまえ明日から事務所においでって言われた。そして事務所に呼ばれてね。で、その仕事は何かというと、まず最初は、給仕の仕事、用務員ですな。まず朝早く行って掃除して、お茶湧かして、皆さんが来るのを待つとか。昼間の仕事は、お茶沸かす薪をとったり、水タンクから水をくんで、お茶沸かし場に持っていったり、庭の周りの草を取ったり、こういったの仕事だったですよ。こ

れもまたしばらく続いたんですかね。

そしたら今度は、日報整理。事務所には 5 名ぐらいの現場監督と  
いうのがあるんですよ、14, 5 名ぐらいを 1 グループにしてね。し  
て、日報をつけてくるわけ。そしたら、午前中はこの日報の整理。  
5 名の班長さんが持ってくる日報を 1 つにまとめるんですよ。

聞き手

前日の日報を持ってきたやつをまとめる。

沖山昇

そうそう、前日のものを。

名前書いて、8時から5時まで、8時間つって、こうずーっと一覽  
表つくるわけです。それを今度、本庁に持って行く。

聞き手

採鉱事務所は、これのことですね？（付録\*参照）

沖山昇

あー、そうそう。これが倉庫だからね。

聞き手

こっち側に採掘場があつて。

沖山昇

うん、現場があつて。こっちが現場事務所。

聞き手

本庁っていうのは港区の傭員倶楽部ですね。

沖山昇

はい、戦後はね。

聞き手

そちらのほうに、鉱業所の本体があるので。

沖山昇

日報を整理して持っていった、そういう仕事。

事務所に入る前はトロッコも押しましたよ、棧橋の荷役で。この小  
さい体でよくトロッコ押したなと思ってね。

浅沼拓道

事務管理ができるっていう能力を買われて、事務所に呼ばれたっ  
ていうことですよ。誰でもはできないじゃないですか。

聞き手

沖山オサムさんは、昇青年をどうやって見つけたんですかね。

沖山昇

ほかにいなかったんじゃないですか。学校卒業してすぐでもある  
し、して、同じ沖山で八丈の人でもあるし。

聞き手

オサムさんっていうのは、もともとの島民ですか。

沖山昇

はい、うちのずーっと先輩ですよ。うちの長男よりも上じゃない  
ですか。

聞き手

もともとは大日本製糖で働いてた？

沖山昇

そうです。

聞き手

そのまま戦後も残ってるわけですね。

沖山昇

そうです。

聞き手

大日本製糖は引き揚げたけれども、社員の一部は残ってるってこ



とですね。

沖山昇 島の人だね。

聞き手 社員として落下傘で来た人は帰っちゃったけど、島の人で雇われた、いわゆる雇人とか、傭員の方は残っていた。

聞き手 沖山オサムさんもその1人ということですね。

沖山昇 そうです。

聞き手 だから、昇青年をよく知ってるわけですね。

沖山昇 どういうふうに見て、おまえは事務所に来なさいしたのか知らんが。これが幸いしてね、今度もまた、救いの手がきて、本庁で倉庫係をしていた鬼塚さん、いまの副村長のおじいちゃんの弟。この人が、私にね、おまえは事務所にいるんだろう、これを勉強しなさいして、全科参考書を持ってきて、よし来たって、暇あるわけですから。毎日草取りするわけでもないしね。午前中に2時間ぐらい日報整理すればもう終わりだし。

聞き手 仕事は、日報整理すれば終わりなんですか？

沖山昇 もう仕事終わりです。あとは水くみとか、薪取りとかね。そしたら、工業高校ができたから行かんかという話が来て、行きたいと言ったわけだね。

その前に、採鉱事務所ではまた、採鉱事務所の長、採鉱長。現場の長。この方にもまた、もうかわいがられてね。この人は首里の人だったですよ。儀間朝恒（ギマチョウコウ）さんていってね。運動好きだったですよ。すらっとした人だったな。空手やっていますね。棒の先にワラをつけてこう、突く訓練。この方が来て、おい昇、来い来いして、型を教えてくれたり。

聞き手 儀間さん、この方も戦前からおられたんですか？

沖山昇 いや、後から。戦前の採鉱長はオオトモさんていってね、内地の人でしたよ。

聞き手 戦後に本島から来たんですか？

沖山昇 アメリカさんが連れてきたんじゃないですか。

聞き手 では、技術者として連れてきたんですか？

沖山昇 そうそう、技術者として。

< 鉱業所の体制 1 >

- 聞き手 鉱業所の本庁と採鉱事務所の体制について教えてください。
- 浅沼拓道 本庁は出張所がいいんですよね？
- 聞き手 出張所は戦前ですね。もう大破してたので、その隣の傭員倶楽部が本庁。で、まず本庁のほうのトップはアメリカさん？
- 沖山昇 本庁のトップはアメリカさんで。日本人のトップは、名城政得（ナシロセイトク）さんっていう方がいた。
- 聞き手 名城政得さんの役職は？
- 沖山昇 鉱業所の所長。で、儀間さんが採鉱事務所長、採鉱長。
- 聞き手 で、アメリカさんは何て役職なんですか？
- 沖山昇 アメリカさんは軍政府のトップ。
- 聞き手 だから、あくまでも軍政府の立場であって。指導はするけど。鉱業所の一員ではないわけですね、アメリカさんは。
- 沖山昇 鉱業所の一番トップになるんですけど、何て言いますか、社長になるんですか。
- 聞き手 でも、特に役職があるわけじゃないんですね。
- 沖山昇 この人の命令で、みんな動くわけですよ。鉱業所全部の上。
- 聞き手 実質的な責任者ですよ。
- 沖山昇 会社で言えば社長みたいなもんですね。
- 聞き手 アメリカさんは、歴代何人来られたんですか？
- 沖山昇 歴代ではね…あい、忘れたさ。
- 聞き手 直接お会いしてます？
- 沖山昇 会ってますよ、はい。そのために英語も勉強したから（笑）
- 聞き手 直接会話もしましたか？
- 沖山昇 会話はしきれない、ワッターが。
- 浅沼拓道 通訳は日本人ですか、アメリカ人ですか？
- 沖山昇 日本人。名護の人だった。又吉って言ってからね、兄弟で来ていた。兄さんと弟で。
- 浅沼拓道 一緒にお酒飲んだりもしました？
- 沖山昇 まだ中学生だから（笑）
- 聞き手 最初はガーンさん。

沖山昇 あ、ガーン隊長。二六荘でヤモリを小銃で撃った人。  
ヤモリが出よったからね、小銃でボンボン撃って、したら、屋根は  
トタンでしょ、穴あく、雨が降ったら雨漏りする、それから撃たな  
くなった。

聞き手 ガーン隊長は、二六荘を宿舎にしてたってことですね。  
沖山昇 二六荘が宿舎だよね。  
聞き手 アメリカさんはずっと二六荘にいたんですかね？  
沖山昇 二六荘にいた。みんな一緒。メイドさんも、通訳も。  
聞き手 その後にサンチェーズっていう方が来ています。サンチェーズは  
覚えてます？

沖山昇 サンチェーズも覚えてますよ。  
浅沼拓道 どこで仕事してたんですか？そのアメリカの人たちは。  
沖山昇 主な居場所は二六荘で。それから名城さんがいる事務所に来たり、  
現場に来たり。

聞き手 本庁は、名城所長のもとに働いていたということですね。  
沖山昇 そうそう。名城さんもこの人の命令ですよ。  
聞き手 ガーンさんが名城さんを連れてきたわけですね。  
沖山昇 はいはい。  
聞き手 本庁は傭員倶楽部にあるということは、戦後は小売り販売もここ  
にあったんですか？

沖山昇 もう、販売はないね。  
聞き手 事務所としての機能だけで。  
沖山昇 鉱業所では、KレーションとかDレーションとかって、アメリカの  
食料の配給ありましたよ。箱に入ってね。あれがおいしかったって、  
もう最高だったですよ。

聞き手 おいしいんですか、Kレーションって。  
沖山昇 おいしかったですよ。  
浅沼拓道 Kレーションって何ですか。  
沖山昇 チョコレートも入っているし、卵焼きの缶詰も入っているし、パン  
も入ってるし、たばこが4本入っているし。

聞き手 Kレーションってのは、携行食キットみたいなものですか？  
沖山昇 戦闘食料です。セットになっている。うちなんかたばこ吸わないで

しよ。うちなんかがこれ開けたらね、たばこ吸う人がもう見てるわけですよ。これはもらわんといけんってから（笑）これは楽しみでした。

聞き手 Kレーションをアメリカがくれるわけですか？  
沖山昇 鉱業所の職員に配給があったです。隣鉱採掘の鉱夫にも。  
聞き手 食べ物はKレーションばかりだったんです？  
沖山昇 もうこれだけ。おいしかったです。  
聞き手 名城政得さんが所長で、このもとに、課とか係はありましたか？  
沖山昇 沖縄県出身でね、前城嘉達という。  
聞き手 初代村長じゃないですか。  
沖山昇 この人がね、金庫番、会計係でした。  
聞き手 結構たくさんいらっしやったんですか？数名ですか、本庁にいたのは。  
沖山昇 目ぼしい人はね。あと、滝岡昌達（タキオカマサタツ）さんもいたし。  
聞き手 この方々が、所長のもとで3、4名ぐらい本庁にいらっしやった？  
沖山昇 いました。  
聞き手 採鉱の現場のほうには、儀間採鉱長がいて。  
沖山昇 採鉱長の下に5、6名の現場監督。して、自分のところはどこを採掘するよ、何名いるよ、と日報つけたり、連絡網したり。  
聞き手 現場監督は事務所に詰めてるんじゃないくて、現場に行ってるわけですね。で、日報書いて、朝持ってくる？  
沖山昇 朝持ってくるし、夕方もあります。ちょいちょいいますよ。  
現場に行ったり来たりして、採鉱長といろいろ調整してね。  
聞き手 で、この下に昇少年がいたと。

#### < 鉱業所と役場 >

聞き手 戦後すぐに、北大東村で村制が敷かれますけれど、村役場もこの倶楽部にあったと聞いてますけれど、戦後すぐは。  
沖山昇 村役場はね。ツーバイフォー庁舎ができたんですよ。  
聞き手 どこにですか？  
沖山昇 池の沢の学校の近く。

聞き手 戦後すぐに傭員倶楽部をほんの一時期、役場として使ってたと聞いてるんです。もしかしたら鉱業所と一緒にいったんでしょうか？

沖山昇 おかしいですね。鉱業所と一緒にでは。

聞き手 前城嘉達さんは、すぐに村長になってましたよね。

沖山昇 あー、戦前ですよ、この人が会計係だったのは。戦後は村長なってるから。

浅沼拓道 ツーバイフォーっていうのは何になるんですかね。

沖山昇 2インチに4インチの、あの、角材。

沖山昇 2インチに4インチの角材で庁舎ができて。今の消防車庫があるところ。鉱業所と役場、完全に別ですからね。して、村長は前城さんだし。あの人は戦前は会社の会計係ではあったんです。大きな黒い金庫があったんだが、今でもありますがね。

聞き手 民俗資料館にある金庫ですか？

沖山昇 そうそう。役場はあっちじゃないんです。池の沢のね。小売店。

聞き手 池の沢の販売所。

沖山昇 販売所が役場の事務所になって、それから、ツーバイフォーができた。

聞き手 倶楽部が鉱業所になって、池の沢の販売所が役場になる。

沖山昇 そうそう。

#### < 燐鉱課長 >

聞き手 大東支庁というのができて、そこに鉱業課っていうのがあって、北大東に鉱業課長が来てるようなんですけど、覚えていらっしゃるでしょうか？ 燐鉱課長は、親川光繁さんという記録があります。

沖山昇 親川コウハンさん。わかった、わかった。これは、名城さんの上。

聞き手 名城さんの上になるんですか？

沖山昇 アメリカさんと名城さんの間にいる人。平安座の人ですわ。

聞き手 軍政府と民政府からそれぞれ人が来ていて、そのもとに所長と採鉱長がいたと。

沖山昇 そうそう。

聞き手 親川コウハンさんってのは、あの、専門家だったようですから。こ

の方は結構ずっとおられたんですか。

沖山昇 いましたよ。

聞き手 この方も本庁にいましたか？

沖山昇 本庁に。

#### < 日報整理 >

聞き手 採鉱事務所で日報整理のお仕事をされていたってことなんですけど、日報ってどんなことが書かれていたのかを少し詳しく教えてください。

沖山昇 あ、日報ですね。班ごとに、氏名、出勤時間、退庁時間、実時間をずっとみんな書いて、これをまとめて本庁に持って行く。

聞き手 時間管理だけですか。仕事の中身は？

沖山昇 それはない。出勤簿のまとめみたいなものですよ。

聞き手 出勤簿なんですか。

聞き手 じゃあ、日報整理ってそんなに時間はかからないですか？

沖山昇 午前中1、2時間あればオッケー。朝早いですから、我々出勤は。朝掃除して、お茶沸かして、それから班長さん方みんな集まるでしょ。そしたら、日報をみんなで出し合うから、それを私がまとめて、で、本庁に出して。それが午前中ですね、毎朝が。午後からはまた、お茶を沸かし、まきをとったり、水くんだり、庭の草取りしたり、それでも時間があるから、勉強。

浅沼拓道 弁当屋さんはないですよ？お昼は。

沖山昇 みんな、お昼はおうちに帰る。大正村とか下坂だから。

浅沼拓道 昇さんは、お昼にミットシヤーまで帰ってたんですか。

沖山昇 うちの場合は弁当だったかな。

浅沼拓道 弁当屋さんっていうのはなかった？

沖山昇 弁当屋はない。あ、弁当持っていった。自分でつくって。女の子2人に、男の子は私だけだからね。3人で弁当も食べたり、いろいろやったんですよ。

#### < 鉱業所の体制 2 >

聞き手 採鉱事務所には、事務員は3名いたんですよ。採鉱長がいて、事務

員3名と

沖山昇 して、班長が5、6名ぐらい。  
聞き手 1人の班長に労働者はそれぞれ。  
沖山昇 14、5名ぐらいいたんじゃないですか。  
聞き手 そうすると、鉱夫は80か90人ぐらいですね。やっぱり機械化されてるから、そんなに人はいないですね。  
沖山昇 もうブルドーザーでやるわけだから。  
聞き手 だから戦前に比べると随分労働者は減っていて。  
沖山昇 スクレイパーが入らないところは掘ったりするし、トロッコに乗せて持ってきたりするところもあるわけだから。  
聞き手 5人の現場監督と80人ぐらいの鉱夫は、採鉱場のほうにいますよね。それ以外の貯鉱場とか積み出しとか、港の方にはいますか。  
沖山昇 あれは荷役のとき。  
聞き手 西港付近には常時、人夫はいないんですね。  
沖山昇 いえ、貯鉱場にもいますよ。ブルドーザーで持って行って、トロッコに乗せて貯蔵庫に入れるのはまた人力だから。  
聞き手 その人たちは本庁から行ってるわけですか？  
沖山昇 事務所の80人のうちから。  
聞き手 事務所から行くんですか。では、労務者はみんな事務所で管理してたんですね。  
沖山昇 そうそう。労務者はこっちで管理。班長さんが5名もいるわけですからね。して、どの班は向こう行って隣鉱入れる、どの班は採掘する、とか何かいって。  
聞き手 現場の人たちは本庁には行かないんですね。  
沖山昇 本庁には行かない。本庁にはもう本庁の連中がいますでしょ。日報整理がいるし。会計がいるし。偉い人たちの会議する人もいますよね。  
聞き手 本庁には何人ぐらいいたかっていうのは覚えておられます？  
聞き手 鉱業課長と所長がいて。  
沖山昇 会計係がいて、庶務係と、それから配給係。  
聞き手 配給係。  
沖山昇 戦後、売店はないわけですか。配給ものがあるから。石垣の出張所

にあった売店はもうなくなって、事務所は備員倶楽部の建物になったでしょ、戦後は。その北側に住宅みたいなのがありましたよ、二軒家の。

聞き手

はい、ありますね。今半分切れて残ってるやつ。

沖山昇

うん、これだったさー。ここが、私の親父のおうちだったから。

聞き手

守身さんが住んでいたところですね。

沖山昇

うちの父の土地になってるんですよ。ヤギのかいば入れたり、サツマイモ植えたりしてましたが、もう竹がいっぱい生えてますよね。ここが売店になってましたけどね。火事で焼けてしまったんですよ。

聞き手

売店っていうのは、配給品を配給するための。

沖山昇

はいはい。その係の名前覚えてますが、クリハラさんっていう方だったですよ。体格のいい方でね。

聞き手

鉱業所の職員に対する配給をここでやったということですね。

沖山昇

はい。

聞き手

米軍の人たちはこの二六荘にいたという話でしたけど、あと、通訳が2人。メイドが2人いて、メイドは内地から連れてきてるんですか？

沖山昇

沖縄からですよ。

聞き手

通訳も沖縄から連れてきて。米軍は1人だけですか。

沖山昇

1人だけ。

聞き手

米軍の部下は全くいないんですか。

沖山昇

いないですよ。だから、通訳が2人もついてるんですよ。

聞き手

通訳は日本人ですよ。

沖山昇

名護の人だったですよ。又吉ハーリーとベリーつって方ね。兄弟ですよ。

聞き手

その2人はガンさん連れて来てて、サンチェーズさんにかわってもいたんですかね。

沖山昇

いましたね。私が帰ってくるまでに、この通訳は、採鉱事務所で一緒だったとこのお姉ちゃんと結婚してましたよ。

聞き手

いとこのお姉ちゃんと又吉ハーリーがですか。

沖山昇

私と採鉱事務所に一緒にいた事務員は、私と、いとこのソメイトシ



コと、もう一人がハマザト。みんな同級生だったんですよ。私が那覇行ってからは、もう一人、男の人が入ったかはわからない。帰ってきたらもう閉鎖してましたから。

聞き手 2 通訳 2 人は、軍人ではなかったんですか。  
沖山昇 軍人ではないですね。  
聞き手 軍関係者は本当に 1 人だけで来てたんですね。結構寂しいことですね。  
沖山昇 奥さんもない。独り身で。那覇にはいたかどうかは知らんが。だから、ヤモリ撃ったはずよ、  
聞き手 島民との交流はあったんですかね、ガンさんには。  
沖山昇 いいえ、会社の人たちとですよ。  
聞き手 全然、交流なしですか？  
沖山昇 一般の人とはないですね。通訳連れて歩かんといかんわけでしょ、言葉わからないし。

#### <米軍による機械化>

聞き手 戦後も採掘場で掘る仕事はやってたんでしょうか？掘って、積み出して、乾燥させて、倉庫に入れるという一連の作業は戦後もやっていたんでしょうか？  
沖山昇 はいはい。やってた。戦後、私なんかも担いだですから。  
聞き手 担いだんですよ。  
沖山昇 その後、ブルが入ってきて、機械化して、土手もつくったでしょう。  
聞き手 サンチェーズが入ってきたのは、もう大分後ですよ。  
沖山昇 サンチェーズのときだったかね。  
聞き手 サンチェーズが変えちゃってるんですけど、それはもう 1949 年で、沖山さんが出られる直前ぐらい。  
沖山昇 ブルなんか入ったときは、まだいましたから。  
聞き手 ええ、ええ、ごらんになってるわけですね。  
沖山昇 一番最初にブル上げたのがね、西港で。  
沖山昇 LST で上げたんですよ、西港にね。前がこうあくのがあるでしょう。ブルを引っ張り上げたんですよ。これ見ましたよ。  
聞き手 それはもうアメリカさんが入ってくる時ですね。

沖山昇 あれが何月ごろだったかな。  
聞き手 46年12月ですね、陸揚げしたのは。  
聞き手 もう鉱業所に入っておられるころですね。ブルが入って、活躍したんですか。  
沖山昇 使いましたよ。  
聞き手 結構使ったんですね。

<スクレイパー道路>

沖山昇 スクレイパーっていう、削る機械ね。土を削って、おなかにためてから持って行って、また押し出すのがあるでしょ。あれであの土手を築いたんですよ。  
聞き手 土手？  
沖山昇 これが燐鉱の層ですよっていう場所があったでしょ。あれは貯鉱場に、スクレイパーで燐鉱を運ぶために道をつくったものなんですよ。  
聞き手 そういうことなんですね。  
沖山昇 同じような層になってますでしょ。採掘場から削って、ここにさーっと引いたもんですからね、同じような層になっているんですよ。  
沖山昇 西港から上陸に行こうとする道。両サイドに土手がありますでしょ。港湾事務所のところよ。あれは、造ったんですよ。もとは土手なかったですから。  
聞き手 どういうふうに造ったんですか、土手を？  
沖山昇 スクレイパーで、採掘場から削って、腹にためて、運んで、押し出して、どんどん、積み立てていったわけですよ。で、今の高さになってるんですよ。この土手は層になってますよ。茶色とか、焦げ茶色とかですね。現場がそうですから。  
聞き手 スクレイパーっていうのは？  
沖山昇 スクレイパーというのは、かじるやつだから。かんなみたいに。して、おなかにためるわけ。

聞き手 現場から、土の層をそのまま剥ぎ取って持ってきて、そこに押し出して置いたと。だから層は崩れてないってことなんですね。

聞き手 あの場所は、もともとは乾燥場でしたよね。乾燥場の上に、採掘場から層を持ってきて、土手を積んだということなんですよ。

沖山昇 そうそう、道を造った。スクレイパーが通る道。貯鉱場のそばに4本柱が立ってるでしょ？あそこに、大きなじょうごを置いて、土手の上から、また押し出したわけ。そうすると、下にはトロッコが置かれていて、で、トロッコが運んで倉庫の中に入れるのね。

聞き手 あその4本柱がじょうごになってるわけですね。その下でトロッコが受けてるわけですね。で、トロッコが貯蔵庫の上屋にいて、上から落とすということですよ。

浅沼拓道 現場検証したほうが一番いいかもしれないですね。

沖山昇 現場検証したほうがいい。

聞き手2 高さが必要だったんですか？あの道をつくったのは。

沖山昇 そう、4本柱に合わせて、高さを保たんといかんわけでしょ。

聞き手 その上から落とすために。

沖山昇 高い道をつくらんといかんわけだ。

浅沼拓道 戦後は、採掘場からはトロッコをつかってなかったってことですか。戦後は、スクレイパーで採掘場から持ってきたんですね。

沖山昇 4本柱まではね。トロッコは4本柱から倉庫までを使ったわけ。戦前は黄金山からみんなトロッコで持ってたけど、アメリカさんの機械化で。

#### <ブルドーザーの役割>

聞き手 ブルはどこで使ってたんですか。

沖山昇 ブルはどこで使ってましたかね。

聞き手 スクレイパーが現場で切り出して、そのまま持ってきて落とすわけですよ。

聞き手 燐鉱自体は水分を含んでいるから、どっかで乾燥しないとイケないはずですけど。乾燥はしてないんですね。

沖山昇 直接持ってたというのは土手をつくる時だけ。あとはいったん乾燥場に持って行く。乾燥場のものを持ってって。

聞き手 スクレイパーが。

沖山昇 上のほうだけ薄く持ってって。

聞き手 採掘場から持ち上げてくるのは、相変わらず人力だったんですか。

沖山昇 巻き上げ機ですよ。トロッコを揚げて。

浅沼拓道 バイスケはまだ使ってたんですか。

沖山昇 バイスケは浅い簡単なところを担ぐ。深くなったら、トロッコで。巻き上げ機で上げて。

浅沼拓道 戦後も掘るのは人力ですか？

沖山昇 そうそう。

聞き手 乾燥場まで持ってって、日干しして。ブルドーザーが活躍するとすれば、日干しのところぐらいですよ。

沖山昇 そうですね。

聞き手 日干しのところでならしたり、すき返したりするところで。ブルが活躍するしかないですね。

沖山昇 どこでブルドーザー使ってたかな。

聞き手 採掘場に持ってくためには、スクレイパーが全部それを担ってたわけだから。

沖山昇 スクレイパーのほうがたくさんあったんじゃないですかね、ブルよりは。

聞き手 スクレイパーのほうが発達してたんですね。

沖山昇 ブルっていうんだが、本当はスクレイパーのことじゃないですかね。

聞き手 戦後は採掘を余り行わずに、戦前からもう積んでいたやつを積み出していくのが主だったと聞いたことがありますか、正しいですか。

沖山昇 乾燥場のね。そうですね。

聞き手 スクレイパーは、その日乾乾燥場から持っていったという役割をかなりしてたんですね。現場はかなりその複雑な起伏がある土地なので、こんな真っ直ぐに層を切り出してくるような現場って、そんなに多くないような気がするんですね。乾燥場で堆積されたものを、こう水平に切り出してきて積んだほうが、あの形になるような気がするんですけど。だから、堆積場から切り出したやつを積んで

あの土手をつくったんじゃないかと思うんですけど。

沖山昇 トロッコで運び出したのは、窪地になっていますでしょう。窪地以外の、黄金山、灯台の下あたり。あの辺をスクレイパーでやったんじゃないかな。

聞き手 あっちは階段状になってなかったということですね。

沖山昇 はいはい。

聞き手 あの層は、採掘場から切り出してきたのか、乾燥場から切り出してきたのか、どっちかなということなんです。

沖山昇 4本柱に持っていくものでしょう、乾燥場からは。

聞き手 じゃあ、あの層は純粹に。

沖山昇 純粹に現場から。今は畑になっているところありますじゃん。黄金山の周りに。あの辺をスクレイパーで削ったと。

我々が、ツルハシを担いだのは、石の周りをこう掘って、して、このレールがあるところまで担いで持って行って、それをトロッコに積んで、また引き揚げたというふうな採掘の仕方。

聞き手 昇さんが鉱夫をやっていたときは、穴の中に入っていったんですか？

沖山昇 穴の中ですよ。

#### <戦後の人口増>

聞き手 戦後に、隣鉱山が活況を呈して、人口が増えて、昭和24年ぐらいには1260人ということで、終戦時の700人から人口が5、600人は増えているんですけど、この増えた人口っていうのはどこから来たんでしょうか？

沖山昇 ああ、私が学校行くときですね。

聞き手 はい。そのころ人口が1300人もいるんですよ。隣鉱で大分潤って、南からも人が来たと言われているんですが。

沖山昇 南からも来ていましたよ。

聞き手 南大東からも人夫が来たよ。いろんなところから人夫が来たのかなと思うんですけど、その辺の覚えはありますか。

沖山昇 しかしもう、そのときはもう機械化されているわけでしょう。

聞き手 ええ。何で人口がふえたのかなという不思議な。

沖山昇 だからね、それがおかしいですね。  
もう終わるころでしょう。私が行って1年ぐらいしてもう終わっているわけですからね。

聞き手 この人口がふえたっていうのはあんまり印象にないですか。

沖山昇 ないですね。

<高校生活のこと>

聞き手 工業高校に進学するに至った経緯は、すでにお話を聞いていて、隣鉦事務所でモーターがすごく気になって電気科に入った。

沖山昇 電気に興味を持ってね。

聞き手 弟さんは学校には行かないということ。

沖山昇 ええ、漁師をすと。

聞き手 お話が回ってきて、もう19歳になっていた昇青年が行くことになった。そのころにはお兄さんの光利さんは農業を継いでいた。昇さんとしては実家は継がないので、自分で手に職をつけるしかないね、ということになって、電気科に進んだということですね。

沖山昇 はい。

聞き手 学校は県立の工業高等学校で電気科。高校時代の思い出というのは？もう19歳で、ほかは自分より若い人ばかりだったと思いますが。

沖山昇 もう年がいつていますでしょう。19歳で1年生になって。15, 6歳の子供たちと一緒にだから、学校の先生が、私を先輩と見てか、いろんな役員に縛るんですな。寮があるもんですから寮長にしたり、食料係長にしたり。  
それで勉強っていうと、宿舎に帰って一生懸命やる時間しかない。野菜集め、サツマイモ集めね。薪を名護まで、東村まで買いに行く。こういったことばかりしていたんですよ。もちろん授業も受けながらですけどね。土曜、日曜を利用したりしていた。授業が終わったらすぐ行って、何キロ、何斤出してくれとかって言って、みんな注文して来るわけですな。で、その支払いとか。こんなのまでみんなやったんですよ。

聞き手 手当をもらわずにです？

沖山昇 手当はもらわないよ。寮長だから、先輩として。  
聞き手 アルバイトじゃないんですね。  
沖山昇 最初のうちは平気だったが、3年生になったらもう卒業でしょう。  
これ今のようなだったら大変だということで、普通科目をみんな軽く  
見て、主に専門学科、電気工学をばっかりを真剣にやってね。ほか  
の理科とか、人文とかというのは、いい加減にしていたんですよ。  
それで、卒業したんですけどね。

聞き手 1期生だったんですね。  
沖山昇 2期生。1期生は各高校から集まってきた連中。  
聞き手 だから新入生としては1期生なんですね。  
浅沼拓道 沖縄工業高校ですか。  
沖山昇 はい。  
聞き手 1期生で、離島から来ていた学生はいましたか？  
沖山昇 大勢いましたよ。伊平屋、伊是名、宮古、八重山、それから国頭。  
国頭も行ったり来たりするの大変でしょう。だから寮に入ってい  
ましたよ。

聞き手 南北大東から行ったのは？  
沖山昇 3名。宮城シゲルって言ってね、宮城村長のいところですよ。  
聞き手 宮城シゲルさんは15歳？  
沖山昇 そう。それから、伊波コウキって言ってね、私の同級生がいたよ。  
あれは鉱業所の分析室にいたんですよ。

聞き手 その二人は何科に行きました？  
沖山昇 二人とも機械科に行った。  
聞き手 3人とも北大東ですか？  
沖山昇 最初は、北大東からだけですよ。その次が南大東から2人、北大東  
から1人と。ナカキヨシね。ナカオサムの兄さん。

#### <戦後の燐鉱山就職の前>

聞き手 戦争が終わった1945年の8月から、燐鉱山で働き始める1946年  
5月までの間は、昇青年は何をされていたんでしょうか？自分が何  
をしていて、島の様子がどんなだったか。軍  
沖山昇 ああ、何もしてないです。おうちの手伝い。サツマイモ掘ったり、

牛の飼葉刈ったり。

聞き手　　まずは食べ物を確保して。

沖山昇　　そうそう。

聞き手　　翌年の2月に燐鉍船が来て事業が再開するんですけど、それまでは燐鉍船も来なくて、船が途絶えた期間だと言われています。8月から2月までほとんど船が来なくて、かなり島は困窮していましたか？

沖山昇　　長いこと船来なかったですよ、ええ。

聞き手　　物資がなくなって、みんなすごくひもじい思いをしたっていうようなことが書いてありますけど。

沖山昇　　畑のない人はね。うちらは食料はね。いっぱいあったですから。ひもじい思いしたことないですよ。

聞き手　　燐鉍の積取船が2月に来たっていうことは、覚えてらっしゃいますか？

沖山昇　　覚えてないですね。

聞き手　　やっぱり鉍山で働き始めるまでは自分のうちのことやってたって感じですね。

21年の6月に福島民政官が来て、北大東村ができるんですけど、前城嘉達を村長に任命してってことまでは村誌に書いてあるんですけど、そのあとどうなったか、ご存知ですか？

沖山昇　　もう帰っていないでしょう。大東にはもう来たらすぐ帰りますよ。

聞き手　　すぐ帰っちゃったのですかね。その辺は、記憶にないところなんですね。

## <現地確認>

(土手の手前から港湾事務所前まで)

浅沼拓道　　土手以外では、同じ層は残ってないですか？

沖山昇　　掘らないと、わからない。私、燐鉍山にいる時に、試掘したことがあります。ああいう層になっているんですよ。人間が入って、つるはしが使えるぐらいの、縦1m、横1m50cmぐらいの四角い溝をつくって、つるはしで打って石が出るまで、試掘っていうのをやった



わけさ。そしてさらに、茶褐色の層が何センチ、黄色が何センチと  
かって。平板測量もやったわけさー。試掘したところをね。  
あれ、乾燥場だからね、今、滑車が入っているところも、石が積ま  
れているところも。あの辺も、スクレイパーで掘ったんじゃないか  
ね。

浅沼拓道 あそこも採掘をやったんですよね。

沖山昇 この道も下はみんな燐鉱石ですからね。ここも試掘したんですよ。そ  
したら層になっていますから。ここはレールが引かれていたから、  
この土手がスクレイパーの通り道。貯鉱場へ向かう。

聞き手 この道はまさにトロッコレールの跡ですね。

沖山昇 トロッコだったですよ。このあたりの溝から掘り上げた燐鉱石を  
ね、トロッコをレールで、ワイヤーで引き上げた。この両サイドが  
乾燥場ね。今通っている道もレールが引かれていて、基幹道だった  
から。(貯蔵庫に向かって)左手はみんな土手になっていますよね。

浅沼拓道 この上をスクレイパーが通ってた？

沖山昇 スクレイパーで積んだ道よ。ここ見てごらん、層になっていますで  
しょう。

沖山昇 向こうの上から、スクレイパーでかじったのを、こっちに敷き流し  
たんですよ。

浅沼拓道 スクレイパーで1回とれる量って1mぐらいですか？

聞き手 もっと薄いんじゃない？

沖山昇 10 cmぐらいかね。

浅沼拓道 この層に燐鉱石含まれてるじゃないですか。これはもう使わない  
燐鉱石ですか？

沖山昇 いや、もったいないですよ。20 パーセント余りはありますよ。

ほら、ここも道ね。

浅沼拓道 ずっと続いてたんですね。

聞き手 道路をつくった時に、土手を削って切り通したんですね。

沖山昇 道路をつくるためになくなったからね。

(貯蔵庫横のコンクリート構造物付近で)

浅沼拓道 スクレイパーが、この(コンクリート構造物の)上から燐鉱石を落

としていた？

沖山昇 そういうこと。

聞き手 スクレイパーの道は手前まで来てるんですね。

沖山昇 向こうから来て、こっちに台があって、じょうごがあって。

聞き手 じょうごの形を教えてください。

沖山昇 じょうごはね、受け皿があって、スクレイパーがここにゴーってはき出したわけだから。

聞き手 じょうごを何で受けるんですか。トロッコが下にいるわけですか？

沖山昇 そうそう。ハンドル引いたら、じょうごからトロッコの上に落ちるわけ。あっち（トンネルの中）と一緒に。

聞き手 一緒ですね。（貯蔵庫の方を見て）ここから入っていくんですね。

沖山昇 ここから入って行って、ターンテーブルがあって、あっち（貯蔵庫）の上にまたレールが引かれているから、そこから落とすんですよ（倒れた）コンクリート柱がありますね。これずっと向こうまで。

聞き手 これが向こうまであった。

沖山昇 升型のものがずーっとあって。

聞き手 はい、レールが引かれていて。こっちにはね、丸いターンテーブルがあって、トロッコ乗せたまま回るやつが。

聞き手 トロッコは、はね上げ式で落としていくんですか。

沖山昇 （持ち上げるしぐさ）人力で。

聞き手 持ち上げて落とすと。

沖山昇 枠が山型になって、下に広くて、上に狭くて。そしたら持ち上げやすいでしょ。人間が持ち上げるわけよ。この枠を。そしたら隣鉋落ちますでしょ。

聞き手 要は、型枠。

沖山昇 台の上に型枠、そうそう。

聞き手 型枠があって、型枠を外すと。

沖山昇 上に持ち上げると。

聞き手 隣鉋石が台形になっているから、ぱらっと落ちると。

沖山昇 そうそう。

聞き手 かしこいですねー。

沖山昇 だから上手いことできてますよ。

聞き手 レールの下はすかすかになっているわけですね。

沖山昇 もう、すかすか。

聞き手 このコンクリートの建屋は、上に屋根があったんですか。

沖山昇 屋根があった。破風屋根、合掌で、木材で。

聞き手 切り妻のトタン屋根？

沖山昇 トタン葺き。

聞き手 このコンクリートの上に？

沖山昇 コンクリートの上に桁おいて、木材で合掌をつくって。

聞き手 木材で小屋組みして、そこにトタン屋根が。

聞き手 切り妻の三角がこっち側に幾つか見えたんです？

沖山昇 そうそう。

聞き手 戦後、このコンクリートの四角い壁をつくったときは、屋根はやっぱり3連でつくったんですか？

沖山昇 3連じゃなかったですか。戦後の写真ないですか？

聞き手 ないんです。でも3連にする理由がわからない。

沖山昇 3連じゃなかったですかね。こんな大きな破風はつukれないから。

聞き手 戦後の、このコンクリートの建屋は、あそこの、ちょっとこっち側にちょっと、はみ出しているところなんですけど、あそこからこっち曲がってるんですね。で、一番向こうのトンネルは、この建屋の外なんです。

沖山昇 建屋の外？

聞き手 はい。一番向こうのトンネルは。

で、この2つのトンネルしかどうも使っていないように見えるんです。

沖山昇 ああ、そうですか。

聞き手 この建屋から落とせるトンネルは、これとあれ。もしかしたら一番こっち側のトンネルは使ってるかもしれません。一番向こうのトンネルは戦後は使っていないように見えるんですよ。実際、サンチェーズが来たときに、割ったのがこの2つだけです。この2つしか使ってなかったんじゃないかと思うんですよ。で、サンチェーズがこれを割ったのはベルトコンベアで入れるつもりだったという。

沖山昇 あの、積み出しするとき？  
聞き手 はい。入れるのはどうやって入れるつもりだったんですかね。  
沖山昇 どんなする考えだったんですかね。ただベルトコンベア式にするっ  
てだけしか。  
聞き手 これ（貯蔵庫）が建ってたころに来たことはありますか？  
沖山昇 来ましたよ。  
聞き手 壁はこのままこっち（東側）に建ってました？  
沖山昇 こっちにあったのは何だったかね。たしかに壁がないといかん  
ですもんね。こっちは入口だから。  
浅沼拓道 トロッコに落とした燐鉱はドライヤーに行ってるんです  
よね？  
聞き手 ドライヤーは戦後使ってないですよ。  
沖山昇 うん、戦後は使ってない。  
聞き手 日乾堆積場になってからは、ドライヤーはほとんど使って  
ないね。  
浅沼拓道 選鉱とドライヤーをやらなくなって質が落ちたってこ  
とになる  
んですか？  
沖山昇 もう選鉱しなかったということよ、ドライヤー使わないこ  
とは。現  
場で乾燥させて、すぐ持ってきたと。  
聞き手 もう一度お聞きしますが、貯蔵庫の中の柱はりの上、人が通  
る足  
場はレールの上ですか。  
沖山昇 コンクリ枠があって、それに枕木を置いて、そして、レールを引  
い  
て、そのレールの間に、この枕木に板を引いて、人が通るようにし  
た。そうしないと、枠を上げても燐鉱を落とせないですから。  
聞き手 人が行かないといけないですよ。  
沖山昇 そうそう。

#### <守身さんの人命救助>

聞き手 貯蔵庫に落ちた人がいて助けに行っただってというのは、守身さん  
の  
話ですよ。  
沖山昇 うちの父がロープで縛ってね、助けました。  
聞き手 守身さんはなぜここに居合わせたんですか。  
沖山昇 船夫として荷役してましたから。  
で、鉱夫が、燐鉱が少なくなったのを、端かきしていたんですよ。

そこで、足を滑して、するするする一っぴいっちまった、燐鉱と一緒に。トンネルのじょうごの口にはまって、人間が押さえてしまったでしょ。燐鉱石はどんどん流れてくる、で、埋まってしまったんですよ。

聞き手 トンネルの穴に足が挟まって、埋まっていく感じだったんですね。  
沖山昇 どうやって助けたかという、燐鉱を下で出しながら、この人を引っ張り上げた。

聞き手 上のはりか何かにロープを引っかけて。

沖山昇 そうそう。

聞き手 体に結んで下りて行って。端かき途中で埋まっちゃった人を。

沖山昇 上のトロッコの台からね。

聞き手 今の端かきの話は。貯蔵庫の下の方のトンネルの上のところを掃除していたというか。

沖山昇 自然に流れるのが弱くなったから。

聞き手 寄せ集めていた？

沖山昇 寄せ集めて。

聞き手 上のほうにたくさんたまっていれば自然に落ちていくんだけど。

沖山昇 そうそう。

聞き手 少なくなると、自然に落ちなくなるので、そのトンネルの近くに寄せなきゃいけない。

沖山昇 そうそう。

聞き手 それを端かきとって。端かきの人夫が寄せてるときに、足を滑らせて、取り出し口のところに落ちちゃった。

沖山昇 埋まってしまった。

聞き手 それを守身おじいから助けにいったという話。

沖山昇 ロープで体縛って行ってね。もう一つのロープでその人を縛って、引っ張り上げた。

聞き手 戦前の話ですか？

沖山昇 戦後。私もわかるから、見たから。私はトロッコを押してるわけだから。

聞き手 守身おじいは戦後もまだ荷役をしてたんですか。

沖山昇 守身おじいは農業しながら、呼ばれると荷役。舂を扱うのが、上手

だったから。

### 第3章 島に戻って働き、一家をなす【民間時代】

#### <最初の仕事>

- 聞き手 高校卒業して、会社は那覇の会社に入られたんですね？
- 沖山昇 実践をやろうとして那覇の会社に入りました。。
- 聞き手 オキシマ電機。
- 沖山昇 もう卒業式が終わったら、あしたから来いだよ。オキシマ電機は水道工事会社でね。天久にあった東急ホテルの電気工事が最初でした。そういったビルの工事をした。
- そして、2カ年で会社がおかしくなって、すぐまた探したら、今度は旭橋に沖縄電設株式会社というのがあって、ここも2カ年でだめになって。そのときは、もう2年目のときに請負を始めてましたから。
- 聞き手 請負とは？
- 沖山昇 沖山くん、君、これ下請けしなさいよって言ってから。はい、やってみましょうかねってからに。
- 聞き手 会社から個人で請け負っていたってということですか。
- 沖山昇 例えば、会社が100万で受けるでしょう。そしたら、10%を会社に納めればいいと。10万は会社に納めておまえ90万だと。このような方法でね。
- 聞き手 給料ではなくて、歩合制ですね。

#### <借金のための働く>

- 沖山昇 2カ年で仕事がなくなった時、B円で3万円の借金があって、これは大変なつた、借金したことないんだからびっくりして。今度は、大東の人で桜坂でキャバレーをしている人を頼って、兄さん、私こんな大変なつている、3万円貸してくれ、電気工の給料払わんといかんからって。これ貸してもらって給料払って解散して、今度は、私が働いて返しますから何したらいいですかと聞いて。いつか北大東から砂糖の買い出しに行っていって言われてね、砂糖集めて買って船で持っていく、そのお手伝いをして。
- そしたらその人が今度、北大東でケーブル荷役をやるからその面

倒れてくれと言うから、電気屋で電柱にのぼるから、とび職もできたから、オッケーしてからに、そこでまた2カ年。

聞き手 北大東運送という会社に入ってますが、この時はまだ島に帰っていないんですか？

沖山昇 この主はよ。那覇のキャバレーのマスターだのに。

聞き手 3万円の借金っていうのは誰の借金なんですか。

沖山昇 私の借金。沖縄電設が解散になったから。私も仕事なくなったわけでしょう。下請けだから、電気工に給料払わんといかんでしょう。

聞き手 下請け人として電気工を雇っていたからですか。

沖山昇 雇っていた。

聞き手 雇っていたから、給料を払うために3万円借金しなきゃいけない。

沖山昇 それを返すために、この運送会社に入ったんですよ。

聞き手 北大東運送という会社ですけど、その会社は何をしている会社なんですか。

沖山昇 主はキャバレーで、新しく創設した会社ですよ。北大東の西港でケーブル荷役をやるために。

聞き手 あの人ですか。クレーンでやっていたのに代わって、ケーブル荷役を発案した、あの、伊波さん。

沖山昇 伊波竹善（イハタケゼン）。

聞き手 はい。伊波竹善さんがキャバレーの主なんですか。

沖山昇 マスターです。

聞き手 変わった人ですね。

沖山昇 いろんなことを考え出す人なんですよ。北大東は、クレーンの荷役では危ないから、もっといい方法はないかっていってね。それでケーブルカー式にしてね。

聞き手 はい。ケーブルで荷役をびゅーってやるやつですよ。ケーブル荷役の話に沖山さんはどう絡んでるんですか。

沖山昇 その係をやってくれと。

聞き手 どういう係をやるんですか。

沖山昇 例えば、高いところに登ってグリス（油）をつけたりとか、いろんなことをやらんといかんでしょう。。

聞き手 ケーブル荷役の管理をしたってことですか。



沖山昇 うん。それと事務。そして荷役賃を取る。  
聞き手 それは大東に来てやったんですか。  
沖山昇 社長は沖縄にいて、私が北大東に来て、忠岡（タダオカ）さんって  
いう人と2人で、人も使ってやっていた。給料は月5000円ぐらい  
だったですから、それをためて2カ年で3万円の借金を払った。  
借金を返し終わったときに、北大東で郵便局が開局したんですよ。  
よし、ちょうど上等って言って、はい、私やめさせてくださいって  
言ったから、ああ、いいよもう、私もこれ（荷役は）役場に渡そう  
と思うって言ってからに。そして臨時で郵便局に採用されました。

<伊波竹善さんのこと>

聞き手 伊波竹善さんとはどういうお知り合いなんですか？  
沖山昇 北大東出身だから。困ったもんだから。そこだったら2、3万ぐら  
いはあるだろうと思って行ったんですよ。  
聞き手 金持ちで有名だったのですか？  
沖山昇 うん、金持ち。45名もまたホステス使っているキャバレーですか  
ら。  
浅沼拓道 2、3万の借金は、何人の電気工に支払いするためのものですか？  
沖山昇 3名。  
浅沼拓道 じゃあ1人1万円。  
沖山昇 こんな安い給料だったですよ。  
聞き手 下請けの会社をつくっていたんですか、昇さんは。  
沖山昇 いや、会社からの下請け。  
聞き手 個人として請けて。3人雇っていたと。  
聞き手 伊波竹善さんは、ケーブルの仕事以外にも何かされてたんです  
か？  
沖山昇 キャバレーしながら、いろいろと考え出しているんですよ。ケーブ  
ルで、滑車はこういうふうにして、こうして巻き上げてつくるって  
いって。他にも、製糖期が始まったら、砂糖の買い出しをしていま  
した。北大東から買って行って本島で売るといって、砂糖買い出しを  
する人が北大東にも大勢いましたよ。最初は、どこどこ契約して  
いるから、そっから（砂糖を）集めてきなさいって仕事だったんで

すよ。またバーテンになったりね。(ケーブル荷役の) 計画をまとめるまで、そうしているうちに、よしできた、これで北大東の荷役やりましょう、あんた行きなさいしてから。

聞き手 いろんなことをやりながら、自分の事業をつくることを夢見ていた人なんですね。で、戦後になってサトウキビ産業を復活させようということで、そういう砂糖の仲買人が何人か島に入っていたということですか。

沖山昇 北大東の島の人を知っているわけだから、あんたの砂糖売ってくれよ、自分に売ってくれよって言って、はい、何丁、何十丁っていったみんな契約して。

聞き手 そういう伊波さんみたいな仲買人が何人かいましたか？

沖山昇 3名ぐらいいました。

聞き手 3人ぐらいで北大東の黒糖は全部さばけていたんですか？

沖山昇 やっていましたね。農協がまだできないときだから。

聞き手 農家とその仲買人の個別契約で。

沖山昇 製糖工場ができるまではね、小型工場だから。小型工場が5カ所ありましたから。

聞き手 戦前の形を受け継いで。第一工場から第五工場の形だから。

沖山昇 みんな知り合いだから、僕に売ってくれ、僕に売ってくれてってからの。

聞き手 戦前は、大日本製糖が販路を持っていた。

沖山昇 戦前はね。

聞き手 大日本製糖がいなくなっちゃった後だから。そういう個人が入り込んで売買されていた。

沖山昇 そうそう。

<ワイヤー荷役>

聞き手 昇さんは、北大東運送に入って、島に帰ってきたころは実家に戻っていたんですか？光利さんが継いだモリミヤーに戻っているんですか。

沖山昇 生まれたところの光利ヤーに。

聞き手 戻っているんですね。北大東運送に来たころは26歳ごろですね？

沖山昇 そうですね。那覇に行ってから高校3年、実務が2年と2年で4年。1年間桜坂で、北大東に来て荷役を2年。

聞き手 桜坂の1年っていうのは何をしていたんですか。

沖山昇 準備したり、砂糖の買い付けしたり。荷役するために北大東に帰ってきたわけ。

聞き手 1年間の間に伊波さんのアイデアを実現するためにいろんな準備をしていた。

沖山昇 あっちの2階でね、こうしたらどうかな、こうしたらどうかなって一生懸命やっていたんですよ。

そして、伊波さんが、よし、こうしてやろうって言ってからすぐできている。おまえ、これやってくれって言われて、最初から聞いているから内容みんなわかるわけですよ、オッケーって言ってからすぐ。

聞き手 ワイヤーの仕組みを施工したのは誰なんですか？陸にワイヤーかけて、海のほうにかけ渡して滑車でやるっていう。

沖山昇 伊波さんが来て、こうしてやってちょうだいして、漁師と打ち合わせして。

聞き手 漁師がかけたんですか。

沖山昇 ワイヤー張るのなんかは自分なんかがやったんだが、海の底に潜ってアンカーをやらんといかんでしょう。それは漁師に頼んで。10mは潜りますから。素潜りして、シャックルとめてね。ナカザトヨシトクさんという潜る人がいたんだよ。相当なお金を払ったはずですよ。

浅沼拓道 台風ですぐ切れませんか？

沖山昇 大きな船のアンカーに、太いワイヤーで、シャックルでとめてくるわけよ。台風でも切れない。

浅沼拓道 すごい。この陸と海に張られたワイヤーの下に船が入って行くんですね。

沖山昇 そうそう。

聞き手 荷物を滑車にかけて、シャーって行って、船の上で途中でとまって荷物を下ろすっていう、何かすごく大胆ですね。

浅沼拓道 人も乗ってたけど。

沖山昇 うまい具合にできているんですよ。滑車があつて、滑車に荷物を引っかける装置まであるんです。後はこの滑車を上げたり下げたりすればいいわけ。こんな装置だったんですよ。

聞き手 巻き上げは動力があつたんですか。

沖山昇 巻き上げはウインチがあるから。

(この後、旧西港荷揚げ場にて現場を確認しながら)

聞き手 ワイヤーは、どこどこにかけたんでしょうか？

沖山昇 ここに三脚があつたでしょ。

聞き手 はい、3本マストクレーンですね。

沖山昇 ガイボクををこう出して、これを固定して、あっち(海の中)にアンカーを置いて、アンカーにワイヤーを通して、ジャッキで締めつけて固定したんですよ。

聞き手 海底から立ち上げて。陸側はどこにとめてたんですか？

沖山昇 そこのコンクリートに。

聞き手 ワイヤーは、張り出した手のところにかかっているんですか？

沖山昇 はい。上にね。ガイボクを固定して、丈夫な滑車をつけて、ワイヤーは太いですから、向こうとこっちで、チームワークでぴーんと張ったんです。たるまないように、張ったんですよ。相当な力ですよ。

浅沼拓道 ワイヤー荷役は何年間ぐらいやったんですか？

沖山昇 私は2カ年やった。

浅沼拓道 2カ年で終わった？

沖山昇 3年ぐらいはやったはず。あと1カ年は忠岡さんがね。私がやめてから忠岡さんがやって、製糖工場に移管したと。

浅沼拓道 これは、デリックの跡ですか。

沖山昇 一本足マスト。

聞き手 じゃあ、貴重な遺跡だ。初期の3本マストはここにあつて、あれは違うんですね。

沖山昇 こっちは1本マスト、アメリカ船の。

聞き手 あ、アメリカ船はこっち行っているんですね。

沖山昇 して、ここに階段があつたんですよ。階段があつて、ここに小島があつたんですよ。

聞き手 小島？

沖山昇 この崖から離れて小高い島が。それをコンクリートで今はつないでしまったわけ。

聞き手 ここは小島だったんですね。

沖山昇 崎山岬つってね。崎山さんという人が、台風の後、ここからおりていって、ばーんと来た波に流されて、して、次の波でまた戻ってきて、この岩にしがみついた。で、崎山岬って。

(船揚場横の岩場を指して) はいはい。あれが係船ブイ。

聞き手 係船ブイですか。

沖山昇 あれに、本船からの係船ロープをかけてね。

聞き手 あれは昔のものですか。

沖山昇 固定するもの。もう昔から。木が腐れたら取りかえてして。

聞き手 その前に木が刺さってたような穴ありますけど、そこも係船ロープの跡ですか？

沖山昇 そうです。

浅沼拓道 すごいなと思うんですけど。台風でとれそんな感じもするんですけど、とれないですね。結構、下埋まってる？

沖山昇 そうでしょうね。コンクリートで固定しているから。

浅沼拓道 大東丸でも使ってたかね。

沖山昇 こっちで荷役するときは使っていたわけ。今はもう使わないさーね。

浅沼拓道 今は使わないですけど。

#### <北大東郵便局への臨時採用>

聞き手 ワイヤー荷役の後、郵便局に臨時で採用されてんですね。

沖山昇 郵便局が開局するから、県の採用試験のために一生懸命勉強していたら、いやいや、試験はいらない、現地の人をそのまま採用するからって言って、試験も受けないですぐ臨時で入ったの。おーし、採用されるぞと思って行ったら10カ月で首になった。後で採用した人が大勢いるから、あんたは臨時だからもう終わりって言うてから。その前に製糖工場からも誘いがあったんですよ。おまえ、製糖工場に来ないか、あんたは郵便局で仕事する人じゃないよって。

浅沼拓道 郵便局は3人体制ですか？

沖山昇 3人。局長がいて、通信士がいて、窓口がいて。  
聞き手 で、昇さんは？  
沖山昇 窓口。第一号。製糖工場からも、来んか来んかと言ってきてましたよ。私はあっちこっちに仕事行ったら大変だから、郵便局で頑張りますって言っていたら、首になってしまってね。そしたら、所長に島田清四郎さんがいたのですぐ製糖工場行ったんですよ。うちの家内のいところ。学校の校長をやめて、製糖工場の所長になっていました。。

<結婚したころ>

聞き手 奥様と結婚されたのは製糖工場に入った後ですね。美智子さんはもともと島の方でしたか。  
沖山昇 今帰仁から。この経緯はまたおもしろいですよ（笑）今帰仁の幼稚園で保母さんしていたって。それをこっちで校長していた、いところの島田清四郎さんが、こっちに幼稚園の保母がないから、こっち行こうって言って連れてきたと。  
聞き手 島田清四郎さんがいところになるんですね。  
沖山昇 お父さん同士が兄弟。  
浅沼拓道 清忠さんのお兄さんですね  
沖山昇 泊港から来るときは、小さい船だから、私はこんな小さい船乗って怖いから行かないって言ったから、いやいや、沖に大きい船がいるんだよってね、そしたらそのまま（笑）  
聞き手 だまされて。  
沖山昇 これだまされてよーって。  
聞き手 今帰仁で保母されていたのを、清四郎さんがこちらに連れてこられたんですね。それで出会いが生まれたんですね。  
沖山昇 青年活動っていうのをやるでしょ。青年活動やると、私もおもしろおかしくやるもんだから、お姉ちゃんたちがグループなっているところに必ず割って入るんですよ。そしていろんなユンタクしているうちに。  
聞き手 この話は大事な話ですね。  
沖山昇 大事な話ですよ、これは。人間っていうのは、またこれ縁っていう

のがあるんですよね。1番美人、2番美人、3番美人、うちのは3番ぐらいだったですよ。1番、2番は彼氏いたんですよ。これはい  
なかつたから（笑）

聞き手 清四郎さんと美智子さんのお父さん同志の関係は？

沖山昇 お父さん同士が兄弟。清四郎さんのお父さんが長男で、美智子のお父さんは次男か三男かな、弟ですよ。清四郎さんは、うちの小学校の先生でもあるし、国語なんか教えて上手だったですよ。ビシビシ頭に入りよつた。

#### <製糖工場への転職>

聞き手 ワイヤー荷役の関係で、西港で仕事するために島に帰ってきて。その後、郵便局の臨時採用があつて、すぐ首切られて（笑）困つたと。郵便局で首を切られて、次の製糖工場に移るあたりから、もう一度お話をお聞きします。

沖山昇 製糖工場に行く1カ月か2カ月前ぐらいですよ。

聞き手 製糖工場に入ったのは34年の3月。2月に郵便局を退職しています。そのとき、島田清四郎さんから声がかかつたと。

沖山昇 君もう、郵便局より製糖工場のほうがいいんじゃないかつて。電気の担当をやってくれんかということですから、いやー、高校の先生が、仕事をきょうやめた、入つた、やめたつてね、トビ仲間になるんじゃないよつてね、一旦仕事したら、一生懸命頑張つてやるんだよつてね、長らく勤務するほうが一番いいんだからつていうことを聞かされていたものだから。郵便局でまだ1年もならないのにね、だめだから。私、頑張りますよつてやっていた。そしたら、任期満了つていってからに首になつたんです。しまつたと思つてね。そうか島田先生、私がこうなるのわかつていたのかなと思つたりしてね。そしたから、もう、明日で終わりだよつてときに、島田先生、あの、製糖工場、何か電気工事おくらせているみたいですから、私使つてくれませんかつて言つたから、あ、明日から来いつて。

聞き手 速攻ですね。

沖山昇 きょうやめたのに、あしたから製糖工場に。郵便局では、ぴしゃっ

として、ネクタイも締めていて。明くる日は、作業着を着て、電気工事するバンドにペンチから道具からみんなこうやって出勤しましたよ。

聞き手 本来の姿に戻った。郵便局は、突然首切られたんですか？もう、来なくていいよって感じですか？

沖山昇 こう言いよったですよ。採用されている人がもう待っているの。臨時はみんな終わりだから、つってからに言いよったですね。局長は、開局だからということで、軽い気持ちで現地の人をということでやったんですけ、やっぱり後がまずかったんじゃないですか？

聞き手 島田清四郎さんとはそのころ、どういう関係になりますかね。奥様とはまだ結婚されていないんで。その時、清四郎さんは。

沖山昇 製糖工場の所長。所長じゃなくて、専務か常務かですよ。所長は新里所長という方がおられたからね。

聞き手 では、北大東製糖の島に在住する役員として清四郎さんがいた。もとは学校の先生でしたよね。

沖山昇 学校の先生していた。学校の先生から農協に引っ張られて。製糖工場建設事業を始めて、農協から移ったんですよ。製糖工場をつくる準備があるからっていうので引っ張られたんですよ。

聞き手 建設途中で、電気工事が残っているから、それをやってねという話になったわけですね。

浅沼拓道 清四郎さんはもともとは、教員になるってこっち来たんですか？もともどこっちの出身？

沖山昇 こっちの出身。島田清忠ヤーで生まれた。そこにお父さんがいた。

浅沼拓道 勉強が達者だから、先生にならないかっていって、先生になったんですか？

沖山昇 清四郎先生はね、島を出て勉強したかったんだが、会社が許さんですよ。那覇でおじさんが校長をしていたんですよ。校長の手伝いをやらんといかんからって、手紙書かして、これを会社に送って、会社がそうかつつてからに許可して島から出たんです。そして、師範学校行った。労力不足するからって、会社は若い者を出さなかったんですよ。



聞き手 島田の清四郎ヤーっていうのは、どこかわかります？  
沖山昇 これでしょ？  
聞き手 これシミズ。  
沖山昇 もとはシミズ。シミズさんが引き揚げてから島田ヤーになった。  
聞き手 農家、小作人の子供だったんだけれども、かなりできがよかったんですね。  
沖山昇 おじさんに頼んで、行ったわけですから。  
聞き手 学校の先生だからっていうので、よく知っていた。  
沖山昇 はい。先生で、島田先生の妹も私の同級生でいるんですよ。島田清忠さんのお姉さん。清四郎さんが長男でしょ。次男がセイタケ、三男がセイショウつつて、四男がセイチュウ、五男が、マサカズ。セイチュウのお姉さんにセツコっていて、私の同級生。昭和5年。  
聞き手 ということは、昇さんと清四郎さんとは、そんなに年は離れていないんですね？  
沖山昇 そうですね。  
聞き手 向こうは先生で。  
沖山昇 若い先生でしたね。  
清四郎先生、何年生まれかな。長男より上でしょ。  
聞き手 良夫さんは大正12年。  
沖山昇 そのくらいの方だから。  
聞き手 ということで、島田さんから、製糖工場に來いと言われたわけですね。製糖工場は3月15日完成、18日に操業開始。  
沖山昇 操業する前、もう直前に。私、電気工事がおくれているみたいですがって言ってからに。  
聞き手 それは本当におくれていた？  
沖山昇 口実で言ったんですけどね(笑) ちょいちょい行っていたんですよ。郵便局から配達ものがあつたし。必ずどうなっているかなって見たりしてね。  
聞き手 で、本当におくれていたんですか？  
沖山昇 おくれていましたよ。操業するというのに、おくれてるな一つってから、これわかっていたもんだから、言ったんですよ、採用の口実に。

聞き手 2月に退職して、3月の頭から製糖工場に行って、18日の操業開始までに突貫工事ですか？

沖山昇 突貫工事やったです。

聞き手 昇さんの役割は何でしたか？

沖山昇 電気室勤務。免許を持っているものですから。

聞き手 で、開業に間に合わせた。

沖山昇 間に合ったさ。

聞き手 その後、製糖工場では。

沖山昇 10年くらいやりましたね。

聞き手 10年間のお仕事はどんなことをされましたか？

沖山昇 最初は電気室でやっていましたが、して、製糖が終わったら、夜勤もしましたよ。今度は修繕がありますでしょ。これは1年くらいしましたかな。その後、工場長から、あんたは工務に来なさいということになって。工務でまた事務をするようになりましてね。工場関係の人の日報整理したりね。

聞き手 工務係は事務職なんですね。

沖山昇 工務で一生懸命やって、それから、工務係長。  
この間は、採鉱事務所と同じでね、2、30名分の日報を整理して、その後は電気室の見回りをしたり、工場の部品を注文したり。部品注文は大変だったんですよ。ちゃんと寸法書いてね。ローラーなんかは図面なんかも書きよったんですよ。製図つってね。ちゃんと測ってからね。

聞き手 設備の管理ということですね。

沖山昇 管理、のお手伝い。工務課長がいるわけですから。課長の命令に従って。当時の課長は、浅沼さん。与儀組の社長の、浅沼商店の、おじいちゃん。浅沼さんに庶務に来なさいつってからに呼ばれて。

聞き手 浅沼さんはその時。

沖山昇 工場長。

浅沼拓道 これは大型製糖工場じゃない時代の話ですよ？

聞き手 最初の含蜜工場ですよ？

沖山昇 昭和33年の大型黒糖工場。だから、おじいちゃんが南大東から。

浅沼拓道 ああ、このために来たんですね？

沖山昇 32年ごろに来たはずよ。南大東から技術者として。  
浅沼拓道 立派な石積みの工場だったんですね。  
沖山昇 石積み？ああ、ブロックヤー、ブロック積みって言ってた。  
浅沼拓道 あ、これブロック。  
聞き手 壁だけですね。コンクリートで柱をつくって。  
沖山昇 ブロックを積む。現代の沖縄式の。  
浅沼拓道 ドロマイト積んだのかな、なのに残ってないのおかしいなと思ったんですよ。

#### <製糖の仕事>

聞き手 製糖工場の工務課で、係長から、課長代理になって、課長になっていきますが、その間の仕事の内容は同じですか？  
沖山昇 仕事の内容は、浅沼さんの指示に従って、毎年、部品の注文書を書いたり、図面書いて添付したり、こういった工務の仕事。  
浅沼拓道 このときから夜勤もありましたか？  
沖山昇 製糖期はよ。12時間交代。  
浅沼拓道 今と一緒にですね。  
沖山昇 だから、給料は5倍になってね。  
聞き手 工務だから、工場で働く人たちの労務管理ですよ。畑との関係する仕事はしてないんですね？  
沖山昇 農務係ってというのがありましてね。ワッターは工場だけ。  
聞き手 工場の中も季節工がいらっしやいますよね。季節工の人たちの管理は？  
沖山昇 浅沼さんがみんなやっていました。私は工場長のお手伝いっていうことでね。  
浅沼拓道 季節工の宿舎はどこでした？  
沖山昇 今の宿舎と同じ。  
浅沼拓道 中野区に長屋グラーがあった？  
沖山昇 はいはい。それとか、港区にも。今もみんな港区に住んでいるですよ、それと一緒に。  
浅沼拓道 キビ刈り隊も韓国とかから製糖工場が募集してましたか？  
沖山昇 農家と農務係と一緒にやりよった。

聞き手 台湾、韓国から労働者入れているときも。

沖山昇 はい。

聞き手 工場のほうにも来ていますよね？

沖山昇 工場にも来てました。工場は、本社が募集して、送ってきたんですよ。元台湾工場で、日本の製糖工場に勤めていたという技術者が来ていましたよ。日本語もぼちぼちわかってね。何年か来ましたけどね。私、レンガのおうちつくりしましたよって行ってね、写真持ってきていましたよ。台湾に帰って、大東でもうかったお金でね。

聞き手 その台湾の方は、戦前に台湾にあった日本の製糖工場で働いていた人ですね。

沖山昇 1人だけですけどね。

聞き手 昇さんが工場で働き始めてすぐのころも、台湾から人が入っていたんですか？

沖山昇 最初は、本島からですね。だんだんと厳しくなって、台湾から。それと、国頭や久米島からも。団体でね。

浅沼拓道 当時、製糖期は、何月から始まって何月終わりですか？

沖山昇 だいたい今と同じよ。

浅沼拓道 あー、手刈りでもそんなもんですか。3カ月で終わるんですね？

沖山昇 終わるのは7月ごろまで。ハーベスターが来ないうちは。

浅沼拓道 7月、長いな。

聞き手 製糖期は1月から7月ということですね。

沖山昇 あ、ごめん。大型工場になってからはそうじゃない。やっぱり遅くても4月か。12月から始まったりね。今と変わらない、工場の圧搾というのは、もう似ているわけだから。キビ出しはやらんといかんわけだから。

浅沼拓道 刈り取りスピードが全然、今と違うはずだけどな。そんだけの刈り取りの人手がいたんですね。

沖山昇 だから、刈り取り労働者を頼んできたわけさ。1日の圧搾量を満たすためには、何名のキビ刈りが必要だということを計算できるわけだから。私が7月までというのは、小型工場の頃。その前までのことですね。

<含蜜工場から分蜜工場に>

聞き手 昇さんが、工務課長になるまでの間に、含蜜工場から分蜜工場に変わってますね。含蜜工場は34年で、分蜜工場開始が41年なので、7年ぐらい含蜜工場でしたね。

沖山昇 これは話を聞いたら、北大東の砂糖は辛くて売れないと。メーカーがいますでしょ。卸でとるところが。そこが売れないというもんだから、安い値段でたたかれたら大変だということ。

聞き手 随分、塩っ辛かったっていいですよ？

沖山昇 私なんかは笑ったんですよ。砂糖が辛いということがあるかってからに。やっぱり分析の結果でしょうね。メーカーがそう言うわけだから。して、たたかれるわけだから。それじゃあいかんつって、分蜜工場にしたと。

聞き手 分蜜糖工場に転換するときには、かかわられたんですか？

沖山昇 ずっといましたよ。

聞き手 含蜜工場から、分蜜工場に変えるときは、建屋自体は変えていないですか？

沖山昇 変えていないです。中の機械をふやしたり、交換したりして。

聞き手 総取っかえではないですか？

沖山昇 圧搾とかね、ボイラーは変わらん。発電機も変わらん。攪拌機、分離機を入れたんですよ。黒糖を煮詰める結晶缶というのが増えたわけですよ。黒糖をつくるのと、ざらめつくるのと相当違いますからね。こうして、機械の入れかえ。

聞き手 どういう設備を入れるかとか、その設計とか、そういう話にかかわっているんですか？

沖山昇 みんなやりました。

聞き手 設備に詳しい専門家は昇さんしかいないんですかね？

沖山昇 向こうから専門家が来ますから。

聞き手 あ、メーカーから。

沖山昇 私は工場内だけです。設計したりするのは、みんな発注先。我々はそれを引き継いで管理する。最初のうちは何かわからないです。操業しているうちにわかって、やめるころになると、熟練してくるわけだから。テーブルの上に座って、砂糖ができるまでの工

程図を書きよったですから（笑）

聞き手

分蜜が変わったときは、とまどったものですか？

沖山昇

黒糖を煮詰める機械と遠心分離機が変わっただけだから。これ見て、なるほどと思って、珍しくてしょうがなかったですがね。

聞き手

そんなに苦労があったわけではないんですね？

沖山昇

専門家が来て、ちゃんと取りつけまでやるわけだから。

聞き手

農家は別に関係ないし。

沖山昇

関係ないですよ、工場だけ。

聞き手

積み出しは相当変わるわけですよ？

沖山昇

積み出しは変わりますよ、ばら積みになるわけだから。して、ばら積み倉庫つって、西港の貯鋳場の前に、。今、ちょっと屋根が張られてますけど、倉庫がありますよ。第4倉庫の下。

浅沼拓道

ざらめを入れるトン袋があったんですか？サーター荷役の時、とってやってる。

沖山昇

あった。

浅沼拓道

昔からあるんだ。

沖山昇

分蜜は最初からこれ。

聞き手

黒糖はどうやって出荷していたんですか？

沖山昇

黒糖は紙袋詰め。黒糖を粉みたいにしたのをね。突き固めするわけです。四角い紙袋に詰めるために、女の子たちがいっぱい、20名ぐらいいましたよ。

聞き手

固まりにはなっていないんですね。粉糖状態なんですか？

沖山昇

はい。

聞き手

黒糖の出荷というのは、戦後はずーっと西港からですか？

沖山昇

西港から。

聞き手

もう上陸からはやっていないんですね？

沖山昇

はい、上陸からはもうなってない。あれは戦前のもの。

沖山昇

西港の場合は倉庫の中にバラで積んでいたわけですよ。それをまたじょうごで袋詰めして、それから出荷したんです。隣鋳を貯蔵庫に入れる四本柱にじょうごがあったでしょ？ああいうのをつくって、バラ積みの倉庫から入れたんです。

聞き手

工場から持って来て、倉庫の中に流し込んでいただけですか？

沖山昇 はい。ダンプで持って来て、上から流すでしょ。そしたら、飛ばす機械があるんですよ。反対側でじょうごに落ちるパイプみたいなものがあるから、そこまで飛ばす機械をつくって、奥のほうにどんどん積み上げていくわけですよ。今度は外に四角い柱置いてありますから、またじょうごがあって、ここから袋詰めする装置があって。燐鉱やるのと一緒で。

聞き手 そういう仕組みは、メーカーが考えたんですかね？

沖山昇 専門家がみんなやってくれた。

聞き手 燐鉱とすごく似ていますね。

浅沼拓道 南大東を参考にですか？あっちのほうが先に進んでいるはずですよ。

沖山昇 うん、先だから。だから、浅沼さんが来たわけさ。南大東で経験者だから。

#### <外国船の難破>

聞き手 沖山さんが製糖工場におられた10年で、一番大きな出来事は分蜜工場に変わったことですかね？

沖山昇 まあ、そうですね。

聞き手 記憶に残った出来事はありますか？

沖山昇 ないですね。同じようなパターンで。製糖終わったら、分解して。錆止めして。して、製糖前に組み立てて、製糖をしてって、これの繰り返し。この間の出来事といえば、・・・アメリカ船、ギリシャ船。36年ですか？

聞き手 外国船の難破ですね。37年です。

沖山昇 また、浅沼さんがね、先頭になって、工場で使える部品を取りに行ってますね。工場に持ってきたんですよ。真鍮の合金と、ねじ類。いっぱいあったんですよ。一斗バケツ5、6杯ぐらいあったよ。

沖山昇 そしたらね、裁判沙汰になるでしょ。

聞き手 なりますよね。

沖山昇 その前に、浅沼さんが、昇くん、これ1本、1本、みんな記録してくれと。何インチのボルトが何本って行って、みんな記録してですね。昇くん、あんたがこれやってくれて助かったよ、裁判になって

ね、工場が船の品物をみんな盗んだということになっちまって。  
聞き手 実際には、裁判になったんですか？  
沖山昇 なったそうですよ。浅沼さんの話ですけど。我々はちょっとわからなかったですけど。  
聞き手 船主から訴えられたわけですね。  
沖山昇 船主かな。そうしたら、ちゃんと記録されていますつってからに。  
聞き手 記録があつて助かったことは？  
沖山昇 そしたら、預かっていたんだと。なくなるものをね。荷揚げして、預かっていたんだということになってね。盗んだんじゃないよつてから。それで助かったよつてね。  
聞き手 で、お返ししたわけですか？  
沖山昇 いいえ、もらったですよ。  
聞き手 あ、もういいよと。  
沖山昇 もらった、盗んだんじゃない、預かっていたんだ。船の応援をしてくれたんだつてからに。  
聞き手 なるほど、感謝されて。本当ですか（笑）  
沖山昇 やっぱり細かく何でもやるべきだなと思ったんですよ。  
聞き手 そりゃあ、すごい話。  
浅沼拓道 座礁船は沈んだんですか？引っ張って持って帰ったんですか？  
沖山昇 みんな分解して、スクラップで持っていった。タクオさんが。ソメイユキノブさんの弟。  
浅沼拓道 あそこから引き上げるってまた、大変な作業だったんですよね。アメリカ船。  
沖山昇 分解して、みんな、酸素で切つて。  
聞き手 西港のマストクレーンをつくったのは、アメリカ船からですよね？  
沖山昇 アメリカ船のマスト。これも浅沼さんが。  
聞き手 それも浅沼さんなんですか？  
沖山昇 以前の3本マストつたらね。これもう、手入れするのが大変だ一つつて。それから1本マストにしたんですよ。して、アメリカ船のマスト、大きいでしょ。これをカットしてから、トラックを2台重ねてね。製糖工場で設計して、それを港区に持ってつて。これを港



でつないで、溶接でね。したら、マストになって。崎山岬っていう割れ目に、ちょうどあいていたから、そこに立てたんですよ。

聞き手 崎山岬の溝のところに立てたということですか。で、コンクリートで埋めたと。

沖山昇 そうそう。

聞き手 マストクレーンの設計は誰がしたんですか。

沖山昇 浅沼さんが。私はただ言われるとおりに図面引いたんですよ。階段のはしごをつけたですから。ここ何メートルあるから、何センチ置きにはしごをつけてくれーしてから。

聞き手 基本的な設計は浅沼さんがやる。

沖山昇 こういうふうなのを書きなさいしてから。

聞き手 その前の3本マストは結構不便だったんですね。

沖山昇 3本マスト？あれはもう大変です。ガイマン、ガイボック、オンボックつつってこの2つを回す。ボックも使えんといかんから。あれは1つだけで済みますから。

聞き手 操作が難しかったんですか。

沖山昇 そう。1つは、取り付け、取り外しが大変だったですよ。2本やらんといかんでしょ。1つは海に出ているのね。ガイボックつと言う。1つはオンボックっていうのがある。荷物をやるボック。2つあったんですよ。アメリカのマストつけたら1本で済みますから。

聞き手 長いからですか。

沖山昇 長いから。

聞き手 3本マストはそもそも小さいから。

沖山昇 木だから短いでしょ。

聞き手 短いですね。

聞き手 1本立ってて。2本を支えていて。ガイボックが支点になって、オンボックが動く。

沖山昇 オンボックを沖に引っ張ったり、まわったら緩めたりするの。

聞き手 てことして。

聞き手 そういう構造なんですね。可動範囲も小さいから、もうちょっと大きいものにしたかった。そこで、マストがどんとあったので。

聞き手 マストのほうは問題にならなかったんですか。

沖山昇 ううん、問題ないですよ。もうスクラップになってるわけですからね。

聞き手 もうどうしようもないから。

沖山昇 アメリカ船はすばらしい乗用車をいっぱい積んでましたよ。

聞き手 そうらしいですね。

沖山昇 それを役場が1台、学校が1台、農協が1台、製糖工場が1台して。みんなね、乗ってたんですよ。そしたら、お巡りさんから、無登録車運転はだめですよって（笑）全部返して。そしたら4号倉庫の後ろで野ざらしだから。ぼろぼろになって。みんな処理しきれなかった。これも荷主と裁判になって、こんなこんなしてる間に、解決しないで、腐れてしまった。

聞き手 車のほうは裁判沙汰になったんですね。

沖山昇 裁判かかって、荷主がわからなくなってるさ。そのままになっちゃって。とりに来る人もいない。無登録車は捕まるから（笑）そのまま置いてぼろぼろになったですよ。あれはもったいなかったですね。

#### <全島電化>

聞き手 同じ頃に、全島電化もありましたね。電化は、まさに昇さんの専門ですけど、農協がやっていた電気事業にかかわるって話はそのころまで全然なかったんですか。

沖山昇 製糖工場の頃、全島電化しましたが、これはみんな私の免許で。広域事業化というか、農漁村電気導入法というので、農協が電気事業をしていたもんだから。農協が高圧送電をみんなやったんですよ。

聞き手 農協の電化事業には、昇さんはかかわったんですか？

沖山昇 私は製糖工場にいたけども、製糖工場に相談して、沖山君を貸してくれということになって。

聞き手 それで貸し出されているんですか、昇さんが。

沖山昇 うん、私の名義をね。

聞き手 名義を。実質的にはかかわってないんですか。

沖山昇 実質的にはやらない。

聞き手 じゃあ、昇さんが資格者だから、昇さんの名前のもとで。農協が電化事業を進めて、全島電化が整ったと。

沖山昇 国の総合事務局の広域事業課というところ、電気の補助金出すところに私の同級生もいたんですよ。農協にしょっちゅう来てましたよ。最後の検査にも来て。そしたら、電柱ナンバーつけるんだ。沖山さん、はい、一緒にやりましょうって行ってからに。検査官が一生懸命、応援してつけてくれましたがね。

浅沼拓道 農協のトップは誰でした？

沖山昇 伊波亀太郎（イハカメタロウ）さん。

沖山昇 伊波亀太郎が、この製糖工場に来て。

聞き手 伊波亀太郎さんは、あの伊波竹善さんの・・・

沖山昇 お兄さん。製糖工場の所長。

聞き手 清四郎さんが所長ですよ。

沖山昇 清四郎さんの後かな。清四郎さんが専務になって。所長になってきた。清四郎さんは本庁に行きましたからね。

聞き手 那覇のほうに。伊波兄弟とは随分、縁がありますね。

沖山昇 そうですね。

#### <気象台観測所>

聞き手 製糖工場の中に気象台の観測所がありましたか？

沖山昇 これは農務がやっているから。わからなかったですね、私は。

聞き手 やっぱりあったんですね。

沖山昇 農務課の係長が。サトウキビ関係のことでしょ。だから農務が監視してました。

#### <電気の資格>

浅沼拓道 資格を取った時期は聞きました？

沖山昇 那覇で取ってきた。高校卒業したらみんな卒業した年に取りよったよ。私は実地やってから取るつってからに。会社入って実際にやって身につけてから、1年たってから免許取ったから、一発で取れたんだよ。

浅沼拓道 電気の種類免許。

沖山昇 最初は第一種電気工事士だった。

浅沼拓道 これもヨシマサさんと昇さんしか島では持っている人はいない。

沖山昇　　もうヨシマサさんもないし。

浅沼拓道　電気は全部、昇さん。

<結婚と養子縁組>

聞き手　　製糖工場のころに、御結婚されているんですね。昭和36年ぐらいかな？

浅沼拓道　アルバムの写真にはそう書いてます。

聞き手　　係長になったころですね。このときに結婚されて、結婚されたと同時に養子になって。

沖山昇　　養子になったんですね。

聞き手　　養子になるときには、孝さんと奥さんが今のお住まいのところでいて、そのおうちに入る形で、昇さんと美智子さんが2人でそこに養子に入った。

沖山昇　　入ったら孝おじいさんが倒れて。行くと同時に倒れてね。寝たきりっていうのかな。半身不随になって。14年間面倒見たですよ。介護したんですよ。

聞き手　　自宅介護なんですか。

沖山昇　　自宅介護。

聞き手　　大変な時期だったんですね。

沖山昇　　そうしたら、孫もできてましたがね。学校の運動会っていったら、寝台に寝ているのが、今度は座ってですね、私の動作をしょっちゅう目で追うわけですよ。これはひよっとしたら行きたいのかなーと思ってからに、おじいさん運動会見に行きたい？って言ったから、うんうんうんっていつてもう喜んでね、子供みたいに。それからオートバイ、あのころ車はまだ持ってなかったですから、オートバイ乗せて学校まで行ったら、道からおんぶして運動場まで連れてったりして。

それから大東宮。お祭りつつたら、孫の相撲見たいんでしょうね。そしたらまた、そわそわする。ああ、また行きたいんだなーと思って、大神宮のお祭り、相撲見に行きたいか？って言ったから、行く行くって言ってからね。これもまた、あの大東宮は階段がありますでしょ。あっちをおんぶして。

浅沼拓道 テラサワアキラ教育長が、昇おじい、孝おじいをおんぶして、よく連れて来てたって言ってました。

沖山昇 あはははは、そっか。恥も外聞もないんですよ。ただもう、おじいちゃんのことばかり考えているもんだから。よそなんか関係ないって言ってから、おんぶして、ずっと相撲土俵のところまで連れて行って（笑）そんなにもして14年間やりましたよ。

聞き手 養子に入られてから、孝おじさんのことは親父と呼ぶようになったんですか。

沖山昇 まあ、おじさんだから、親父は親父でいるわけだからね。おじさんとして。また、かわいがられましたからね。やっぱり私を養子にしようとして、いろいろかわいがったんでしょうね。映画なんかするときなどは、昇はどこだ、どこだして、お菓子などを買ってからに。

聞き手 もう子供ができないっていうのがわかってて。

沖山昇 できないから、いないから。

聞き手 最初から三男坊をと思ってたんですね。

沖山昇 して、おばあちゃんもそう思った。おばあちゃん、孝おじいの母親ですよ。

聞き手 四郎さんの奥さん。ツグさん。

沖山昇 そうそう。どうも私に限ってとにかくかわいがられるわけですね。

沖山昇 だから今考えたら、やっぱり養子にしようとして、一生懸命かわいがってたんかなと思ったりして。

聞き手 昇さんが養子でタカシヤーに入ったときは、四郎さん、ツグさんはいらっしやったんですか。

沖山昇 いましたよ。

聞き手 四郎さん、ツグさんがまずそこに入って。その後、孝さんがそこに入ったわけですね。

沖山昇 そうそう。

聞き手 同じ敷地の中に孝さんのおうちがあって、四郎さん、ツグさんの離れがあって。

沖山昇 そうしたら、おじいちゃんが亡くなったでしょ。今度は、おばあちゃんは港区の守身おじいのうちに。守身おじいが面倒見たわけですがね。孝おじいも余り体、順調じゃないしよったもんだから。

うちらはそこ来た。おじいちゃんがいたおうちは、カヤぶき屋根がもうぼろぼろでしたから。これを壊して、養子が来たからっていうんで、上等のうちをつくってくれましたよ。普通の柱なんかは三寸五分だけど、四寸柱でつくるって言ってから。まだそのうちがありますよ

聞き手 今も建ってる？

沖山昇 そこに住んでいるんです。して、私が、増設、増設してやりましたけどね。

聞き手 孝さんが住まわれていたうちは、今はないんですか？

沖山昇 もう亡くなったから、おばあちゃんも施設に行ったし、みんな壊して、土地改良で畑になった。

聞き手 孝さんは、魚雷攻撃で体を悪くされて。

沖山昇 農業してましたよ。ケンコンケンコンしながら、びっこしながらでも、牛も、すきも使ってましたから。ところが、私が養子に来てからは、土曜日曜にみんな私がやりました。牛で耕してね。ところが、トラクターが出てきたでしょ。私は小作に出したんです。

浅沼拓道 何町歩ですか？

沖山昇 4町歩ぐらいあった。

浅沼拓道 そっか、大変だな、土日作業じゃできないですね。

聞き手 4町の畑は大きいほうですよ。

沖山昇 大きいほうですよ。幕外の畑に比べると相当大きいですよ。

沖山昇 これを3分の1は糸数さんという方に分けて、残りはめいっこがやっていますよ。

浅沼拓道 小作雇ったって言ったじゃないですか、製糖工場勤務のときから。それからずっと昇さんは畑はやってない。

聞き手 畑はもう全部売っちゃっているんですね。

沖山昇 もうないですよ。

聞き手 宅地だけが残っているんですね。

沖山昇 長男も次男も、おまえ帰ってくるか、どうするかっていうから、帰ってこないっていうもんだから、じゃあもう農業は私やりきれないから売るよつつつて、売ってしまった。うちの兄貴の子供が。ここによその人が入ってきたりなんかしたら、畑のあんばいが悪い

から、一つにまとめないかって言ったか、ああ、やるやると言うてからに、すぐ分けて。

<結婚までの詳しい経緯>

聞き手 結婚の経緯を改めて教えてください。島田清四郎さんのいところ、今帰仁で保母さんをやってた美智子さんがこちらに来られて幼稚園勤務になったわけですね。

沖山昇 私が製糖工場だったですかね。青年活動もして、縁があったんでしようね。それで結婚したと。

浅沼拓道 幼稚園はよし子先生と二人でやってたんですかね？

沖山昇 よし子先生の前だな。オオシロノブコ先生、チエコ先生だったかかいて、その人がやめたからっていうので、呼ばれたという話をしていた。

聞き手 青年活動で初めて知り合って、結婚するまでどのぐらい時間かかったんですか？

沖山昇 どのくらいかかったかね。せっかちなほうだから。

聞き手 出会ってから割とすぐ結婚。

沖山昇 へへへ(笑) 島田校長先生だった人のいところっていうもんだから、我々はびっくりしてたんですよ。うちの父なんかもう、これは大変なことになったっていつてからに、すぐまた、話し合いしに行つて、オッケーして。

聞き手 それは島田先生のところに話に行つたわけですか。

沖山昇 そうそう。

聞き手 いところをもらいたいと思いますと。

沖山昇 はい。しまで島田先生がオッケーして、今度は親。

沖山昇 まず、今帰仁の親のところに行かないで、島田先生の弟でセイジンさんつつつて、こっちにいた人が今帰仁にいますから。うちの父と懇意だったんですよ。その人を通じて、昇がこうこうだから、どうかと言うてからに、あは一、上等上等して、はい、私が行くつつてから一緒に行つて説得したらしいですよ。

聞き手 御両親に挨拶に行つたのは。

沖山昇 父が清四郎さんの弟と一緒にいって。

聞き手 即座に御了解いただいて。じゃあ、結婚する前は、昇さんは御両親には会ってないんですね。

沖山昇 向こうの？会ってないです。

聞き手 お父さん同士で話つけたから。

沖山昇 結婚式も清四郎兄さんが親代わりでやりました。

聞き手 美智子さんがこちらに来られているときは、清四郎さんが保護者というか。

沖山昇 そうそう。

聞き手 で、昇さんは結婚の許可を清四郎さんに求めに行ったということですか。自分で言ったんですか。

沖山昇 自分で言いましたね。

聞き手 美智子さんをくださいと。

沖山昇 このぐらいでいいんじゃないか（笑）

<披露宴の様子>

聞き手 大東で式を挙げるときは、式自体はどうやってやるんですか？。人前式なんですかね。

沖山昇 私らの場合は神前とかじゃない。形式的に、島田先生のうちに仲人と一緒に行って、結納。おうちで、式をやって、すぐ披露宴。式はもうね、2人床に座ってってからに、三々九度の杯。雄蝶雌蝶でね。小さい小学生が注いで、三々九度の盃をやって。

聞き手 神主さんとか。

沖山昇 そういったの無い。

浅沼拓道 結婚式はみんなおうちでやってたんですか？

沖山昇 島の人たちはおうちで、親戚呼んでやる。公民館でやる人もいたけど、体育館でやったりね。

うちではね。おうちの表をあけて、ドラム缶で基礎つくって、角材置いて板を張って、仮の会場つくったんですよ。

聞き手 屋根は。

沖山昇 屋根、テント張ってましたかな。

浅沼拓道 （結婚）写真を撮る前は、大東宮に行ったりしているんですか？

沖山昇 いやいや。行かない、しない。





沖山昇 やんばるにもう最初行ったときはですよ。ヤマトンチュ、ナイチャーの旦那さん連れて行くわけでしょ。行ったら、私が方言使ったり、沖縄の踊りしたりやったもんだから酔っ払って。行ってすぐの日ですよ。あれ、おかしいなって言ってから、沖縄の人と変わらないじゃないか、してからに、やんばるの人と変わらないじゃないかっていうことで。もうてっきりヤマトンチュと思っていたって。

聞き手 沖山なんていう名前になっちゃったから（笑）  
奥様の嫁がれてくる前の姓は島田ですか？

沖山昇 島田。

聞き手 当時、今帰仁まで行くと相当遠いですよ。時間かかりますよね。

沖山昇 船だから大変だったですよ。

沖山昇 馬天着いて、車で、那覇で泊まって。那覇でキクノヤというね、旅館があったから。北大東が泊まる旅館。

聞き手 それは定宿があるんですか？北大東の人はみんなキクノヤなんですか？

沖山昇 そうそう、キクノヤ旅館っていうところに泊まって。村長はじめ全部。役場の職員も製糖工場も。

沖山昇 キクノヤホテルつつって。西町の。

聞き手 知ってる？

浅沼拓道 その後のオリエンタルホテルは知っているんですけど。

沖山昇 オリエンタルホテルの前身。

浅沼拓道 あ、そうなんですね。

聞き手 オリエンタルホテルの場所ですか。

沖山昇 いや。場所は違う。近くですよ。

聞き手 若狭のキクノヤ。で、その経営者がオリエンタルホテルも。

沖山昇 イイン。別で。

聞き手 ただ北大東の定宿として、オリエンタルを使う前はキクノヤだったと。

沖山昇 キクノヤがあったけどよ、向こうがなくなったから今度オリエンタルホテル。

聞き手 で、次の日また車で今帰仁まで。奥様のご実家は何をされていたんですか？

沖山昇 農業。  
聞き手 農業で何人きょうだいの何番目ってわかりますか。  
沖山昇 長男、長女、次男、次女、三女、四女。2男、4女ですね。うちの長女。  
聞き手 長女をもらったんですね。今でも今帰仁には行ったりします？  
沖山昇 あ、必ず行くよ。仏壇に線香上げにね。今、誰もいないけれど。ちゃんと鍵も渡されて。自分たちで行く場合はこの鍵で開けて入ってくださいして。一番下の妹がね、今帰仁にいるから、あっちに合図すればあの人とちゃんとやってくれて、鍵開けて待っていたりしてね。  
聞き手 美智子さんとの暮らしが始まって、すぐお子さんが生まれて。2男2女ですね。製糖工場にいる間にお子さんは全部生まれているんですね。  
沖山昇 あ、そうですよね、はい。

<出産のこと>

聞き手 お子さんが生まれるときってというのは、当時は産婆さんですか？  
沖山昇 産婆さん、私なんかのときはもう大変だったですよ。経験産婆って言ってね。  
聞き手 経験産婆。  
沖山昇 免許持ってない産婆さんのこと。  
聞き手 島に産婆さんがいらっしゃったんですか？  
沖山昇 病院の診療所の看護婦していた人がね、産婆もしてましたよ。うちらより1つ上のお姉ちゃんですけどね。経験して。私なんかもおばあちゃんが取り上げたらいいですから。沖山四郎のツグ。あのころ産婆はいないんですね。  
聞き手 戦前は。  
沖山昇 みんな、お年寄りの経験者がね、取り上げてやっていたという。最初の子供はだめだったですよ。余り大きくて、産みきれないで。朝から、陣痛始まってから夕方までかかりましたから。お湯を沸かしたり冷ましたりしてね。とうとうだめでした、最初は。女の子でしたけどね。

聞き手 死産になっちゃったんですね。  
沖山昇 2回目からは大丈夫でしたけどね。  
聞き手 離島としてはそういうリスクがあるんですね。  
沖山昇 医者もいないし、産婆は経験産婆ですし。いろいろありましたよ。生まれてからね、ぬるま湯のたらいと、冷たい水のたらいと2つ置いて、これにつけたり、これにつけたりして、生き返らそうと思うんですがね、赤ちゃんを。だめでしたよ。朝から晩まで私はお湯沸かさーしたですな。  
聞き手 結婚してすぐ、最初のお子さんを身ごもられたということですか。で、その後に長男の功さんが生まれて。  
沖山昇 もともと年子。だから非常に健康体ではあるんでしょうな。  
聞き手 2男2女は全員、島で生んでいるんですか。  
沖山昇 そうです。  
聞き手 那覇に行ったりはしないんですね。  
沖山昇 那覇に行っていない。

#### <お子さんの消息>

浅沼拓道 家族の写真がありますよ。  
沖山昇 みんなこっちで生まれてる。  
浅沼拓道 僕、功さん初めて見たな。功さんはもうずっと東京ですか。  
沖山昇 そうそう東京。タクシー会社で管理の仕事をしている。  
聞き手 靖さんが大東海運でした？  
沖山昇 大東海運の総務課長ですか。  
聞き手 いずみさんは。  
沖山昇 いずみは、看護婦。那覇のこども病院の看護婦。  
聞き手 で、かおりさんは役場にいる。

#### <子育ての思い出>

聞き手 お子さん小さいとき、子育てで御苦労されたとか、子育てでこんな楽しい思い出があったとかっていう、そんなそういうエピソードありますか？昇さんは、子育ては奥さんに任せたほうなのか、かなり自分は貢献しているほうなのか、どちらですか？

沖山昇　　これは2人で一緒に。うちは、おばあちゃんもいましたからね。助かったです。沖山孝の奥さん、ハヤ。だから2人とも勤めに行ったんです。

聞き手　　美智子さんは、保母さんを受けられたんですか？

沖山昇　　子育て終わってから、すぐ勤めて。

聞き手　　子育て終わってからのって言うのは。

沖山昇　　かおり生まれてから。役場に勤めに出たんです。島田ツネコさん、島田先生の奥さんが勤めていたんですよ。して、あの人がもうやめたから、うちの美智子を後釜にということ。

聞き手　　美智子さんは役場に入ったんですね。役場にはその後ずっとおられたんですか。

沖山昇　　平成15年までいましたよ。定年まで。住民課長でした。

浅沼拓道　　女性初の課長じゃなかったですか？

沖山昇　　そうですね。

聞き手　　役場入られたのは、かおりさんを生んですぐですか。

沖山昇　　そうそう。総務課だったですね。最初は入ったのは。

聞き手　　御夫婦で、かなりの長い間、役場で重なっているんですよね。

沖山昇　　子供育てるつつつても、別にこれに困ったということはないですね。

聞き手　　お二人とも働かれていますから。

沖山昇　　おばあちゃんが面倒見ていましたよ。子供たちは、おばあちゃんにかわいがられてですね。おばあちゃんがいつも、小学校なるまで、おんぶして歩いて。したら、うちの入り口まで来たら、もうおろせおろせしてからに、いや、うちまではおんぶするっていつてから、いやだめ、もうお父さん怒られるから、おろしておろしてしてから。あんなしたことあったって。

聞き手　　優しいおばあちゃんですね。

#### <農協への転職>

聞き手　　製糖工場で工務課長にまでなられて、昭和45年に退職して、農協に移るのですが、そのときの経緯を教えてください。

沖山昇　　浅沼さんがやめて、私が工務課長になったんですよ。私にバトンタ

ッチしてね。議会議員に専念するっていうことで。

聞き手 浅沼さんは工務課長だったんですか？工場長というのは工務課長  
なんですか？

沖山昇 工場長は工務課長がやってた。  
私も1年は我慢しましたよ。浅沼さんの後を継いで。もう内容はみ  
んなわかるわけだから、やっていたが。すると、沖縄電力の話が出  
たんですよ。(農協から)沖縄電力に電気事業を移管するという話  
があったもんだから。製糖工場やるよりは本職に戻ったほうがい  
いというので。で、製糖工場に辞表出して、それから農協。農協は  
電気事業しているわけですから。して、沖縄電力に行くと。その  
ために農協に行ったんですよ。

聞き手 どこからか声がかかったんですか？

沖山昇 自分で本職に戻ろうということで。私からお願いしに行った。

聞き手 どこに話に行ったんですか？農協に行ったんですか？

沖山昇 農協に。農協の職員になっとけば、自然と発電所と一緒に行くわけ  
ですから。

聞き手 そっちに行くだろうと。で、農協の利用課長というのは。

沖山昇 利用課長っちゅうのは農協の電気事業や機械類の管理。ブルも持  
っていましたよ。ブルの修理までやりましたよ。

沖山昇 そのころ飛行場の増築工事があったんですよ。冬なんか飛行場の  
寒いところでブルを分解してね、修理したのよ。

聞き手 ハーベスターもですか。

沖山昇 ハーベスターはずーっと後。

聞き手 で、その課長に移って。その課長に移るということは、もう2年  
後に移管するっていうことがわかっていたんですね。

沖山昇 そのために農協は、補助事業で高圧電気工事ずーっとやってまし  
たから。

聞き手 農協から琉球電力に移管して、すぐ沖電に移管してますけど、農協  
から電力に移管すること自体が本土復帰を見込んでそういう  
形になったんですかね。

沖山昇 これはわからない。

浅沼拓道 沖電が来たのは何年ですか？

沖山昇 昭和 47 年。

沖山昇 最初は沖縄電力じゃなくて、琉球電力公社。日報なんかもみんな英語ですよ。例えば、電圧とか電流とかいうでしょ。アンペアとかボルトテージとかってからに。

浅沼拓道 昭和 39 年の全島電化式典は農協のときの式典なんですね。

沖山昇 全島電化はね、農協が高圧にしたんですよ。  
最初、戦後は、電気を引っ張ってね、危ない工事して、して、飛行場あたりまで行ったらもうランプより、暗い。高圧送電になったら、飛行場あたりでも 20 ワットの蛍光灯がぴかっとなついているとかね。これが終わってから、琉球電力公社に移管して。そして、5 月 15 日に日本復帰。復帰と同時に沖縄電力株式会社になった。

聞き手 農協から電力に移管されるということは、昇さんはどこから聞いたんですか？

沖山昇 補助金で工事をやってから移管するということですね。私の名義でみんなやりましたから。

聞き手 それで昇さんのところに情報が来るわけですね。

沖山昇 はいはい。

聞き手 移管されるということは電業所ができるから、そこで働いてやろうと。

沖山昇 琉球電力公社の職員になるわけですからね。本職になるわけだから。

聞き手 かなり先を読んだ行動ですね。

沖山昇 そうそう、先を読みました。

聞き手 農協には簡単に移れたんですか？

沖山昇 移れました。会社をやめて、農協にも打診して。

聞き手 農協の当時の組合長は？

沖山昇 糸数セイイチさん。隣の人だったから。

聞き手 言えば二つ返事ですか？

沖山昇 そうしたら、もうすぐ、すぐ来て。電気屋の専門がないわけですから。すぐオッケーして。

聞き手 製糖工場は、やめられたら困るよっていうことは？

沖山昇 製糖工場は大勢いますからね。そんなのない。みんなもうベテラン

なっていますからね。ボイラー係にしても、電気係にしても、みんな専門専門で上手になっていますから。いろいろ図面書いたりなんかする人も、私はバトンタッチしてましたから。工業出身のね、機械科出身した後輩がいましたから。

沖山昇　　もう安心して、私はやめることに。

浅沼拓道　引き継ぎした後輩は誰ですか？

沖山昇　　沖山トシミツ。

<電業所長として>

聞き手　　電業所長になりまして。最初的时候、電業所には何人働いていたんですか？

沖山昇　　所長が1人、運転員が3名で4名。一人8時間勤務で、サンパニジュウシ。24時間体制。何日かは私が勤務して、1人休ませるというふうには。

浅沼拓道　場所は、今の場所ですか？

沖山昇　　役場の下。今、独身宿舎が建っているところ。

浅沼拓道　あそこにあったんですか、最初は。

沖山昇　　ここから向こうに移ったんです。

浅沼拓道　製糖工場の隣に。

沖山昇　　今あるところに移動したところに、役場から声がかかって、電業書をやめた。して、あちの土地交渉もみんなやって、沖縄電力の方と。向こうに移動したですから。

聞き手　　ここにあったころまでやってたと。

浅沼拓道　電気は重油でやってたんですね。

沖山昇　　そう、重油でね。

聞き手　　最初っから、所長になるということだったんですか？

沖山昇　　向こうが所長になりなさいって言うんだから。最初のうちは、運転員だったんですよ。

聞き手　　琉球電力に入ったときは運転員ですか。

沖山昇　　琉球電力公社の場合は運転員。

聞き手　　そのときは所長はいたんですか。

沖山昇　　いえ、来てはいない。長っていう責任者はいなかったわけですよ。



聞き手 琉電のころから運転員が3人ぐらいいて、その1人だったと。  
沖山昇 そうそう。  
聞き手 沖電に移管されたときに、所長がいるだろうということで、運転員  
の中で白羽の矢が立ったというような感じですか。  
沖山昇 そうですね。免許持ってるから。ほかの人は免許持ってないし。  
聞き手 それが決め手ですかね。  
沖山昇 そう、決め手（笑）だから、当時は、故障したら、みんな私が1人  
で電柱を登ったり降りたりして修理して。ほかの連中は下から荷  
物を上げるだけでね。みんな、エンジンを回して記録することはで  
きて、工事はできないわけですよ。  
聞き手 じゃあ電気の専門家は、昇さんしかいないってことね。  
沖山昇 素人だから、みんな。だから、夜の12時までは作業着のまま、夕  
飯食べて、じーっと待ってだね。12時になったらもうよろしいっ  
てしてからね、お風呂入ったりしてから眠ったんですよ。  
浅沼拓道 ほかの3人って、誰かは覚えてます？  
沖山昇 タワタシンキチ、キンジョウガショウ、ナカソネケンショウ。  
この3名。  
聞き手 後で役場に行ったりする面々ですね？  
沖山昇 タワタシンキチもキンジョウガショウも製糖工場行ったし。みん  
な、沖縄から来たんですよ。  
浅沼拓道 電業所するとき、電気屋もやってたんですかね、シンキチさんは。  
沖山昇 シンキチさんの兄さん、シンユウ。  
浅沼拓道 タワタ電気店。  
聞き手 タワタ電気店！オキナワグラフに広告があったね  
聞き手 電業所長時代の4年間は、電業所を立ち上げて、あとは電線工事で  
すか？  
沖山昇 はい、工事。もう、ずーっと。外灯つけたいって人がいたら工  
事する人がいないんですよ。那覇から呼ばんといかんし。こういう  
工事したりね。それから修理。何か故障で、電気がつかないしたら  
みんな修理したりして。  
聞き手 電業所所長と言いつつも、実際はまさに電気工事人ですね。  
沖山昇 もう所長と言っても、電気工事人ですよ。

聞き手 電気工事人として島中をかけずり回るような毎日ですか？  
沖山昇 私は所長というよりは、電気工事人のほうがふさわしい（笑）  
聞き手 かなり忙しいもんですか。  
沖山昇 忙しかった。最初のうちは、故障も多かったですよ。ヒューズが飛んだり何したりっていうんだから。規定通りのヒューズをつけるから、ちょっとした負荷になると飛ぶ。だから、危険がない程度の容量のものをつけようと。例えば、15 アンペアつけるものをね、20 アンペアつけたりすれば、なかなか、停電っていうのはいわゆるですから。

聞き手 結構停電は起こってたんですか、そのころ。  
沖山昇 起こってましたよ。真面目に弱いアンペアのヒューズをつけてるもんだから。今は、機械も、ヒューズじゃなくて、ブレーカーっていうのができてますでしょ。あれで本当、助かっています。あのころは、みんなヒューズですからね。

聞き手 ヒューズが切れるっていう世代ですもんね。  
沖山昇 そう、ヒューズが切れる。ちょっと負荷かかるともうパッと切れちゃいますから。溶けてしまいますから。今はもうブレーカーでしょ。ある程度負荷かかったらパチンと落ちるから。落ちたら上げてちょうだいねって言っとけばいいんですよ、各家庭に。どうしても入らない、パチンって落ちるという場合は連絡してくれと。大きな故障だからって言って。

聞き手 ヒューズからブレーカーに移行する時期ですか。  
沖山昇 ブレーカーのおうちも工事もしました。  
聞き手 まだヒューズのほうが多かったですか？  
沖山昇 最初は、ヒューズでね。ブレーカーが出てきて、非常に助かったんですよ。

聞き手 停電っていうのは個別の家庭で電気がつかないよ、容量オーバーでパーンっといっちゃったよっていう停電ですね。  
沖山昇 そうそう。  
聞き手 大きな停電として、地区単位で停電しちゃうとかっていうことはなかったですか？  
沖山昇 これもありましたよ。電柱登ってね、電柱にも大きなヒューズがつ

いてますから。

聞き手 初期は、結構あちこちで、そんなことが起こってたんですね。

沖山昇 ありましたね。

聞き手 電業所最初にできた場所ですが、農協がやってたときの発電機もここにあってことですか？

沖山昇 ここにあったです、1台。クボタ 60 キロっていうのが1台あって、それから琉球電力公社になってヤンマーの 30 キロ、50 キロが入って、3台でやってましたから。

聞き手 戦後すぐ、農協がやる前に組合がやってましたよね。それ時もここでやってるんですか？

沖山昇 電気事業組合っていうの。

聞き手 池の沢の販売所で始めたと記録にありますが。

沖山昇 そうそう、販売所の下。お風呂場。この場所ですよ。

聞き手 ここですね。ということは、最初始めたところから発電所は動いてなかったってことですね。最初に始まった場所にずっとあって、今の電業所の場所に移ったと。移すところまで昇さんがやったということで、電業所を移すことになった理由は特に何かあるんですか？

沖山昇 狭かった。エンジンも大きくなりますでしょ。燃料置き場もない。池だからね、周りは。それで、敷地が必要ということで。ウエチカンセイさんっていう人の畑、交渉に行って。

#### <地域団体での活動>

聞き手 電業所時代までの間、もうお年としては 45 ぐらいになってるんですけど、島に戻って電業所をやめるまで、大体 27 歳から 45 歳ぐらいの 20 年ぐらい。その間、島の中で例えば青年団とか、そういう団体の役員をされたということはありますか？

浅沼拓道 青年会長はやってました？

沖山昇 青年会長はしてないですね。

浅沼拓道 奉賛会の祭典係をやってましたよね。

沖山昇 奉賛会はやりました。会計から総務から、何十年つつつてやりましたよ。

聞き手 PTA 会長はずっと後ですか？  
沖山昇 PTA 会長もやりましたね。  
聞き手 75 年だから、助役になってからですね。  
沖山昇 青年団では、港区にいたときに支部長をちょこっとやっただけ。会長はしてないですね。  
聞き手 港区にいたときっていうのは？  
沖山昇 ケーブル荷役のときは港区でした。  
聞き手 ケーブル荷役のときは、ミットシヤーではなくて。  
沖山昇 港区の守身おじいのおうち。  
聞き手 消防団は役場入ってからですね。  
沖山昇 助役は消防団長ということですね。  
聞き手 消防団も PTA も役場に入ってからですよ。  
沖山昇 PTA も 7 年ぐらいやりましたがね。  
聞き手 電業所時代までは割と仕事一筋。  
沖山昇 そうそう。忙しくて、ほかの仕事やれなかったですよ。

#### <趣味の時間>

聞き手 昇さんには、趣味の時間はあったんですか？  
沖山昇 囲碁大会をやりました。先頭に立って、皆さんのお世話しながら、何十人つって囲碁愛好会ちゅうのをつくってね、やりました。  
聞き手 製糖工場時代？  
沖山昇 製糖工場時代もやりましたね。コミヤマタケモリさんっていう方が助役してるときがありましたでしょ。あのころもだから。囲碁同好会の名簿つづりがどっかにあるんだがな、おうちに。成績表みんな書いてね、つづったのがあるはずだがな。  
聞き手 結構若いころからですか？もうちょっと後、助役になってからですか？  
沖山昇 助役になってからだったかな？頻繁にやったのは、助役になってからですね。  
聞き手 電業所時代まではかなり仕事で忙しくて、遊んでる暇もないような感じですか？  
沖山昇 そうそう。できなかったからね。

聞き手 役場に来る前はほんとに興味って呼べるようなものはないって感じですか？

沖山昇 もうないですよ、忙しくて。時間をつくりきれない。もう専ら皆さんに電気をつけるという、停電したらいかんというだけだから。

聞き手 土日もないような状態ですか。

沖山昇 土日もないぐらいですね。停電したら土曜、日曜どころじゃない、必ず走っていくから。

聞き手 製糖工場時代もそんなに忙しかったですか？

沖山昇 製糖工場時代は、まだそんなことはない。夕方 5 時後は農業もしましたよ。おじいのお手伝いで。

聞き手 お酒はかなり飲みました？

沖山昇 酒は弱くて。強くなろうと思って練習はしました。練習しても強くないですね、弱い。

聞き手 若いころは余り遊ばない、真面目な青年だったんですね。

沖山昇 遊ぶところもないですのに。桜坂なんかよく行きましたよ。伊波竹善さんのキャバレーに行った。

聞き手 キャバレーに。スナックに毎日通うとかそんなこともなく？

沖山昇 あっちでバーテンもやりましたからね。

聞き手 こっちでは？

沖山昇 こっちではもうやらない。助役になってからだよね。酒飲むようになって。役場の職員が 5 時に帰ろうとしたら、入口で酒が始まってるわけだから。帰るわけにいかないわけですよ。

#### <囲碁について>

聞き手 助役時代に囲碁愛好会をつくったということですが、囲碁はその前からやっていたんですか。

沖山昇 助役だった小宮山タケムラさんが強かったんですよ。

聞き手 小宮山さんは助役の前任ですかね。あ、昇さんの前任は伊波。

沖山昇 ああ、伊波叶善さん。

聞き手 叶善さんも竹善さんのごきょうだいですか。

沖山昇 長男が叶善さんで、亀太郎さん、竹善さん。

聞き手 叶善さんは役場において。

沖山昇 この人は兵隊行って、帰ってきたんですよ。後に助役になってね。  
聞き手 68年から助役していますね。  
沖山昇 前は那覇に行っていたんじゃないですか。那覇から来て、農業し  
ようとするのを助役に。  
聞き手 役場から上がるっていう感じでは必ずしもないんですね。助役は  
外から来ることが結構多かったんですね。  
聞き手 叶善さんも、知花村長がつかまえて、やれということになったわけ  
ですね。小宮山タケモリさんは62年から67年。小宮山さんはず  
っと中におられた方ですか？  
沖山昇 小宮山さんは総務課長からずーっと上がって行って。  
聞き手 ああ、上がった方で。  
沖山昇 習字が上手でね。看板カチャーだったですよ。看板書く人。碁は強  
かったですよ。口数は少ないですけどね。  
聞き手 囲碁は小宮山さんが助役のころに習われた？  
沖山昇 その前からぼつぼつやっているのをね、教えてもらっていたんで  
すよ。囲碁愛好会をつくったのが、57年ぐらい。学校の先生方で  
囲碁好きな方が来て。年配の方が来ていましたから。メンバーが揃  
ったからということで。  
聞き手 無趣味だとおっしゃっていましたが。囲碁は若い頃からやって  
いたんですね。  
沖山昇 若いころからやっていたよ。  
聞き手 囲碁が、唯一に近い趣味だったということですか。  
沖山昇 紳士的なものはそうでしょうな。

#### <土地所有権>

聞き手 このころの大きな出来事の一つとして、土地所有権問題の解決が  
ありますが、御自身が何か関わったり、話をじかに聞いたり、目の  
当たりにしたりという記憶は何かありますか？  
沖山昇 私はいんまりかかわってないですね。うちの父、沖山守身が関わっ  
ていました。  
聞き手 お父さんが期成会の一員で。  
沖山昇 決起大会には参加しましたですよ。

聞き手 決起大会の様子って、どんな感じだったんですか？  
沖山昇 すばらしいなと思ったんです。30年たったら返すよという八丈の人の口約束があったということは話聞いていますから、それを会社の小作人としてずっと、先輩連中は過ごしてきたわけでしょ。戦後になって、大日本製糖も終わって、土地所有権獲得の期成会ができて、ああこれは上等だなと思って。土地が自分のものになる。それまで、どこにいるかと言ったら、はい、北大東村無番地にいますっていうの、言えないですよ。変なもんですよね。土地所有権も獲得して、番地も入るようになって、これはすばらしいことだなあと、皆さん御苦労さまでしたと言いたかったですね。委員の皆さん方へ。

聞き手 特に村長とか、当時では小宮山判太夫さんとか。この辺の方々がかなり活躍されて、陳情に行ったり、三者会議出たりということでやられてますけれど、島にいと、そういう動きは日ごろは感じないものですか？

沖山昇 あんまり感じなかったですね。

聞き手 期成会の決起大会をどこでやったか覚えてらっしゃいますか？

沖山昇 学校の運動場とか、役場の広場とか。

聞き手 昇さん自身は見てたというか。

沖山昇 一緒に3回したから。こう、頑張れ、頑張れ、頑張れ一っっていう感じ（笑）

#### 第4章 請われて助役となり、語り部となる【役場時代】

##### <助役就任の経緯>

聞き手 助役になる経緯、どうして助役になることになったか、役場に入ることになったかを教えてください。

沖山昇 51年に、助役をやってくれんかって、知花村長がわざわざおうちに来た。いやー、私は、沖縄電力でね、こっち見る人がいないから、どんなですかね、許可しますかねって言ったから、まず電話してごらんって言うから、じゃあ電話してみましようねって言ってからに。そしたら、職場はどこかっていうことになって、役場の助役ということですが、ああ、これはもうしょうがないって言ってからに。じゃあもう向こうで頑張りなさいって言ってね、辞職を許可されたということ。

聞き手 許可すると。

沖山昇 まさかと思ったんですよ。電気屋いないから。私もまた認識不足だったですね。沖縄電力というところは、私なんかどころじゃないよと。職員はいっぱいいるんだからということになってね。向こうからすぐ所長が来ましたよ。

聞き手 あ、すぐ来たんですね（笑）

それ以降は、電力でもともと雇われていた人が所長で来るということになったんですね。

沖山昇 はい。所長になる人いっぱいいるんですよ。電気やる人がいないのに、これ大変だなーという気持ち。助役よりも電気を重んじないと、一般のためにもならんからということ。助役は誰もができるだろうというふうに思っていたんですよ。そしたら許可された。

聞き手 知花村長は昇さんの何を見込んで。

沖山昇 何を見込んだんでしょうかね。将来の村長ということ。

聞き手 ああ、そういう。

沖山昇 そしたら知花村長、自分がやめるときにですね。私に、はい、交代だよって、言いよったんですよ。私は、村長はできませんって言ってからね。何言うか、後任としておまえをこっちに引っ張ってきたのに、もう少し意地出さんかっていってからにね、怒られてね。い



やいや、私は村長はできません、助手的な仕事だったらできますよって、助役だったらできますよって言ってね。もう大変だったですよ。

聞き手 知花村長、それでも 2 期は昇助役と一緒にやっていますから、次か次ぐらいに譲るというつもりで昇さんを連れてきたんですね。

沖山昇 助役になったらすぐ、電気工作物規程から地方自治法にぱっと変わってしまってますね、もうこれ大変だったですよ。書類見ながら、地方自治法何条なんかってあるでしょう。これは大変なつって言ってからにね。一生懸命やりましたよ。

聞き手 一から勉強なんですね。

沖山昇 まあ、電気の規程は見ているから、これ（法令）の見方をよくわかっていましたからね。地方自治法をすぐ、読むことができたよ。一番先にやったのはお墓。今は墓地公園っていうのがあるが、当時はうちのそばに墓地をつくったりして、その関係の調査があったんですね。うちの家内が戸籍係をしていたものですから、地方自治法どんななっているか見たかって言ってからに、私は大急ぎで見たら、これは知事の許可を得なければいけないという問題があつて、自分の畑に墓地をやっているのは、これ許可もらわんといかんよって言ってから。こんなして最初の一番苦労は、地方自治法を調べることだったんです。

浅沼拓道 昇さんの前は伊波叶善さんだったんですね。

沖山昇 叶善さんがやめるって言ったので私のところに、知花村長さんは来ているわけですから。

聞き手 通算 7 選で、このとき 6 選目で連続 5 期目。もうかなりのベテランの村長ですね。

浅沼拓道 一夫村長にかわったときも、一夫さんから助役をそのままお願いしますっていう感じで。

沖山昇 そうそう。

聞き手 次は盛秀さんになって。

沖山昇 盛秀村長になったときに、教育長になったんですな。

浅沼拓道 盛秀さんは教育長から村長になったんですたっけ。

沖山昇 そうそう。

聞き手 教育長から上がって、昇さんはスライドしたと。

<知花村長のこと>

聞き手 助役になったときに、知花村長から、おまえはこれをやれよっていうような話は具体的にはなかったんですか？

沖山昇 はっさびよー、私こんな仕事したことないですよ、私は電気屋しかわからんですよって言ったから、私が教えるから心配するなって言ってからにね。それでやったんですよ、そうですかって言ってから。

聞き手2 知花村長とは、その前から長いこと知り合いだったんですか？

沖山昇 もう大先輩ですのに。選挙なんかのときは、みんな一緒に運動するぐらい。

浅沼拓道 知花村長は役場出身ですか？

沖山昇 そう。やめるっていうのをうちまで押しかけていって、村長にしたわけですからね。青年会でもやり手なほうだったから。

聞き手 知花村長は沖縄系ですよ。

沖山昇 ええ。沖縄系の北大東出身。大東から兵隊にも行って。

聞き手 知花さんのもともとは農家ですか。

沖山昇 この辺（南区）に知花モンキュウっていう畑がないですか。

聞き手 ありますね。工場の隣。

沖山昇 それからまた幕外の北区に来たんですよ。

聞き手 字南から幕外の。

沖山昇 北区に来たと。戦後におうちつくっていますから。

聞き手 農業のおうちだけど、戦後になって、役場に入って、役場でずっと上がっていった。

<医師不足>

聞き手 沖山助役が取り組んだお仕事っていうのは、空港の完成に向けた取り組みですかね。

沖山昇 空港の仕事もやったし、病院関係。

聞き手 病院関係っていうのはどんなことをやったんですか？

沖山昇 病院の先生方が出たり入ったりするのを、次の方の交渉をに行っ

たり。もちろん、村長がやった後ですけどね。県の医事課ですかな。

聞き手 助役になった直後に、女医さんの事件が起こったんですね。

沖山昇 私が助役になってすぐでもあるし、村長は那覇行っているし。私が助役しているときに向こうから遺族が見えているわけですよ。これを迎えて。もう挨拶もしないといかんでしょう。

聞き手 あの事件はやっぱり当時としては村の中で起こった…

沖山昇 一番大きな事件だったんですよ。

沖山昇 自分のおうちの隣の子だったですからね。次男の同級生。しかも、名字も沖山。

(遺族が来られて) 最初のうちは、会議はここ使ってくださいとか、いろいろ連絡したりとか、助役だからやったんですよ。そしたら、沖山というのがわかったんでしょうね。私と親戚関係と思ったんでしょう。そしたら、もうどうぞ、助役さん構わないでください。あとは、私にタッチしなかったです。

テイ (鄭) 先生とは、うちの家内なんか本当に、知り合いになってですね。家内が出張で行くでしょ？買い物頼まれたりしたんですよ。それから送金も。これを送金してくれないかっつってからに、頼まれてやっていたんですよ。うちに来ることはなかったですけどね。

私は助役だから、ちょいちょい回っていったんですよ。用事で行くんですけど、回っていったら宿舎で、テイ先生つって言ったら、ちゃんとしてチェーンかけてからドアあけてましたよ。

こんなに注意深くやっている人がね、何で中学生が来たのに、ドアあけてしまったのかと。気を許したんでしょうね。不思議でたまらないつったんですよ。

聞き手 やはり医師不足でしたか？

沖山昇 医師要請をすると、ちゃんと派遣医師つつって、給料もみんな向こうでしょ？役場から 20 万か 30 万ぐらいの手当が出るぐらいだったですからね。最初は、松本先生とか内地の方がいたんじゃないですか。坂本先生とか。

聞き手 坂本先生は随分長くされていて 6 年やってますね。

沖山昇 あっ、そうだ、ゴンヤのおぼあが炊事したわけだから。

聞き手 テイ先生は殺されてしまったんで、韓国から送るということもなくなつて。その後、医師が不在になりますよね、1年間。

沖山昇 不在になつて。加納先生が来られたでしょう？

宿舎は畳もみんな入れかえしてやったんですよね。加納先生にね、宿舎はこういう事情がありますがよろしいですかつって言ったら、あー、こんなのは関係ないつってね。そつそと入っちゃまった。助かったですよ。

聞き手 気にされない先生だったんですね。

沖山昇 そのかわりお酒が好きでね。

聞き手 加納先生、結構長くやってますね。5年間やられていますね。

沖山昇 うん、長かった。

聞き手 加納先生、病気で倒れられたんじゃないかなつたでしたっけ？

沖山昇 最後はですね、急患輸送つってるんですかな。私は沖縄行ってたんですよ。こっちから送られてきたもんだから、私は沖縄で受けて。見たら、背広、ネクタイ着てるんですよ。急患で背広、ネクタイ着ているの見るの初めてだつってからね、話題になりましたね。

浅沼拓道 空港開港の前の緊急搬送はどうしていましたか？

沖山昇 その前は、例えば学校のグラウンドとかで。

浅沼拓道 みんなが車で来て、ライトで照らしたり、まきをたいたりして。アメリカさんだったんだが、今は自衛隊がやってますでしょう？

聞き手 テイ先生が亡くなられた後、1年間医師不足になったときの対応というのは、村長が随分走り回って大変だったって聞きましたけど。

沖山昇 そうそう。一所懸命、要請してね。本当大変だったはずですよ。こんな島に誰が行くかっていうあんばいでしょう。村長はもう、ナーゲジナトーサー、ナーゲジナトーサーつってからに、大変なってるっていつも言っていました。

聞き手 村長の専権事項ですか、お医者さん探しは。

沖山昇 要請は村長だから。その他の連絡とかは、私がやりますから。うちなんかも、県の医務課に行って、課長さんたちといつもお話し合いしてやりましたから。

聞き手 1年間医師がいなかったときは、どうしてたんですか。

沖山昇 看護婦さんが。  
聞き手 医師が代診で来たりとかいうこともなく、1年間本当にいなかったですか？  
沖山昇 代診のお医者さん来てましたかな。

<空港のこと>

聞き手 助役になる前から空港の拡張の話は進んでるわけですよ。  
沖山昇 農協の利用課長のとき、空港の整備に出ましたから。  
浅沼拓道 修理しに行ったつつつてましたからね。  
沖山昇 ブル扱って。  
沖山昇 空港完成は、昭和46年だから、私が農協にいるとき。9月に山中大臣が来て、そして、53年にDHCの19席が就航したから。  
聞き手 定期便が初めて来たんですね。  
沖山昇 そうそう。それまでは4人乗りのセスナ機が飛んでいた。南大東まで。  
聞き手 セスナ機を覚えてらっしゃいますか？  
沖山昇 はい。私も株入っていましたから。大きい飛行機が飛ぶようになったから、セスナ機は終わりになって、して、その株もみんな払い戻しましたよ、知花村長が。  
聞き手 何人ぐらいで株を持っていたんですか。  
沖山昇 みんなで、5ドルぐらいずつ、集めてましたかね。  
聞き手 大東マリンクラブですね。  
沖山昇 飛行機を飛ばす、南まで飛ばす。  
聞き手 購入して、飛行機は南に置いてあったんですね。  
沖山昇 いや、こっちに置いてあった。  
聞き手 誰が運転したんですか。  
沖山昇 パイロットが1人いましたよ。  
聞き手 島民ですか。  
沖山昇 いやいや、正規の。  
聞き手 雇ったんですか。  
沖山昇 雇ったんでしょうね、小型機の会社を。  
聞き手 あっ、委託したってことですか。

沖山昇 委託でしょうね。セスナを飛ばした。4名乗りですから。うちら家族乗って、南大東渡ってから、向こうからYSで行くわけでしょ？うちの長男、小学校ですけど。パイロットがすぐ、お兄ちゃん、ハンドルフかまえて、してからね。つかまえさせて、ガタッと落とすんですよ（笑）、わざと。お兄ちゃんがつかまえたからだよっつってからね、いたずらしながら行ったんですよ。

聞き手 (笑) 恐ろしいです。セスナに乗っていくっていうのは、島民みんなが使ったものですか？

沖山昇 申し込みして。那覇行きますから、飛行機お願いしますっつって。

聞き手 利用料金は高かったんですか？

沖山昇 1人幾らだったかね。1人何ドルかだったですよ。

聞き手 当時の感覚としては高いものでしたか？

沖山昇 いえ、安いもんですよ。

聞き手 大体南に渡る人は飛行機を予約するものですか？それとも船で。

沖山昇 船で行くが、波のときなんか行けないでしょう。それで飛行機を利用したんですよ。

聞き手 予約して空いていれば飛んでくれる？

沖山昇 毎日飛ぶ。いつ何時でも。何回でも。お客さんがいる間、ピストン運行してね。来るときもそうですよね。南からこっち飛ばす。

聞き手 定期便が始まるまでは、南に行くのは、セスナがあったとしても、海が大丈夫なときは…

沖山昇 静かだったら、サバニで行く人もいるわけよ。

聞き手 サバニで行くんですね。そのサバニは、自分で持ってない人は誰かに頼むんですか。

沖山昇 漁師を頼むわけですよ。船持っている人に。1人幾らだったかな。1万5000円だったですか。片道。

聞き手 結構取るんですね。

沖山昇 高いですよ。マグロ1本釣ったら1万円超えるわけですから。

聞き手 セスナのほうが安いんですね。

沖山昇 セスナのほうが安いですよ。

聞き手 みんなそっちを利用したがるんですね。

沖山昇 ええ。

聞き手 仮の簡易空港ができて、山中大臣が来られたときに、守身さんの事件があったって聞きましたけど。守身さんが鎌を持って…。

沖山昇 何かそんなことあったらしいですね。私は知らなかったですよ。

聞き手 知らないですか。

沖山昇 後から聞きました。鎌持ってね、腰に差してるもんだから、それでも山中大臣はすぐうちの父を呼んで、草の上に座って話し合いましたよ。

聞き手 なんか守身さんが鎌を腰に差したままで、おう！大臣って言って、挨拶に来て、みんなにとめられたけど。いいんだ、いいんだとか言ってる。

沖山昇 大東では決まりもんだったですからね。昔の人は、鎌を腰に差してどこにでも。人のおうちに行ってお茶飲むときも差したまま飲んだりして。

聞き手 53年の空港完成の式典があった時は、助役としては取り仕切っているわけですね。

沖山昇 はい、司会しましたよ。

浅沼拓道 看板の字も昇さんが書いたんですか。

沖山昇 そうだね、これ私が書いたんだ。空港の看板も書いたし、現在の空港の大きなあの岩があるでしょ。あれにも書いた（笑）

浅沼拓道 漁港もそうですよね。

沖山昇 あれにも書いてあるし。

聞き手 どこもかしこもですね。空港開港は、そんなに覚えはないですか？

沖山昇 平良知事を案内して、テント小屋でね、みんな車座になって、ごちそう食べながら、いろいろ話したこと覚えてますけどね。シナリオや式辞はみんな書いて持っていきました。

浅沼拓道 役場職員の出張はふえましたか？飛行機が開通して。

沖山昇 船とは違いますね。出張はふえてますよ。

#### <助役の役割>

聞き手 このころに、村章、村のシンボルを公募していますね。

沖山昇 これは島袋先生だった？シマブクロセイエイ先生。

聞き手 それまでなかったのに、なぜ53年につくろうとしたんですかね。

沖山昇 北大東の村民憲章ができたからじゃないですか。  
聞き手 村民憲章もそのころつくってましたね。  
聞き手 また、このころに北港の整備を開始していますね。西港があつて、江崎港までは開港してて、53年に北港の整備に着手しているんですけど、助役として何かかわられた覚えはありますか？  
沖山昇 これは、助役は関係ない。建設の課長がやるから。最初のころですよ、みんな助役がやったのは。後は課長が一人前になってやるようになって。助役は内部のことをやるだけで。村長がいないときは村長の代理やるとか。みんな一緒に勉強しよーということで、みんな一人前になったということでしょうね。それまでは、初めてだからわからんが、どんなか一つってもわからないんだから。だから自分で調べるよりしょうがないわけだ。そんな時代でしたから。でも後からはもうみんな、すばらしくなっていましたよ。  
聞き手 昇さんが、特に自分で取り組んだというお仕事はありますか？助役時代に。  
沖山昇 助役のときに？いや、ないですよー。私は補佐役で。村長が仕事をやりやすいような方向で、職員のお手伝いするだけで。課長連中から文書が上がってくるのは決裁するでしょ。ここ間違ってる、こっち直してくださいって。

#### <秋葉神社建立>

聞き手 このころに秋葉神社ができてますが、秋葉神社の御神体というか、掛け軸が昇さんのところにあった。  
沖山昇 そうですよ。うちのおじがね、引き上げる人から。  
聞き手 孝さんが引き取ったんですか？  
沖山昇 沖山孝が、笹本輝次さんっていう人から。  
聞き手 お隣の？  
沖山昇 そのおうちで、火の神様っていうことで、秋葉神社祭を個人でやってたんですよ。  
聞き手 笹本家でやってたんですね。  
沖山昇 八丈の連中をみんな集めてね。そしたら、この人が引き上げたものだから、うちのおじが預かったわけですよ。だから私が養子に来



てから、物置にね、真っ黒く焦げた桐の箱があるわけですよ、細長い。おかしいな、これ何だろう。お宝かなーと思って(笑)見たら、秋葉神社の掛け軸ですよ。して、祝祭日が、12月の15、16日、正何位とか書いてありましたよ。これ、どうしたのって言ったから、輝次おじいから預かったと。は一、これはあんた大事にしないと大変ですよってやっているうちに。58年に、秋葉神社を建立することになったわけだから。

秋葉神社を整備するときに、天狗岩がありますよね。あれが拝所だったんですよ。沖縄本島からいうとウガンジュ。ウガンジュがあったが道はないし、石ころのところをお年寄りがはって、洞窟のところまで行って拝んでいましたから。

実は、秋葉神社の掛け軸がうちにあるからって、村長に相談して、こんなしてうちで預かっているから、これを向こうに祀ることにしたらどうですかって言うことと言って、それから村長が伊波亀太郎さんと相談して。

聞き手

亀太郎さんはその時は。

沖山昇

製糖工場の所長。

沖山昇

そうしてからに、始まったんですよ。

聞き手

秋葉神社をつくるって話は先にあったんですか？

沖山昇

私が言ったんです。掛け軸があるから。

聞き手

何とか、祀れませんかと。

沖山昇

その前にですね、さっき話した天狗岩の拝所。

聞き手

あ、拝所の整備の話が出てて。

沖山昇

そうそう。知花村長の奥さんもこの拝みしよったですから、よくわかったんですよ。拝所を整備したほうがいいんじゃないですかということがあって。それから、秋葉神社…。

あー、それと、もう一つある。巫女さんがね、北大東は島の中心から西側には神社がいっぱいあると。大東宮、金刀比羅宮。東側には神社がないと言ったことを聞いたもんですから。それじゃあ、東側に秋葉神社を建立したらどうですかということになって。

聞き手

その巫女さんっていうのは。

沖山昇

沖縄から拝みに来る人がいるんですよ。

聞き手 島に来てたユタですかね？  
沖山昇 はい、御願しに来る人がいるんですよ。  
聞き手 はい、その話を昇さんが聞いた？  
沖山昇 私が聞いて、村長に話して、掛け軸の話になって。  
聞き手 秋葉神社は昇さんが発案者ですね(笑)  
沖山昇 発案っていうよりはお願いね。  
聞き手 掛け軸を見つけて、東に神社がないなっていう話を聞いて、拝みのために道を整備してほしいなという声も聞いていて、村長にやったらどうかと。  
沖山昇 そうやって提案した。  
沖山昇 そこで、沖宮の神主さんに要請して、ここに秋葉神社を建立して、天狗岩の拝所もちゃんと階段もつくって整備するというので、お祈りを入れさせて、それからつくったんですよ。  
浅沼拓道 それでかー、そこから。  
聞き手 それまでは、秋葉宮祭というお祭りはなかったんですか？  
沖山昇 なかったんです。秋葉宮はない。58年から。  
聞き手 3つお祭りがあるのはそれからですか？  
沖山昇 これからですよ。  
聞き手 建立したらすぐ例祭が始まったんですか？  
沖山昇 9月21日に地鎮祭をして、落慶式は12月16日。  
これは12月の15、16日が大祭日だから。だから、例祭は12月15、16日だけれど、11月23日の勤労感謝の日を持ってた。休みにならないもんだから。人が集まらんとだめですじゃ、相撲とったりやるから。  
聞き手 恒例の親子相撲は、最初からやったんですか？  
浅沼拓道 ないですね。割と最近で。  
聞き手 割と最近なんですね。  
沖山昇 いつごろから始まったのかな？  
浅沼拓道 僕らの時代はもう始まっていて。1回途切れて、僕らの3つ上、4つ上にまた復活してるんですよ。  
聞き手 割と浅いんですね。  
浅沼拓道 浅いんですね。手紙読んだり、感謝の気持ち伝えたりっていうのは、

もっと最近からですね。

聞き手 大東宮と金刀比羅宮のお祭りはずーっとやってるんですね。

沖山昇 大東宮と金刀比羅宮？

沖山昇 大東宮祭は9月22日ね。金刀比羅宮祭は本当は10月10日ですよ。これもまた、最近は休みでないからということで、延ばしたりなんかしてやってますでしょ。

聞き手 金刀比羅宮祭も、昭和19年に神社ができて、それ以降、戦後はずーっとお祭りが行われてるんですか？

沖山昇 そうですね。金刀比羅宮をつくったのも、菊池幸四郎さんっていう人が、個人のうちで、祀っているものを、江越所長が、所長を拝命してから、内地からなかなかたどり着けなかったずに、ようやく赴任したから、航海安全の神様ですよ、これは個人でやらないで村民でやりましょうということで、昭和19年に、大隊長と相談して、よし、やりましょうということで。して、たまたま兵隊さんに宮大工さんがいまして、トノウチさんっていったですか。大隊長がこれをつくりなさいということで、もうそっくりなのをつくってましたよ、木造で。今はコンクリートになりましたけど。そしてできた。

聞き手 例祭はそのときから始まっていますか？

沖山昇 そのときから始まっている。

聞き手 最初っから今のように奉納相撲をやる形だったんですか？

沖山昇 やってましたね。そのときは、もう奉賛会というのができてましたからね。奉賛会ができてからはもう活発。

浅沼拓道 名前はなんで秋葉なんですか？その掛け軸に秋葉って書かれてたんですか？

沖山昇 防火の神様って書かれてるね。

浅沼拓道 (写真を見ると) 静岡って書いてますね。浜松市、秋葉山本宮秋葉神社。あー、そういうことですね。

沖山昇 秋葉神社は、本山は静岡県で、防火の神様としてあがめられていると。して、静岡県からお札を要請して。祀ってありますよ、中に。お蔵の中にね。そして掛け軸も、ちゃんと入れてあります。

聞き手 そのときの掛け軸が、あそこに入ってるんですね。

沖山昇 入っています。そのときに、私もお願いした以上はということで、ブロック買っておいてありましたよ。一梱包。100個余りかな。これ寄付しましたよ（笑）

聞き手 それがあの壁になってるんですか？あれは寄付の壁なんですかね。

沖山昇 あの壁が（笑）

沖山昇 うちに置いておくのは大変って言ってからね。もう、これで一安心ってということだね。

#### <火葬場建設>

聞き手 ちょうどそのころに、火葬場ができてますね。

沖山昇 火葬場ね。これが58年10月だから。平成2年に墓地公園ができたわけです。

聞き手 火葬場つくろうってなったのは、どういう経緯だったか御存じですか？

沖山昇 北大東は、人を焼くのに、薪を積んでやってたでしょう。1m80cmぐらいの長さに、大きなモクマオウ切って、これをまた1m50cmぐらい積んで、その上に棺を置いて、この薪が消えるまでに焼けていたもんですから。一晩中かかってね。して、棒でつつきながらね、心臓が一番焼けにくいそうですよね。それでその心臓を炎の上に持っていったりなんかして焼いて、一晩中かかって焼いて、明るる日、洗骨だから。

聞き手 その作業は役場の職員がやってたんですよね？

沖山昇 最初の火葬場ができないうちは頼んで。

聞き手 誰に頼んでたんです？

沖山昇 年配の方を頼んで。もう大体決まっちゃいましたよ。酒ジョーグーがいたよ。墓に、お祈りした酒を残してあるんですよ。これをみんな集めてきて飲みながら、一生懸命焼いてました。

聞き手 特になんかの係ではなくて、この人はやってくれるだろうっていうので。

沖山昇 はい。

聞き手 それは、村が委託してたんですかね？焼くお金は出してるわけですよ。

沖山昇 村も言うし、またこの主がね。  
聞き手 御遺族が委託して。  
沖山昇 主もやる。ごちそうつくってね。酒のおかずつくってあげてから。  
聞き手2 このやり方は、戦前からずっとですか？  
沖山昇 戦前からずーっとおんなし。うん。  
浅沼拓道 棺桶はうつぶせに遺体を入れないと起き上がるんでしたっけ？  
沖山昇 あれはひっくり返すわけ。棺を上にはげるときに、うつぶせに。そしたら起き上がらないから。  
聞き手 火葬を頼まれる方は、普段は何をしてた人なんですか？  
沖山昇 普段は人に雇われて、草刈りしたり、畑の頼まれごとをしたり。その前は燐鉱夫。  
聞き手 何でも屋ーみたいな感じで。  
沖山昇 何でも屋ーだ。  
聞き手 火葬場ができたら、その担当は役場がやるようになったんですか？  
聞き手 はい。  
沖山昇 役場が何名かでね。きょうは誰ができるかって言ってからに。これができるころは、私まだ助役だから。つくった人からみんな聞いてね。ここをどうする。温度は幾らにする、バーナーはどうする。操作方法を最初からみんな書いて、こう順番に。こんなしてやるんだよって言ってね、バトンタッチして。まだあるんじゃないかね？この書いたの。  
浅沼拓道 僕らはまずやったことないんです。やっぱり課長職の人たちがやるんですけど。  
聞き手 最初、役場の職員は、いやがらなかったですか？  
沖山昇 私が最初、先頭になってやってるから。  
聞き手 助役が先頭になってやったから。  
沖山昇 次はもう、順番で。  
浅沼拓道 ちゃんと焼け具合を見る窓もあるんですよ。  
沖山昇 うん、見える。  
沖山昇 助役のときは何でもしましたよ、ほんと。こんな葬儀のことから、病院の先生の送り迎えから、要請のお礼しに行ったり、看護婦が来

るときも飛行場送り迎えしたりしてね、やりましたから。

<葬式の継承>

聞き手 お葬式を大東でやるときは、今でも昇さんが取り仕切ってるって聞いたことがあるんですけど。取り仕切ってるっていうか、昇さんにやり方を聞いてやってるって。

沖山昇 そうそう。助役でなくても、やっぱりそういったところには行くんですよ。

聞き手 やっぱり助役のころの名残なんですか？

沖山昇 いや、助役の前もやりました。

聞き手 (笑) 助役の前からやってたんですか？

沖山昇 お年寄りがやるのを見て。これ誰かがやらんといかんなーということで、私は見て、一生懸命習ったりして、マスターしてたんですよ。それを、私がまたずーっとやってる。

聞き手 それを習わないかんなーと思って、マスターしたのはいつごろなんですか？

沖山昇 大東帰ってきてから。3、40代のころに。

聞き手 まだ製糖工場にいるころに。そういうのは誰に聞いて？

沖山昇 昔はお年寄りがみんなやってましたが、今はもう亡くなっていますけど。白紙で造花をつくったり、こういったものも、みんなお手伝いしてやったんですよ。ああ、こんなしてつくるんだなっていつてね。最近はまだ造花は作りませんがね。生花が那覇からすぐ取り寄せられますから。

聞き手 昇さんが聞いて見て覚えた、大東のお葬式のやり方ってのは、どんなんですかね。

沖山昇 まず亡くなったら、棺桶準備して、この島で亡くなった人はね。ちゃんと寸法もみんな書いておいてありますが、四角い花立て、それから、ウコー、線香立て。これを入れるお膳。して、これにみんな白い紙を貼って、枕元に置いてから、がんばこ(龕箱?)と一緒に身内の人が持ってね。こう、たすきかけて。

聞き手 あー、行列で、はい。

沖山昇 して、持っていくわけですよ。香炉と花立てを持って。して、位牌

も。

聞き手 その後お棺が続いていくと。

沖山昇 棺を担いでね。今はトラックでやりますからね。

聞き手 そういう葬式行列をくんで。

沖山昇 式場に行って、して、火葬して。火葬するときもみんなまた集まって、ちゃんと線香あげてから火葬して。で、2時間ぐらいかかりますでしょ。それから、(お骨を) おうちに四十九日まで置いとく人もいるし、すぐお墓に入れる人もいるし。

聞き手 お葬式という形はとらなかったんですね。

聞き手 亡くなって、一晩、枕元に置いといて。それ持って、葬式行列で火葬場行って。だびに付して、持ち帰ると。

沖山昇 洗骨してね。おうちに持っていく人もいれば、墓に入れる人もいます。

聞き手 お坊さんいないわけだから、お経あげたりはなしで。

沖山昇 お経もなにもあげない。みんなお祈りして、線香あげるだけ。

聞き手 造花というのは、花立てに造花を入れるんですか？

沖山昇 いや、バナナの根っこを丸く切ってね、挿せるようにして、竹を細く切って、お箸みたいにして、先をとがらしてから、これに造花を巻くんですな、あの、白紙を。こうして巻いて、上を丸くこうつくってから、これをまた造花の先のほうにハスの花つくったりして。

聞き手 それはどこに置くんですか？

沖山昇 枕元のお膳の中に。お膳は、この花をつくったら、この花と香炉と位牌と、これだけ持っていく。

聞き手 その花つくらなければ生花が？

沖山昇 生花を持っていくと。

聞き手 そういう一式の形が、北大東の中で伝統的に引き継がれていて。

沖山昇 役場にも寸法書いて、渡してありますよね。見たことない？

浅沼拓道 今はもう使わないじゃないですか。

沖山昇 ほとんど、那覇行ってやりますからね。島で死んだ人だけはやりませうけど。

浅沼拓道 役場にワンセット全部そろってあります。

沖山昇 八丈の人はのぼりを2本つくります。1つは南無阿弥陀仏って書いて

て、もう1つは、故誰々の弔いって書いてね。

聞き手

行列の前後ですか？

沖山昇

その前。この人の葬儀ですよって行ってから。八丈の人はそうやりますけど。

聞き手

行列のときには、おりんとかならさずに行くんですか？

沖山昇

最近はもうやらないです。

聞き手

昔はやってたんですか。

沖山昇

うちの子供のころはやりました。

沖山昇

民俗資料館に飾られてますよ。あの大きな数珠と鐘と。鐘たたきながら。行きよったですよ。今こんなことしないですよ。

聞き手

昇さんは製糖工場時代に、お葬式のやり方なんかも聞いて習ったと。そのときは、よく知っている先輩がやっぱり教えてくれて。

沖山昇

年配の連中がやっていたから。して、頼まれてね。相棒も呼んできてつってからに、して、呼んできてやってもらったりと。

聞き手

昇さんが習ったのは例えば誰から。

沖山昇

末吉マサヒデさんという方。

聞き手

勝助さんのお父さん。

聞き手

お葬式だけではなくて、ほかにもいろんな行事のやり方とか、こういうのは残しとかなあかん—というのがありますか？

沖山昇

各神社のお供え物。こういったのをずーっとやりましたよ。

#### <メモをとる習慣>

聞き手

メモをたくさんとるようになったのはいつごろからなんですか？

沖山昇

製糖工場のころら。電業所するときも。電業所は1時間ごとに記録するでしょ。

聞き手

若いころは日報の整理もしているし、メモをとるといふ癖がついているということですか？

沖山昇

ええ、そうですね。

聞き手

若いころからメモとっているんですか？

沖山昇

とってました。

聞き手

それはもう習慣なんですね。

沖山昇

そうそう。



<テレビ放送・親子太鼓>

- 聞き手           テレビ放送開始が1984年です。
- 沖山昇           テレビ…。(メモをめくる) どこにあったかな、テレビは。宮城村長のときでしょ？うん、学校でやりましたから。して、NHK といって、人文字やりましようとか言ってたんですけどね。ところが、これしなかったんじゃないですかね。
- 浅沼拓道       NHK が放送されると同時にみんなテレビ買い始めたんですか？
- 沖山昇           そうそう。みんな業者が来てアンテナつけるでしょ。アンテナ線は全部役場が世話してよ。工事費はみんなが個人で出してる。
- 聞き手           このときに昇さん太鼓を叩かれています。
- 沖山昇           守身おじいとでしょ？
- 聞き手           2人で叩いていますよね。
- 沖山昇           うちの父の相手をして。私が下拍子して、守身おじい、父が上拍子を叩いてね。
- 聞き手           親子でやるときは、たいてい守身さんが上拍子ですか？
- 沖山昇           うんうん、上拍子をやって、私が下拍子。親子ではそんなですよ。やっぱり先輩が上拍子ですから。
- 聞き手           守身、昇ペアは、結構イベントのときには呼ばれたて太鼓を叩きましたか？
- 沖山昇           やりよったですよ。
- 聞き手           テレビのときにもやっているし。全島電化のイベントのときも。
- 沖山昇           全島電化もあったかな？
- 浅沼拓道       写真がありますよ。
- 沖山昇           お祭りのときの港区のね。休憩所もありましたよ。
- 聞き手           港区の休憩所？
- 沖山昇           以前はお神輿を担いで各部落を回ってましたから、港区で休憩した時に。それから、西銘知事が来たときも。あのとき副長をしていたのかな、守身おじいは。離島総合センターで、西銘知事の歓迎したときに、したら、あーありがとうつってからに、西銘知事が席から舞台に飛んできて、太鼓叩いているのに、うちの父と握手していましたよ。

聞き手 親子ペアの太鼓がイベントのメインの出し物の一つだったんですね。

<歌がうまい守身おじい>

沖山昇 うちの父はまた、歌がうまかった。声がよかったものですから。私たちはあんなして歌いきれないんですよ、太鼓の歌をね。昔の、八丈の歌ですけど。

聞き手 歌い手としてすごかった、よかったんですね。

沖山昇 昔の人、声がいいんですね、やっぱり。うちなんかとても声出し切れないですのに、うちの父はもう、88になるまで、矢切りの一渡しー♪ってやってましたよ。よく覚えるもんですね。テレビを見て、ラジオを聞いて、書いてある歌詞なんかもないですよ。これを頭で覚えているんですよ。

聞き手 大東エレジーってかえ歌を守身さんが歌っていたって話を聞いたことがあります。

沖山昇 ああ、そうですか？

聞き手 何かのときに、アカペラで大東エレジーを朗々と歌ってとか。

沖山昇 どんなかえ歌があるんだろう？

聞き手 宮古島夜話とかいう曲があって、それを大東の歌に替えて歌っているらしいです。

沖山昇 ちょっと覚えられないですね。

<海水淡水化>

聞き手 86年には海水淡水化施設ができました。

沖山昇 海水淡水化ですね。昭和58年から60年の3カ年計画でやりましたですよ？6億1400万円で。1人当たりの使用料が平均300リッターで、800名と想定して、サンパニジュウシ、240トンつくったわけです。平成12年には、これでは少ないだろうということで、320トンに増設したということですよ。

聞き手 助役時代に、この施設をつくるときの思い出は何かありますか？

沖山昇 これができたときにね、しゃーっと真水が出たときには。ほんとに

感動して、涙が出ましたよ。海水がこんな、生活用水になるんだということだね。業者さんには、もうほんと、感謝しましたね。しかし、人間のなれっていうのはあれで、北大東は、天水をためて使っていましたでしょ？水道ができて、水道水と天水と、各家庭には、2つずつバルブがあったんですよ。そしたら、やっぱり天水のほうにいきよったですね。水道水は使わないで。

聞き手 それは、お金がかかるからですか？

沖山昇 いや、おいしいさって言って。まさか、海水が飲めるかというあんばいな気分になったわけですよ。本当は、立派な水だけど。ところが天水を使いなれていますじゃ。それで、自然に天水に、バルブに手が行きよったさ。これが、だんだんなれてね。最初のうちはやっぱり、そういった心境でしたね。

聞き手 何か、抵抗感があった。

浅沼拓道 知花村長が仕掛けて、宮城一夫村長のときに淡水化は完成しましたよね？これまた、村長が走り回った？

沖山昇 農薬を使うのがだんだん頻繁になったわけ。そしてから、ヘリ防除なんかもしたでしょ？あーっさ、私なんか、消防（ホース）持って行って、学校の屋根を水洗いしましたよ。農薬がいつぱいたまっているから、雨が降らないうちに。天水ためて使っているわけだから、知花村長が、これはもう大変なことになるぞって、それで簡易水道をつくろうって。それから、日立に言って。それで、あれをつくったんですよ、農薬防止のために。

聞き手 農薬が天水に入っちゃうからってことですか？

沖山昇 屋根にたまるわけですよ。雨降ったら、これみんな流れて天水タンクに入りますから。前から農薬を使っていたけども、余りにも量が多くなってね、これは大変だということ。

#### <知花村長の人柄>

聞き手 知花村長、大変長い間、村長をされていたわけですけど、どういう方でしたか？アイデアが豊富な方ですかね。

沖山昇 温厚で、あまりキャッキャッキャは言わないですけども。優しくですね。そのかわり、人が悪いことを言ったら、すぐ向かって

来いって言ってからにやりよった。度胸はあるけれども、優しくてね。うちなんかには、私がこれ教えるからやりなさいよつってからに、ちゃーんと教えてくれましたから。

聞き手 知花村長時代に、相当いろんなことをされていて、生活の改善が随分進んでいると思います。

沖山昇 そうそう。県庁からもね。いろいろ、知恵もあつたかしらんですが。県庁へ行っても、あの人は信用あるわけですから。はい、こういう予算があるよとってあんばいしてね、取ってきたりするわけだから。予算取ってくるのは、村長の仕事だから。

聞き手 今の宮城村長とかなり同じような動きをされているわけなんですね。

沖山昇 宮城村長と一緒に。村長が県庁に嫌われたら大変。おい、あつちの村長来たら知らんフナーしておきなさいしてからに見向きもしないそうですが。

私がびっくりしたのは、防衛庁に急患要請の件でお礼にいったんですよね、そしたら、伊江島の村長が来るわけですわ。おいおい、伊江島の村長が来るよ、はい、みんなみんなつってからに、ぜーんぶ起立してね、事務とっているんちゅも起立して、いらっしやいませーしてから。ほー、何でかねと思って、後から聞いたら、防衛庁に伊江島は一生懸命協力しているんだって。飛行場の関係から何からね。そういうところで伊江島の村長来たら、防衛庁は気をつけしてた。

聞き手 知花村長のお人柄がわかるような、記憶に残るエピソードって何かありますか？

沖山昇 もう嫌になってやめたいっていったときに、みんなに押されてやってくれたっていうことでしょうね。やり手ですから。農業しながらでしょ？5時にあがって、おうちに着くまでにはもう、ボタンみんな外れていたって。作業着に着替えて、すぐ畑に草とりしに。だから私は、助役になって、もう畑ないわけだから、この仕事だけだから。村長、はい、もう何もなかったら、あと私が番しますから、役場の番しておきますから、どうぞ畑行ってくださいってからに。村長は那覇ばかり、出張ばかり多いからね。畑する暇もないで

しょうつってからに。ヤンヤーって言ってからに、行きよったですよ。

聞き手 かなりバイタリティがあるわけですね。二刀流すごいですね。  
沖山昇 とにかくやり手でしたね。

<宮城一夫村長>

聞き手 宮城一夫村長にかわったときも、改めて村長のほうから助役をお願いするよということで。

沖山昇 宮城村長。1回だけ村長に文句言ったことがあります。  
私は助役で忙しい思いをしているのに。もう、何もかも、出張から帰ってきて、おい助役、おい助役って、しょっちゅう呼ばれて。もちろんこれは、連絡、いろんな打合せだから上等ですけどね。もう、私が忙しい、これ間に合わさんといかんなどいう仕事をしていても、おい助役、おい助役って、こうだから。こうして課長らの連中にやってくれってからにね。もう村長、私は今間に合わせなければいけない仕事もやっているのにね、もう村長、課長連中集めて、課長直々にやってもらえませんかというので、1回は言ったことがありますよ。

聞き手 かなり頼りにされていたんですね。

沖山昇 うん。

聞き手 宮城一夫さんは1期しかやられていないんですね。

沖山昇 製糖工場の会社の社長と両方やろうとしたんですよ。もうみんなが、だめだということで。

聞き手 製糖工場に専念しなさいと。

沖山昇 それで、製糖工場を選んだ。

<城間村長・教育長への異動>

聞き手 今度は城間村長に替わって、そのときに助役もガショウさんに譲られていますね。

沖山昇 金城ガショウに。

聞き手 助役を替わったのはどういう経緯ですか？どうして教育長にかわったのか？

浅沼拓道 教育長があいたんですよね？盛秀さんが抜けて、教育長があいて。  
沖山昇 あー、村長が替わったから。村長も、次の助役は誰がいいかなと言  
うから、ガショウさんを紹介して。  
聞き手 それは昇さんが紹介したんですか？  
沖山昇 私が紹介。私はもう勘弁してくれつつたわけですよ。  
聞き手 それはなぜですか？  
沖山昇 もう3期もしたでしょ。村長も替わるし、もう、やめたほうがいい  
ですよって、私は教育長をしたいからつつたんですよ。  
聞き手 そういう希望を出して。  
沖山昇 教育長いなかったから。  
聞き手 後任を紹介して、この機会に仕事を変えたいと。  
沖山昇 私が教育長でいたら、何かしたいときは、お手伝いしますからとい  
うことにしてね。  
浅沼拓道 ガショウさんは、どこから来て助役になったんですか？  
沖山昇 PTA 会長から。  
浅沼拓道 仕事は何していたんですか？  
沖山昇 農業。  
聞き手 助役は割と外から持ってくる感じが（笑）  
沖山昇 そうですね。  
浅沼拓道 何やったらいいかわからなくなりそうですけどね。  
沖山昇 そうですね。役場内からはなかなか出てないですよ。  
聞き手 教育長、希望されたのは、教育行政に関心があったんですか？  
沖山昇 PTA を長いことやってたから。7カ年やってるもんですから。学校  
の先生とお友達になってですよ。で、囲碁の会もやってるし。  
聞き手 で、学校の先生と仲良しになってるから。  
沖山昇 学校の先生とね。やったほうがいいなと思って。  
聞き手 そういうことなんですね。  
沖山昇 そうしたらどっこい、学校の先生方との折り合いつけんといかん  
し、大変だったですよ。しょっちゅう校長先生のところ行って、  
学校の関係をマスターせんといかんって。今度は、教育法になっ  
てしまったんです。地方自治法から学校教育法になってね、また一  
生懸命勉強して。

聞き手 　　いつまでたっても勉強してますね。

沖山昇 　　先生方と（笑）

<マルチメディア事業>

聞き手 　　教育長になって思い出深いことは、村営塾ですか？

沖山昇 　　私が一番これやってよかったなつったのは、マルチメディア。

聞き手 　　マルチメディア？

沖山昇 　　テレビで会話するのがありますでしょ。双方向のマルチメディア事業というのをやってね。

聞き手 　　文科省の、たしかモデル事業になってますね。

沖山昇 　　そうそう。これをやってのけたから、よしきたというふうに。教育長会議で、北大東はマルチメディアをやってるそうだが、話してくれてからにね、これの話をしたり。全国教育長会議では、離島の教育長さんなんかと知り合いになりますでしょ。青ヶ島の教育長から、電話が来て。沖山さん、石原知事が青ヶ島に来るんですけど、北大東とマルチメディアやってもらえませんかっという事になって。

聞き手 　　で、交流事業やったんですか。

沖山昇 　　それから、校長先生のところにまた走って行って、校長先生、青ヶ島がこういったそうですが、北大東の子供たちに東京都知事をテレビで見せたらどうですか？今ちょうどマルチ、中断しているところなんだが、またやりましょうやつってからやって。はい皆さん、東京都の知事はこういう方ですよっつってね、見せて。こういったのが一番よかったですね。

浅沼拓道 　　見たような、見てないような。マルチメディアはもうやってましたよ。前田小学校、浦添の小学校とやりました。

沖山昇 　　その前にはね、前田小学校もやったし。

聞き手 　　マルチメディアの指定校になったときには、結構、教育長として推進したって感じなんですか？

沖山昇 　　補助金関係のものを手続きしたりしてやるんであって。

聞き手 　　いい効果があったなという思いがあるということですね。

浅沼拓道 　　とてつもない金額になるはずなので、補助がないとやってなかつ

たと思うんですけど、すごい大きいパラボラアンテナですよ。  
浅沼拓道 あのときの課長は？ジンスケさん？  
沖山昇 ジンスケは後から引っ張ったからね。私がやめる前に、教育長交代  
だよといってからに、課長にしたから。  
浅沼拓道 イクオさんかな。

<村営塾>

聞き手 村営塾の開塾もこのころですね。  
沖山昇 村営塾、これも村長の手柄ですからね。ただ教育長してるから、人材育成会っていうのを設立して、塾を運営しよう。この塾をつくるというのも、教育長として世話しただけ。これは、與儀 PTA 会長。與儀實哲さんね。与儀組の会長。この方が PTA 会長をしていて、竹下総理の 1 億円があるから、よしこれで塾つくったらどうかっていうことで、始まったんですよ。  
聞き手 発案者が實哲さんですか。  
沖山昇 實哲さん。これはなぜかという、ワラバーター、子供たちね、学校から帰ったらお父さん、お母さんは家にいないし、もう遊んでばかりいる、かばんぶん投げてね。それよりは、塾をつくって、学校から帰りに塾で勉強して、宿題でも、予習でもしてからね、そしておうちに帰ったほうが、子供たちの学力向上になるんじゃないかということで、それから始まったんですよ。それから私が、塾の先生を一生懸命募集したんですよ。そしたら、名古屋からね。牧先生っていう方が来られて、14 年間おられましたかね。  
浅沼拓道 どうやって見つけたんですか？  
沖山昇 新聞見で公募して。沖縄の新聞でやっても、応募者がいないですよ。だから、朝日新聞でやったわけ。そしたら、これをこの先生が見て。  
聞き手 全国募集ですね。  
沖山昇 したら、この先生が名古屋で見て。この先生は高校の英語の講師、もう定年ですな。したら、新聞見てから奥さんが、もうここ行ったほうがいいんじゃないかっていって、早速すぐ下見しに来てましたよ。  
聞き手 奥さんに勧められたんですか。牧先生は。



沖山昇 下見しに来たもんだから、こっちはもう大歓迎式してね。そしたら、  
気に入って、それから私がつきつきり、この先生には。

聞き手 よく、14年もおられましたね。

沖山昇 お一、14年もおられた。

浅沼拓道 元気でしたよ。自転車で毎日。

聞き手 牧先生、やっぱり島に肌が合ったんですね。

沖山昇 奥さんも来てたけど、奥さんはまたすぐ帰ったから。1人で生活して  
ましたから。

聞き手 応募して来たのは牧先生だけなんですか？

沖山昇 そうそう。

聞き手 ほかに応募者はいなかった？

沖山昇 いなかったです。見に来てからすぐ決めてるんだから。多分、沖縄  
からはいなかったですよ。

牧先生もね、あと1年したら15年っていう節目だから、あと1年  
頑張ってもらえませんかって言ったけども、奥さんが許さなかつ  
た。休みのときに名古屋行ったら、いつも階段で行くところを、こ  
の辺にエスカレーターないかなっつってからに、あれ、おかしいな  
と思ったって。そしたら、何か調子が悪くて、病院行って、しばら  
く通院してからまた来て、もう帰りますってことになった。15年  
いたらもう大変しよった。帰ってから入院したそうですよ。そして  
今年亡くなった。

聞き手 ふるさと創生一億円の使い道は、もう即決まったんですか？

沖山昇 はい。

聞き手 ほかにアイデアはなかったんですか？

沖山昇 もうなかったですね。

聞き手 実哲さんの一声で。

沖山昇 そう、一声で。PTA会長だから。

浅沼拓道 金塊買った市町村もある。

聞き手 温泉掘った市町村もあるけど。

沖山昇 北大東村は、これを運営するために建設費を負担して、残りは積み  
立てて、この利息で運営するということだったんだが、利息は二束  
三文だって。

聞き手 大変ですね。

(当時、沖山昇さんがラジオに出演して、村営塾について話されている。次に全部を収録する。)

沖電アワー「ふるさとを訪ねて」

聞き手 佐渡山美智子

出演 沖山昇

聞き手 おはようございます。佐渡山美智子です。北大東村では全国でも珍しい村営の塾をスタートさせようと、現在その準備を進めています。北大東村の教育長で人材育成会会長の沖山昇さんにお話をうかがいます。

沖山さん、立派な施設ができあがりでしたね。

沖山昇 はい、おかげさまで上等になりました。これもう、設計士がですね。北大東は瓦がないということで、それで瓦を載せるということでどうしてもということですね、北大東でもほんとに珍しい建物になりましたですね。

聞き手 これが村営の塾ということになるわけですね。

沖山昇 はい、この北大東村営塾というのは、ほんとに北大東でもはじめてと言えそうですが、北大東の子ども達は、おうちに帰りますと、お父さんもお母さんもほとんど仕事に行っていますからね、なかなか勉強しないんですよ。やっぱり子どもは遊びたがるものですから、それで家庭学習という意味ですね、塾をつくろうということでしたんですけども。学校ともちゃんと連携をとってね。やろうということなんですよ。運営についてはですね。ふるさと創生資金を、最初2千万で人材育成会というものをつくったんですけども、それじゃあ足りないから、塾もつくったし、じゃあ、あと8千万プラスして1億円の基金をつくって、その果実で運営しているということになってますね。

聞き手	そうですか。村営の塾というのは全国的にも珍しいんじゃないかと思います。
沖山昇	まあそら、村営の塾というのはないですよ、やっぱりこういった離島だから出来たんでしょうね。
聞き手	この塾は対象としては中学生ですか、小学生ですか？
沖山昇	小学校を主にやっていますが、小学生がなかなか、遊び夢中になって、勉強しないから。中学生の場合は、学校の先生が一生懸命になって、こういった離島では補習授業などもやっていただけますから。中学生はまず心配ないんですが。
聞き手	そう考えると島の暮らしの中で、学習する環境づくりをするための塾と考えていいわけですね。
沖山昇	まあ、そんなんですね。はいはい。何も学校がね、それだけ子ども達に教育が足りないんだということじゃなくて、北大東は家庭で勉強するものを、塾に来てっていうのは気持ち違いますからね。
聞き手	では、この塾で教えてくださる先生がいま必要とされているわけですね。
沖山昇	はい、この前、タイムス、新報でも記事でお願いしたんですけども、内地までまた呼びかけようと思うんですよ。こちらにきて、そう学校みたいな、難しい考えじゃなくてですね、家庭学習を面倒見てあげるといふような気持ちで来ていただくとね、非常に助かるんですよ。
聞き手	塾の先生は現在も募集中です。島の暮らしを楽しみながら、子ども達を教えていきたいという情熱のある先生、ぜひ村教育委員会までご連絡ください。

<教育委員長へ>

聞き手	教育委員長に変わったのは、まさに収入役廃止の関係で、盛男さんのポストがなくなったということ。
沖山昇	はいはい。
聞き手	で、盛男さんが教育長にスライドして、昇さんは教育委員長になったということですね。

沖山昇 そうそう。  
聞き手 教育委員長になるともう、大分、仕事という感じではなくなりましたね。  
沖山昇 はい。ただ委員会の会議があったらこれに来るだけで。して、文書来たり、出張があったりしたら行くだけで、そのほかは何もない。

<島のガイド>

聞き手 昇さんがガイドとして、島の案内をするようになったのはいつぐらいからですか？

沖山昇 助役の時代から。

聞き手 助役の時代からガイドですか。

沖山昇 みんな私、調べていましたから。うちの父の元気なときも、父からも聞いて、こう記録してましたから。それでこの1冊の本（手帳）ができていますから。これ見たらもう、ほとんどのことはみんな書かれてますから。

聞き手 本格的に調べ始めたっていうのは、助役のころからですか。

沖山昇 助役のころですね。村長は知らなくても、助役は知らんといかんですから。

聞き手 村長は前に出る人で。

沖山昇 そうそう。

聞き手 助役は何でも知ってる人。

沖山昇 村長これこんなですよっつってね、やらんといかんですから。

聞き手 そのころから、その本をつくり始められて。

沖山昇 おやじからもみんな聞いてね。

下坂村っていうのは、下坂コウタロウという社長が名前をつけたんだよっつって。自分の名前つけなさいっつって。

聞き手 下坂さんはあれですよ、東洋製糖の社長ですよ。

沖山昇 それから江崎所長ね、あれは大日本製糖ですか。江崎港も、自分の名前をつけてからね。あーは一、そうかっつって。

聞き手 そういのは守身さんが覚えておられたんですか？

沖山昇 覚えてたんですよ。

聞き手 天狗岩とかカブト岩とか、そういう名前をつけたのは誰なんですか？

よう。黒部岬とか。真黒岬とか。

沖山昇 あれはもう、そのまま聞きなれてるから、別に調べなかったですけど。

聞き手 誰がつけたかはよくわからない。

沖山昇 うーん。北泉洞という洞窟は。東北大学ですよ。大学生が調査しに来て。名前がなかったんですよ。ただ、北区の洞窟としか言わなかったから。

聞き手 あのメモをつくられて、本をつくられて、ツアーのガイドは、助役のときから声がかかっているんですか？

沖山昇 説明員はね。最近は、観光案内がいるでしょ。當間リエ子さんが。この子がいないときには、ハマユウ荘の支配人が、夫婦できたお客さんが誰か島案内してくれる人いないかねーつつって。個人でっていうことで、こんなときに呼ばれてやったんですよ。だから、じゃあ待ちなさいよつつって、あんた方の回る順序はどんなねつつってからに調べてね。この回る順序ごとに、まず空港から出たら、北港行ってって、こうしてって。この順番にみんなメモしたのもあるんですよ。覚えきれませんので。。

聞き手 ツアー用に回る順につくったメモなんですね。

沖山昇 虎の巻。

#### <文化財>

聞き手 昇さんが教育長の時代には、文化財保護の話というのはありましたか？

沖山昇 ありましたよ。文化財保護委員っていうのもつくって。

聞き手 はい。

沖山昇 北泉洞もね、もう少し待っとけばよかったのに。そしたら南大東の星野洞みたいにしておね、ちゃんと整備して、観光地にもできたはずなのに。文化財保護委員会っていうのができたもんだから、じゃあ北大東の文化財を早く、早くっていうあんばいで、そこを登録してしまったんですよ。

聞き手 北泉洞を。

沖山昇 そしたら星野洞ができたでしょ。しまった！っていうことになっ

てね。

沖山昇

もう改修できないでしょ。

聞き手

先に登録しちゃったから改修がしにくいと。

沖山昇

登録したからもう改修できなくて、整備もできない。今は、金網張って、誰も入れないようにしてますじゃ。あれ入ったら、長いこと中まであるんですよ。

聞き手

整備してから登録すればよかったなということですね。

聞き手

教育長のころは、燐鉍山の貯蔵庫とか、出張所跡とか、燐鉍山関係の文化財というのは、まだ手をつけて…。

沖山昇

なかった。

沖山昇

最近はみんな登録文化財になったりして。

聞き手

盛男さんが教育長のときですね。

沖山昇

登録文化財になったよっつってね、あー、上等だつって、私は、応援してたんですよ。

聞き手

昇さんのころには、そういう話は一切なかった？

沖山昇

そういう話にならなかったですね。

聞き手

あれが文化財だなんていうのは。

沖山昇

石垣がぶっ壊れたものなんか(笑)登録なるとか、ならんとかという問題じゃなかったですよ。

聞き手

という時代ですよ。

沖山昇

だった、だった。

#### <最近の日課>

聞き手

最近は、ふだんは日課としてはどういう生活をされてるんですか？

沖山昇

今は大分少くはなつたんですがね、役場の委員会、村史編集委員会とか、いろんなものがあつたでしょ。こういったのを行ったり、健康のために、ラジオ体操するかわりに、ヤギの飼葉を1時間ぐらい刈って、ヤギに食わしながら眺めたり。

聞き手

それは毎朝の日課ですか。

沖山昇

毎日。1時間ぐらいずつ。じっとしていませんよ。もうテレビの前にじっとして座っていたら、おしりは痛いし、人間がだめになるし

ね。それよりはっていうので、すぐ回って。

それから、老人クラブの仕事も結構あるんですよ。会計とか。やっていますから。私に会長やりなさいって人が、私の性分では会長はだめだよと。私はもう何もかもやろうとするから、ゲートボールの準備したり、お茶を準備したり。会長がこんなことしてみっともないでしょってからね。会長はあんた方やりなさい。私がこのお手伝いしますからってから（笑）

老人クラブは、会計やってるから決算もやらんといかん。それから計画もやらんといかん。班長に連絡も。いろいろあるんですよ。忙しい思いして。

聞き手 お掃除もされているという。

沖山昇 あー、草刈りね。今まではやっていたんですけど、最近はね、大分少なくなって。灯台とか、上陸港とか、の草刈り。観光客を連れて行くときに、草ぼーぼーしてたら、みっともないから。

聞き手 今でもそういうところ、やられてるんですね。

沖山昇 時間見てね。みんながもう、こんなことするな、するないうもんだから。何か気が引けたりしてね。ところが、見たらもう刈らんといかんから、知らんフナーしてから内緒で刈りに行きますけどね。

聞き手 学校から平和学習で案内を頼まれてますね。守備隊壕とか。あ

沖山昇 これもありますね。年に1回。学校の先生がもうそろそろ打ち合わせしましょうってつってからに。

聞き手 守備隊壕は、昇さんが手入れをされてきたんですか？それとも、ずっとほっとかれてるんです？

沖山昇 あれは兵隊さんがつくった。

聞き手 その後、特に手入れをしてたりはしてないです？

沖山昇 はい、手入れしてないです。

沖山昇 そのまま。して、あれは、私が採鉱事務所に通う時の通路ですから。

聞き手 あの掘り割りが。

沖山昇 ここ通って行ったんです。横切ってね。（地図を見ながら）

聞き手 あ、じゃあこの道は今なくなってるんですね。それでわけわかんないんだ。

沖山昇 そうですね。掘り割りがこれでしょ。

聞き手　　これが観音坂で。これが地蔵坂で。そっか。この地図が読みにくいと思ったら。

沖山昇　　この道、今なくなってるんですよ。

聞き手　　そこを通過して探鉱事務所に行って、おうちに帰って。

沖山昇　　4カ年通いましたよ。

聞き手　　ここが一番近いわけですね。

#### <八丈太鼓>

聞き手　　八丈太鼓がちょっと廃れて、一時期、昇さんが八丈太鼓を伝えるために子ども達に教えてたんですよね。あれは学校の授業でやられたんではたっけ？

沖山昇　　学校ではなく、土曜、日曜。練習しました。黒板にね、タンタタンタ、タンタタンタンと書いてね。離島振興総合センターで教えてたんですよ。だから北大東の子供たちは、八丈太鼓があるし、英哲さんが教えた太鼓、八丈6人衆の太鼓、それと響太鼓。この4種類をたたくんですよ。

聞き手　　昇さんがその離島総合センターで教えられたのは、いつごろですか？

沖山昇　　響太鼓の後。

聞き手　　大体いつぐらいですかね、それは。助役のころですか？。

沖山昇　　教育長でしょうね。

聞き手　　教育長のころ。響太鼓は2000年ですね。教育長のころですね。響太鼓が始まったちょっと後ぐらいに、離島総合センターで教え始めた。北曙会の前身の太鼓愛好会が始まったのが2002年。それはサチコさんですよ。昇さんが教えられたのは、サチコさんとは別ですか。

沖山昇　　一緒。サチコさんがやっていたときに。

聞き手　　大東太鼓愛好会っていうのが、それですね。

沖山昇　　そうですね。

聞き手　　はい。それが名前を変えて、北曙会になってるんですよ。

聞き手　　そのときに、昇さんが、そういう楽譜を書いて。

沖山昇　　それ始まってから、私が個人的に教えたんですよ。トントントンっ



ていうあれが、どっかにつづられてないかな。

聞き手  
沖山昇

それはサチコさんから頼まれたわけではなくて？  
頼まれたわけじゃなくて。

みんな声はあるんですよ。八丈太鼓、昇さんから早く習っておかんとだめよ、誰もわからなくなるよっつってね。習っとかんといかんよ、いかんよする人はいるが、習う人、来る人はいないわけ。私が役場にいるときに、青年会で八丈太鼓教えてくださいよと言ったから、よしきたと。じゃあきょう夕方ねっつってね。むしろもひいて、お宮から太鼓も担いできて、準備して、みんなが来るの待ってたんですよ。もう誰も来ないんですよ。私は何してるんだっつってからにね。

本当は習う人がちゃんと準備して、やっってくださいっちゅうものでしょ？教える人が一生懸命やって、教わる人は来ない（笑）こんなばかげたことがあるかっつって、それから子供たちにいったんですよ。

聞き手

北曙会の始まりのころに、昇さんが、八丈太鼓を伝えているっていう場面があるわけですね。

沖山昇

そしたら、響太鼓ができ。八丈6人衆も来ました。

聞き手

6人衆も2000年のころですね。昇さんがその愛好会で教えたのは短い間ですか？

沖山昇

1カ月もしないですよ。土曜、日曜だから。以前、たたいていた太鼓はこんなだよということで、教えたわけだから。八丈太鼓はこうなってるよということでね、教えたから。もうみんな股開いてから、こんなこんなして、6人衆やってるでしょ。八丈太鼓っていうのは、我々がたたいたのは、お年寄りがね、おばあちゃんとね、足をそろえてやるんだから。もう八丈でもなくなったって。お年寄りが亡くなってね、跡継ぎがないっつってから。八丈の人が、私がたたく太鼓見たら、これが八丈太鼓だよってからに言いよったっつってね、北大東行って見たっつってね。

聞き手

守身さんは平成15年に亡くなられてますけれど、御高齢になるまで太鼓はたたかれてたんですか？

沖山昇

西銘さんが見えたとき。

聞き手 西銘知事が来られたのは、何のイベントでしたか？  
沖山昇 複式学級の解消の要請だったですよ。私が教育長のときだ。  
聞き手 西銘知事のときに、たたいたのが最後ぐらいですか。西銘知事の来島は、1985年ですね。  
沖山昇 うちなんかが見たのはね。

#### <ラサ島のこと>

聞き手 ラサ島の話なんですけれど、昇さんは、平成元年のラサ島の調査に…。

沖山昇 あー、ラサ島行きました。

聞き手 ラサ島の調査の話は、盛男さんからも聞いているんですけど、昇さんから直接聞いたことがなかったの、そのときの様子を振り返ってお話ください。

沖山昇 ラサ島の行政区が北大東村字ラサになったんですよ。それで、視察に行こうということで。行ったことないわけですから、誰も。行政区を視察しないわけにはいかんだろうということで行ったんですよ。南大東と一緒にね。そしたら、防衛庁から米軍の射爆場だから上陸はしないようにと言われて。でも、上陸しなかったら何もしないしですね。きょうは、射爆訓練しますよということで通知がきますから。だから、通知が来てない、今訓練じゃないからって。内緒に上がって、上陸したわけですよ。

聞き手 許可、受けてなかったんですね。

沖山昇 許可受けてなかった。上陸しないといって。それで、内緒に上陸したんですよ。でも、不発弾があるだけで、何カ所かあるだけで、別に被害はないからよかったですけどね。

本当に島の形も北大東に似ているわけですね。北大東のあの幕内にすぽーんと入るくらいの島で。ちょうど真ん中に、赤池、大池がみたいにして、小さい池があったんですよ。そこおりていって、どんな水かな、天水かと思ってみたら、やっぱり海水だったですね。真水じゃなかったです。海水だったんです。だから、北大東は、赤池のところ、海拔5寸って、15センチくらいです。ラサ島はもっと低いんじゃないかなと思ったんですよ。海水なもんだ

から。こっちは真水が相当たまりますでしょ。

聞き手 上陸して少しおりにいる感じがしたんですか？

沖山昇 北大東の幕内におりにいくみたいですよ。

聞き手 幕外や幕の部分はなくて。

沖山昇 なくて、はい。

聞き手 入ってすぐこう…

沖山昇 そうそう、こうなっている。そして、周りはまた、燐鉍採掘した跡で、北大東の石ころが出ているところ、ああいった格好でしたよ。そして、人が住んでいたコンクリートの基礎ですね、これが残っていたね。そして、石垣でこうして道ができていてね、人が通れるくらいの通路があったよね。ここ燐鉍を担いで、人が通ったのかなと想像ですけど。

聞き手 建屋はまったく残ってなかった？

沖山昇 建屋はまったくない。して、竜舌蘭も1mくらいしかないですよ。大きい木っていても、ギンネムぐらいですね。あとはもう、みんな小さくて、草も生えているか、生えてないかくらい。もうガラガラな島ですな。石ころの島っていった。

聞き手 動物はいなかったですか？

沖山昇 動物はいない。動物は、ある人がウサギを持って行って放そうとして、したら、ミヤギヤスカズ先生が、植物がなくなるからだめって言ってね、とうとう放さないで持ち帰ったという話もありますがね。

聞き手 だいとう丸で行って。何時間くらいかかったんですか？

沖山昇 漁師が魚とったくらいですから。2、3時間はいたでしょうな。もっと、いたかもしれない。朝行って、夕方帰ってきたわけだから。

聞き手 北から行った人は、あとは、盛男さんが行っていて。

沖山昇 城間村長、私、ガシヨウさん。議員の皆さん。結構行きましたよ。

聞き手 平成元年に行くまでの間は、戦後は結局、誰も行ったことがないということですか？

沖山昇 ないんですよ。射撃場になってるもんだから。漁船ではちよいちよいちよい近くまで行ってたらしいですけどね。尚。うちの弟も1回行ったらしいですけど。こんな大きい漁船に乗ってね。

聞き手 大きい漁船？

沖山昇 宮崎船とか沖縄船が魚釣りに来ますでしょ。2、3日とまっていて釣る。あの船で行ったらいいですよ。

聞き手 そういうのに乗せてもらってということですか。さすがに、島の船では…

沖山昇 ちょっとね。160キロもあるわけですから。

聞き手 尚さんは、沖縄の船が来たときにラサ島近海まで漁に行っていたという。

沖山昇 行ったそうです。そしたらよく魚が釣れるよっていう。

聞き手 そうやって船に乗っていったウミンチュはいるけど。ウミンチュから話は聞いたりしたことはあるんですか。どんな感じだよとか。

沖山昇 わかりませんね。ただ行ってみたと。魚釣りに行ったわけですから。上陸はしたかどうか、ちょっとわかりませんね。

聞き手 射爆場指定される前ですか、した後ですか？

沖山昇 した後。

聞き手 ラサ島に関して国に要請をしたことがありますか？

沖山昇 人材交流センターをつくるときに、軍用地があるから、防衛予算を下さいという要請をした。ラサ島は、別に関係ないんじゃないか、無人島でもあるしって言うから、いやあっちは、水産業がいいところでしょ、魚がとれるから上等だというところで、射爆場を解除してもらわないと困るということですね。だから、北大東にとってラサ島は非常に重要な島であるということですから、射爆場のままにするんだったら防衛予算を下さいって言ってから。こんな要請だったんですね。

聞き手 ラサ工業とはかかわりみたいなのは何かありましたか？

沖山昇 ラサ工業は、あのころ、7億円ぐらいの借地料もらっているとか言っていましたからね。

聞き手 ラサ工業と直接何か交渉したようなことってありましたか？ラサ工業が島の返還に協力してくれって言いに来たという話を聞いたことがありますか。

沖山昇 じゃあ、ここに北大東に出張所をつくってくれってということ言ったんですよ。そしたら幾らかは村に収益があるんじゃないですか。

いやそれはできないって言ったから、じゃあこっちもできないって言った。

聞き手 やっぱそういう交渉はあったんですね。一説によると、燐鉱石が残っているはずだから、その燐鉱石の採掘を、再開したいというようなことで来てたっていう話を聞いたんですけど。

沖山昇 本当、見たら、燐鉱が本当残っているかなっていうぐらいですよ。木も生えてないし。石ころの道ですからね。だから、再開するなんかというのはちょっと、考えられはしないですけど、何を考えていたのかわからんけど。

## 第5章 奥様とともに

聞き手 今日、奥様の美智子さんも一緒にお話をうかがいます。  
まず、守身さんの話をお聞きしたいと思います。その後で、昇さん  
から話はかなり聞いたんですけれども、もう一度、美智子さんが島  
に来られるときの経緯とか、それから出会ったときのこととか。

沖山美智子 忘れましたよ。

沖山昇 ウリジャーナーデージナトーン。

聞き手 で、昇さんが、製糖工場とか、電業所とか、務めておられるころの  
様子とか、それから助役になると、今度は、一緒に働くことになる  
んですもんね。

沖山美智子 はい。

聞き手 一緒に働いていたときの話とか。結婚されるちょっと前から、結婚  
された後の話をもう一度振り返っていただいて、できればいこの  
島田清四郎さんのお話を最後に聞かせていただいてというつも  
りでいます。余りかたくならずによろしくお願いします。

沖山美智子 何か緊張しますよ。初めてこのとで。おしゃべりは上手だけど。

聞き手 ふだんのおしゃべりのつもりで。

### <守身さんの人となり>

聞き手 最初に、守身さんの話をお聞きしたいと思います。

守身さんが御存命のときにもっともっとお話しを聞いておけばよ  
かったなーということをよく聞きます。さぞやいろんな経験をさ  
れているんだろうと思うので、

こんな人だったよとか、こんなエピソードやこんな出来事があっ  
たよとか、思いつく範囲で結構ですので、守身さんについてお話し  
ください。

沖山昇 そうですね、「俺は、字は書けないけれども、読むことはできるし。  
物事わかるよー」というふうなことを言っていましたね。  
例えば、何か北大東に取材が来ますでしょ。あーもう守身おじい  
のところに行きなさいって、案内されてたですよ。だから守身おじい、  
うちの父が、いろいろ記者に話して、それが新聞に載ったりするの

が常だったですよ。

聞き手 何で守身おじいのところに行けてことになるんですか？よく知ってるからですか？

沖山昇 島のことを聞くためにですよ。今ちょう私がこんなしてやってみたいに。

聞き手 親子そろってですね。

沖山昇 えへへへへ。

沖山美智子 老人暴走族って言われたもんね。オートバイ乗ってね。いっつも鎌を差して。ときには、ばあちゃん乗せてるもんだから。危ない危ないって通る人が言ってたけど。とにかく屈託がなくて、明るくて。この人なんか大人しいけどね。おじいちゃんは、おおらかで。一杯どこかで飲んでもね、歌いますって、誰も歌ってとも言わないけど。結局、歌って、それがまた「骨まで愛して」とかっていう歌を歌って（笑）さよならー、帰るねー、ばいばいって、もうこのまま帰ったりして。非常に明るい人でした。

何かみんなじいちゃんのところにお話し聞きに行くんですね。

沖山昇 だから私も、うちの父からいろいろ聞いた。まあ聞いてたもんだから、今聞かれても。ここはこうだったって昔の話ができるわけですね。まあ三つ子の魂だから、3歳ぐらいからいろんなことがわかるわけですよ。そういったことは覚えてはいますけども。それ以前のこと、私がしゃべっているのは、みんな守身おじいから聞いた話ですから。だから、わからないことを質問されると、あーもっと聞いとけばよかったなー、と考えたりするわけですよ。

沖山美智子 今のような機器がなくてね。録音しとくとかっていうのはなかったよ。

聞き手 守身さんの生の声のテープが残っているって聞きましたけど。

沖山美智子 残ってます？

聞き手 ええ。鬼塚さん、副村長が持ってるって。

（守身さんが出演したラジオ番組の録音テープの内容を P\*\* に収録している。）

<東京の守身さん>

沖山美智子　じいちゃんのおもしろい話は、東京で関東大震災に遭った話。のときに、二十歳で東京に行って、どっかのブリキ屋さんで働いていたんだそうですが、主は新潟の方だそうですよ。そこで、関東大震災がおきて、火がこう囲ってくるので、みんなは反対方向に行ったけど、俺はな、みんなが行くところには行かないでね、それで難を逃れて。

東京銀座の服部時計店ね。あそこのものがぜーんぶ落ちて、君たちが使うようなおしゃれな時計とかネックレスとかといっぱい落ちているが、もう自分の身が危ないから、みんな誰もとる人がいない。今考えたら1つぐらいとってたら、金になったのに（笑）命が大事だからって。おまえたちにこの、1つぐらいとってたらもう金満家になってたって（笑）うちの孫たちにみんな話して笑わしてましたけどね。うん。でも、正直に生きることだ、とかと言って。大変明るい方でしたよ、もう。

それから、この主さんの大事な道具でした？自転車に乗って新潟まで持って行ってあげたっていうこと言ってましたよ。すごい喜ばれた一って言ってね。大事にしていた道具と言ったかな。

聞き手　守身さんはそうやって東京に行ってたこともあるんですね。

沖山美智子　二十歳ごろに行ってたって。結婚していたんだかな、あのときは。

聞き手　島に15で来ているから、5年ぐらい島にいた後ですね。

沖山昇　長男が生まれたころだそうですから。

聞き手　良夫さんが。

沖山昇　良夫が生まれたころですかね。うちなんかが生まれる前ですね。

沖山美智子　焼け野原になって、自分は賢く、向こうのほうに行ったんですって。火はこっちに来るけど、どうにか助かった話。頭を使わんとだめだよって言って、孫たちに言っていましたよ。

聞き手　それは出稼ぎみたいなことですか？

沖山美智子　だと思います。

聞き手　で、ブリキ屋で働いていた。

沖山美智子　ブリキ屋の職人だったんじゃない？おじいちゃん。

沖山昇　ブリキ屋行ったり、せいべい屋に行ったり。

聞き手　せんべい屋もそのときですか？



沖山美智子 いろいろ体験したんでしょうね。

沖山昇 何であのときに東京行ったのかわからないね。長男が生まれてくるわけだから。それをこっちに残して内地行ってということは。で、震災に遭ったもんだから…

沖山美智子 帰ってきたのかな。

聞き手 当時のことだから、島を出るのはなかなか大変だったでしょうね。

沖山昇 もう、大変だった。1カ月に一遍ぐらいですか。燐鉱船でしか行けないから。

沖山美智子 ええ、門司に行って、沖縄に行ったという話していましたよ、清四郎兄さんは。

聞き手 はい。門司を起点に船が回っていたみたいですね。積取り船は。大阪、門司、沖縄、東京っていうふうに、回っていた。

沖山美智子 はい。

沖山昇 八丈島からは、(宮崎の)油津港に寄って、名瀬に寄って、那覇に寄って、島にくるということで。

聞き手 油津に寄ってたんですかね。

沖山昇 砂糖をおろす港だったらしいですよ。だからこれを経由してきた。

聞き手 砂糖の積取り船のルートで来たということですね。

沖山昇 最初は、八丈島からすぐ那覇へ来たのか、直接来たのか。

聞き手 最初の来たときの話は聞いていない？

沖山昇 聞いてないですね。

沖山美智子 守身おじいのお兄さん、孝っていうんですが。私たちが、養子に入っているわけですがね。そのおじいちゃんの話では、風呂敷包みだけで、ポストンバッグもあるわけじゃないから、自分の着物とかふんどしとかを包んで。大阪で長いこと、きょう出るか明日出るかと思っただけで待っているけども、二十日ぐらいそこで滞在していたと。

聞き手 大阪で待ってて。

沖山美智子 おじいちゃんは八丈で何していたの？って聞いたら、炭焼きね、何にもなっきゃーと言ってたんです。

私たち、3組の兄弟夫婦で、この人の次男兄さんたち、三男の私たち、四男の尚さんたち、6人で八丈行ったときは、何にもなっきゃーという孝おじさんのイメージでしたが、私は、八丈を大好きにな

りました、自然がいっぱい。

おじいちゃんが言ったのは何だったんだろうと思うが、炭焼きっていうのはすごく大変で、昼も夜も何日間も見ないといけないから、そういう大変さを言ったのかなって、今は思いますけどね。

<八丈を訪ねて>

聞き手 皆さんで八丈に行って、守身さんが生まれた場所に行ったりはしましたか？末吉村とか。

沖山昇 末吉村は通っただけ。誰もいないですから、もう。

聞き手 もう、いないですか？

沖山美智子 みんな、千葉に引き上げていったっていう。私たちの養母の弟さんの息子さんたちが、民宿をしていたものですから。そのおうちをみんな訪問してね、弟さんは亡くなられたので線香をあげたり、そのお子さんがタクシー会社の方で、私たち 6 人を乗せてね、観光案内してくれました。

聞き手 もう沖山の御親類は、全くいないですか。

沖山美智子 おばあちゃんの親戚だけです。おばあちゃん、養母ですね。

聞き手 孝さんの奥さん。

沖山美智子 ハヤっていうんですけど。

<ハヤさんのこと>

沖山美智子 このおばあちゃん、頭がよくてね。小学校 6 年生までしか出なかったっていうけど、南大東でいつも 1 番だったそうですよ。私恥ずかしいぐらい。自分は高校出たけど、こんなに歴史詳しくないのに、うちのおばあちゃんは歴史に詳しくてね、孫たちに教えているわけですよ。恥ずかしいなと思ったこと何回もありましたけど。本をあつらえて、それが自慢だったらしいですよ。社宅の奥さんたちは、1 人が着物をあつらえたと言うと、じゃあ私は松坂屋、東京の。次は帯といたら、またみんな帯。あの人には負けない。やっぱり女の、うふふふふふ。みんな、競い合って。

聞き手 それ、社員の奥様方の話。

沖山美智子 そうなんですよ。

うちのお母さんたちは、そんなのはなかったと言ってましたがね。今でも、着物を置いてあるけど、私なんか手もつけられないぐらい地味なもので。

でも、差別がありましたね、お話を聞いていると。

会社のお風呂に入るのは、まず、奥様、会社の社員、次は、八丈の人、その次は沖縄の人。沖縄の人が入るときは膝より下にしかお湯がなかったって。すごい差別があった時代。時代がそうでしたから、みんなそれに慣れて、誰も逆らうこともなく、黙々と生活していたんだなと思うんだけど。

聞き手 そんな話は島の人から聞いたんですか？

沖山美智子 おばあちゃんから聞きました。ハヤさん。私たちずっと生活一緒にしていましたから。

聞き手 おばあちゃんがいろいろいるので。

沖山美智子 両方にいるんですよ。

だから私、出張行くと、帰りにおばあちゃんたちのワンピースとか肌着を買ってくるんだけど、同じ柄があったら同じの買うんだけど、ないときは、うちのハヤおばあちゃんに先に選んでもらって、2番目にこの人のお母さん。選んだとか言わないよ。おばあちゃん、今度出張行ってきたからあげようって言ってあげたんだけど。本当は同じ柄を選びたかったが、うちのおばあちゃん、大柄の人で、今で言うとLLぐらいかな。こっちのおばあちゃんはLぐらいでよかったはずね。

うちのおばあちゃんは何もしないで、農業もほとんどしないで、本読んで、当時は、テレビもないから隣のうちでおしゃべりして、お昼になったら帰ってくるとか（笑）もう、すごい物知りでしたよ。

うちの子供たちが、小学校のときに、いつも寝ながら、いずみがここに、かおりがこう寝てたら、おばあちゃん、本読んで、読んでって言って、毎日同じ本読むけど、途中で寝てしまうから、最後まで読んだためしがないですよ（笑）本が好きになりましたよ、おかげでね。子供がいなくて、本当に自分の子供のように、孫のように考えて。

沖山昇 はい、これでいいんですか。いつまでも話しますよ（笑）

<ヤギで怒られる>

聞き手 話を守身さんに少し戻しましょうか。

沖山昇 そうそう。

聞き手 他に、守身さんのことで覚えておられることはありますか？

沖山美智子 ヤギのこと言った？朝早くね、昇一、昇一は起きてるかーって言ってね。

沖山昇 ああ、覚えている。

沖山美智子 朝 6 時前に、私は起きてましたよ、弁当か何かつくるっていつてね。今起こしますよ、すぐ起きますからって言って、まだ寝てるのかーって言って。で、ぱっと起きて出てきたらね、そっから何を言うかと思ったら、あのころ、港区の区長さんだったので、何月何日の文章読んだか昇、って言ってから、あ、何に書いてあったかなって言って、それ続き言ってください。

沖山昇 これは、私が言ったほうがいいね。

はい、守身おじいになって。「昇はどこだ」、ああ、今寝てるが起こすよってから起きてきたら、「はい、昇、おまえはきのうの文章見たか。」何で？って言ったから、「村役場がヤギを放したら、なくなったら責任とらないということはどういうことだ、文章見たか」って言ってからに、いや見てないけどって言っていたら、「そういうことではだめだよ、ちゃんと文章見て、これはいいか、悪いか見てからやりなさいよ」って言ってからに、帰って行きましたがね。御意見番ですね、要するに。

ヤギがいなくなっても役場が責任持たないということが気に入らないらしいです。

沖山美智子 経済課からの文章だったんですけど。

沖山昇 こうしなさいよというべきであって、役場は知らない、責任持たないってから、こんなことでいいかって言ってから。

沖山美智子 その文章、目も通さないで配ってしまってるわけね。それを見てないっていつていつてから怒られて（笑）

聞き手 それは助役のころですか。

沖山昇 助役。

聞き手 ああ、助役に対して意見を持ってきたという。  
沖山美智子 ああ、そうなんですよ（笑）責任持たないって。それから、もう一生懸命、そのお父さんの注意がね。  
聞き手 お父さんに怒られて（笑）  
沖山美智子 怒られて大変（笑）  
聞き手 隅から隅まで目を通しておかないとまずいことが起きますね。

<面倒見のよさ>

沖山昇 外部から来られる方を、非常に大事にしましたね。  
だからあの、浅沼さん、私の工場の上司でもあったんですけど、うちの仲人でもありましたけどね、浅沼ミツヒロさん。南大東から北大東に工場つくりに来たとき。何かにつき不自由でしょ。そしたら、いつもうちに呼んだり、いろいろお話し合いしたりしてやったらいいです。非常に助けられたって言って、浅沼さん、よく私に話聞かせましたよ。製糖工場でね。おまえのお父さんには、こうこうして助けられたよって言ってね。  
聞き手 まさに面倒見がよいということですね。  
沖山美智子 はい、世話好きでしたね。お客さんをすごくもてなすし。  
沖山昇 よそから来た人は不自由だろうな一っていう。  
沖山美智子 寂しいかとかって言って。  
聞き手 みんなを家にあげて料理出したり、お酒出したりっていう感じですか？  
沖山昇 そうそう、そういうこともやりましたし。  
沖山美智子 若いころ、農家だから、ニワトリもいっぱい、卵もいっぱいあるけど、みんな社宅に持って行ってあげるんですって（笑）おうちのものは何でも食べさせていいっていうような感じで、社宅の奥さんとか、何か宴会とか、鳥つぶして持って行ってあげたりして。だから、社宅の奥さんたちから、守身さん、ちょっと来て来てって。おいしいのまたいただいたっていう話は何回も聞きましたよ。  
聞き手 そんなふうなおつき合いがあるんですね。守身さん自身ももともとは海岸係で、社宅街とは割と親しい感じがあったんでしょうね。  
沖山昇 大日本製糖の社員の方とはもうじっこんして。だから、社員の方、

しょっちゅううちに遊びにきよったんですよ。そしたら、すぐ鳥殺して、大接待ですもん。

聞き手 社員の方は、要は遊びに来ているんですか？

沖山昇 遊びに来るんです。

聞き手 遊びに来て何しているんですか。守身さんと。

沖山昇 いや、話、話。何の話をするかわからないですよ。大人の話だから。

聞き手 で、飲んだり、食ったりっていう。

沖山昇 はい。うちは子供だし、おい、お茶沸かせって。一度は、怒られたことがあります。水があるでしょ。茅葺き屋根だから、色のついた天水ですからね。

沖山美智子 今のウーロン茶みたい（笑）

沖山昇 お茶沸かしなさいって言ったから、まだ小学生だったんですが、よしきたって沸かして、急須について持っていったわけだ。お茶っ葉入れるの忘れてですね、それでもお茶の色は出るわけですから。

聞き手 色が出る（笑）

沖山昇 これで持っていったから、おまえはお茶入れてないなって（笑）何でって言ったから、これお茶入っていない、飲んでみろって言うてからに。色が赤いから忘れるんですよ。そうって怒られたこともあるし。

聞き手 そのときに、鳥つぶしたりするのは、子供がやっていたんですね。

沖山昇 はい、鳥をつぶしました。

<厳しくて優しい>

沖山美智子 野球したかった話は？

沖山昇 ああ、怒られたこと（笑）

沖山美智子 ああ、じいちゃんに（笑）あれ子供だからね。

沖山昇 厳しかったですよ。うちの父は。

沖山美智子 学校終わってどこかの庭で、鬼塚の庭で？日が暮れるまで野球して（笑）

沖山昇 牛の草刈りしますでしょう、でも子供だから、友達が集まると、何か遊ぼうという考えで、野球のまねですな。ボールをこう打ったり

してから、投げたりしてキャッチボールなんかやって。飼い葉刈らないで、もう日が暮れたわけですよ。

沖山美智子 暗くなってから（笑）

沖山昇 本当は、二、三十把も刈るべきものを、10把ぐらい刈っていてもね、牛が5、6頭もいるわけだから足りないわけだ。おまえは、また遊んだなということで、もう、足蹴りされました（笑）

沖山美智子 あのと、初めて足蹴りされた（笑）

沖山昇 子供だから、もう足でこんなされたら、アッサビヨ、もう怖かったですよ。

沖山昇 このくらい厳しかったですね。

沖山美智子 昔の親父はそうですね。

沖山昇 そういうふうにして、我々育てたわけですよ。

沖山美智子 一つのしつけですからね。

聞き手 厳しいけど、優しい親父ですか。

沖山昇 ああ、優しいところあるんですよ。いいことしたら褒められるですよ。悪いことするから怒られるわけだからね。私も反省するわけですよ。

聞き手 それはメリハリがあります。

沖山昇 はい。

<歌が上手い>

聞き手 守身さんは、お酒は飲めたんですかね。

沖山美智子 余り飲めないね。

沖山昇 私と似ている。うちのきょうだいは強いですけど、私が一番弱いですからね。

聞き手 守身さんは、そんなに飲むほうではない。

沖山昇 もう1、2杯飲んだら。

沖山美智子 でもお祝いのときの席では、ビール1杯ぐらい飲んだらすぐ、誰も歌ってとも言わないけど、祝い節歌ったりして。それじゃあ俺は失礼しますってすぐ帰りよった（笑）おもしろかったですよ。

聞き手 大して飲めないからすぐ帰っちゃうんですね。

沖山美智子 日曜日にするのど自慢があったら、本当、3点賞もらえるぐらいす

ばらしい。それも、テープがあるわけでもない、見て覚えるんですけど、好きな人は覚えますよね。歌詞もみんなわかるんですね。じいちゃん、どうしてわかるのって言ったら、毎日歌ったら、もういつの間にか覚えてしまうよとかって言ってたがね。本当にうまい。ここまでNHK来てくださればいいなっていつも思いましたよ(笑)

- 聞き手 最新の曲もちょっと聴いただけで覚えて歌っちゃうっていう。
- 沖山美智子 「骨まで愛して」っていうのを最後まで歌ってから、あばよ一って言って帰りました。そのときみんな大拍手(笑)
- 沖山昇 あれは離島振興総合センターができたころだから、昭和60年ごろですね。もう7、80ぐらいなっていたでしょう。そのときに流行った「骨まで愛して」。いやー、あれには、もうびっくりしました。
- 沖山美智子 流行歌は、本当によく覚えてましたよ。
- 沖山昇 いつ何どきこれ覚えたんだらうって言ってね。みんな、目丸くしてましたよ。若い連中が。
- 沖山美智子 かわいそうだったのはね。おばあちゃんが亡くなったあと、私たちみんな勤めなもんだから、おじいちゃんをずっと見ておれなかったの、施設に入れたさ。
- 沖山昇 ああ。
- 沖山美智子 そしたら、白い車が通ると、あれは昇だけど、ここに来ないな一って言って。白い車はどこの車もみんな昇の車だって思っているわけですよ。あら、来ないな一って言って、ねえ。妹がいたから、よく行ってくれたんですけどね、一番下の妹が。  
大変、豪快な方でしたね。楽しく、人を楽しませて…。

#### < 獣魂碑 >

- 聞き手 観音様の隣に獣魂碑がありますが、守身さんが関わっていると聞いたことがあります。
- 沖山昇 獣魂の碑っていうのは、お地蔵様のところにあつたのを、いまのところに移動したんだから。
- 聞き手 お地蔵さんのところにあつたんですね。
- 沖山昇 戦前ですね、使えなくなった牛とか、養っていた豚とかを、東京に燐鉱船で送ったんですよ。そのときに守身おじいさんが会社から世話



人として雇われて行ったんですな。が、途中で台風にあって。  
聞き手 その船に乗ったわけですね。  
沖山昇 世話役として、船に乗っていたが、100頭ぐらい積んでいって、2、30頭ぐらい、流されたそうなんですよ。そしたら、その弔いをしようということで、建てたと。ササモトテルヨシさんっていう方がいたんですよね。その人と一緒にやったと。  
聞き手 その事故が起きたのは戦前の話ですね。  
沖山昇 戦前からありましたよ、獣魂の碑は。  
浅沼拓道 もともと地蔵さんの隣にあったのを何でまた観音さんの隣に移したんですかね。  
沖山昇 観音様は戦前は牛神様と言ってからに、牛豚の生き物の神ということでお祀りしてたんですよ。だから、観音祭の日は、耕牛などもみんな休ませて、おいしい飼料を刈って食わしてやった。だから、牛神様の隣に、獣魂の碑を持ってきたと。  
聞き手 動物関係はそこで一緒に祀ろうという。  
沖山昇 そうそう。そしたら、戦後になったら、観音様は土地の神様とか学問の神様になってしまったんです。那覇から来られる巫女様方が、そういうふうにした。だから、沖縄から来られている方は、みんな学問の神様つって一生懸命やっていますよ。八丈の人は生き物の神様とかってね、やっていた。  
聞き手 それぞれ信仰の仕方が違ったんですね。  
沖山美智子 ちゃんぽんされてね、沖縄とね、八丈。  
沖山昇 だからちゃんぽんの島（笑）

#### <祭事の取り仕切り>

沖山美智子 うちの人はほんとに結婚する前から、平成15年に仕事やめるまで、一生懸命働きました。くそ真面目で、昇目に入ったような人なので、ちょっと融通もきかないところもあるかしら。ばか正直というか、そこら辺ちょっと放ってもいいんじゃないのと言っても、それができない人なんです。私はそれにほれたかもしれないけど（笑）自分にないところにほれたかもしれませんが。  
とにかく、やましいことも大嫌い。本当にこれっぽっちもね、うそ

のつけない人、すぐばれてしまう。結婚してもう 57 年ぐらいなりますけど、平成 15 年で仕事終わって、はじめて奉賛会の仕事もやめました。結婚する前から、何十年も仕えましたよ。もうこれでもいいんじゃない、あとはちょっとは肩の荷をおろしてって言ってから、今は一切そういうことやってませんね。

沖山昇 どうもどうも、失礼しました。

沖山美智子 ナカモトさんという方がいらして、もう亡くなったんですが、この方がね、今のように車が向こうから回って入れる神社じゃなかったから、いちいち何か持ってこう上がっているのを見て、可哀想だって、だ一僕が持ちましようって言って全部持ってあげて、それからこの人がやるようになったんだね。

沖山昇 はいはい。あれは、製糖工場にいたときですもんね。もっと前のことから言うと、会社にいた神主さんが、沖山謙作さんという方に、おまえがこれを番しなさいよーって、お祈りするときに、お供え物しなさいよーって、こう言われたわけでしょう。沖山謙作さんが引き揚げたもんだから、今度は沖山能作さんにバトンタッチした。この方たちは神主の免許も何もないけれども、世話しなさいと言われたもんだから、着物もちゃんとばっちしされて、白い着物着てやってきましたよ。

そうしているうちに、村が奉賛会というのを設立して、奉賛会長に製糖工場のナカモトリョウカイさんという総務課長になって、この方がまた一生懸命やっているわけですよ。この方は年配の方なのに、お供え物をもう担いで、神社の階段を上がっていくわけですよ。私はこれを見ていて、お手伝いしましようつってから。私は若いからね、ピンピンしてるもんだから、どんどんお手伝いして、今度はあと自分がこれやるようになってた。

浅沼拓道 祭典係。

沖山昇 何十年とやりましたよ。

浅沼拓道 僕も祭典係なんですよ。奉賛会の。

沖山昇 は一っさよ。

浅沼拓道 三大祭り、玉置祭、観音祭、大みそかの神社も、全部また掃除して、飾りつけして、餅飾って、酒飾ったりするんですけど、なかなか忙

しいですね。

沖山美智子 除夜の鐘が鳴るまでね、うちにいたことないよ。もうずっと向こうで。

聞き手 祭典係ってというのはその、整える係ね。祭殿を整える。

沖山美智子 灯籠のところもね。

聞き手 昇さんが前から引き継いで、それが拓道まで引き継がれている。

沖山美智子 今、拓道君がやってるの？

浅沼拓道 今、ヨシロウさんが係長で。

聞き手 会社に神主さんがいたんですか？謙作さんに渡される前は。

沖山昇 神主さんがいたんです。

聞き手 記録として見たことないですけど、いたんですか。

沖山昇 製糖工場の職員で、して、祭りになったら世話をするという。会社の社員で、祭りになったら神主をやると。戦前の話だから。神主がいたっていうのは、大日本製糖時代だから。戦後は、製糖工場の社員がかけ持ち。社員だけども、神主の勉強をした人がいた。

聞き手 神事をとり行った社員がいたということですね。で、その人から引き継いだのが謙作さんだったと。

浅沼拓道 今は沖ノ宮から呼んでるじゃないですか。

沖山昇 そうそう。56年に新しいおみこしを買ったから、今のおみこしを。新しいおみこし買って、そのまま担いでいくわけにもいかんから、沖ノ宮から神主さんと呼んで、お願いして、お祓いしてもらって。

沖山美智子 今でもそう、2泊3日ぐらいで。

<太鼓の名手>

浅沼拓道 沖山謙作さんと能作さんとは、どういう関係ですか？親戚ではない？

沖山昇 親戚ではない。島の人。八丈の人。

聞き手 いずれも太鼓の名手として。

沖山昇 そうそう。

沖山美智子 手のね、どこかなかったけどね。すっごい上手。

沖山昇 4本の指を、荷役で、ワイヤーで挟まれて。

沖山美智子 あっ、それで切断。

沖山昇 挟まれて。  
聞き手 それは、能作さん？  
沖山昇 能作さん。だから、太鼓の名手でも、小指と親指で棒つかまえて、  
こんなしてたたいてたんですよ。  
沖山美智子 小柄でね。すごい上手です。  
沖山昇 長らくたたいてると、疲れて棒飛ばしちゃうんです。  
聞き手 前にお聞きしましたけど、太鼓のたたき方が人によって全然違う  
ということでしたね。守身さんと能作さんと謙作さんと、それぞれ、  
特徴がある叩き方をしていたと。  
沖山昇 笹本輝一さんもね。八丈の人は、うちの父の連中はみんな集まって  
たたいてましたから。私はこれじーっと見てたんですよ。  
聞き手 それぞれの特徴はどんなもんなんですか？  
沖山昇 沖山謙作さんっていうのは、よいしょーつつつてね、背も高かった  
ですよ。だから、こうして上げてたたくと勇壮でしょ。  
聞き手 伸び上がるのは謙作さんで？  
沖山昇 それから、こばみを入れるのが沖山能作さん。  
聞き手 ちょっとしたリズムが。  
沖山昇 ちょっとしたこばみね。笹本輝一さんは、あ、よいしょこーらして、  
こうね、楽しくこういうものがあの人打ち方。  
聞き手 守身さんはどうだったんですか？  
沖山昇 守身おじいは、私が今たたいているみたいに。  
沖山美智子 今やってるのと同じですよ。  
聞き手 基本的な型は守身さんから引き継いでいて。  
沖山昇 そうそう。  
聞き手 だけど、時々、伸びたりするのは。  
沖山昇 その間に、これを入れるわけですよ。  
聞き手 それぞれの特徴入れてるんですね。  
沖山昇 皆さんのものを入れると。ミックス（笑）  
沖山美智子 平成4年に八丈行ったときにね、あの服部屋敷といった？  
沖山昇 うんうん。  
聞き手 あそこでね、15、6人のおばあちゃんたちが黄八丈着て、頭に手ぬ  
ぐいして、帯も黄八丈の帯して。おばあちゃんが、それ来た、それ

来たってみんなやりましたよ。こんなに手が細かくではないけど、あー、すてきだなと思って、今はその人たちがいなくてやらないって言ってましたけどね。すばらしかった。

沖山昇 観光客に見せるために。

沖山美智子 すごく簡単ではあったね。

聞き手 昔の大東宮の前でたたっている写真（写真参照）。

沖山昇 あれ、沖山謙作さん。こう、上げてますでしょ。もう一人は、弟のキチジさんという人。会社にいましたよ。

浅沼拓道 あれはすばらしい写真ですよ。

沖山美智子 100周年にね。この人と誰とだったかね、清忠さんとたたいたんかね、100周年のときに。八丈島から南大東のハローおばちゃんのお兄さんという方、池田さんかな、この人がね、たくさん老人連れてきたんですね。ゲートボールの試合をね、交流したいということで連れていらしたが、私もまだ役場の職員で接待係して、みんな立って太鼓見てるもんですから、ビールが切れてる人たちについてあげてたら、あれだよ、あれ、八丈の本当の太鼓はあれなんだ、原形だよって。うちの人だったんですよ、清忠さんと。でも、主人ですって言わないよ。このおじいちゃんは、八丈から来た人って聞いていましたから

沖山美智子 今はアレンジしてるからね。

手がもう、いろいろ混ざってしまってるかね。この人なんか、動かすの嫌だっていって、教えられたとおりにやってるからね。今でも、一つも入れないわけですよ。教えられたとおりに。だって、2歳か3歳かるとき、おばあちゃんにこう抱っこされて、箸を持って教えられたっていうからね。守身おじいちゃんの親、おばあちゃん。

聞き手 ツグさん。

沖山昇 小さいときからね。おばあちゃんの膝に座って。

沖山美智子 箸持って、はい。

沖山昇 手つかまえて、ほらーって言って。

沖山美智子 ずっとね、アレンジするのが嫌いだってね、教えられたとおりにやっただから、八丈から交流に来たおじいちゃんが、見ろ見ろ、みんな見ろーって言ってからに（笑）

沖山昇 以前、私が小さいときは、八丈の人はおばあちゃんが下拍子して、お父さんが上拍子たたいてましたね。できる人はね。うちの母はやらなかったですね。うちの父親はたたくけど、母はたたかなかった。

聞き手 美ゆ記さんのほうは。

沖山昇 で、うちの父のおばあちゃんはたたきよった。

聞き手 ツグさん。

沖山昇 それから、おじいちゃんはたたかない。

聞き手 四郎さんはやらない。

沖山昇 いろいろとあるんですよ（笑）四郎はたたかないで、守身が上手。

沖山美智子 南大東で、山下さんつって。相撲とる人、がっちりした人。あの人のところのおばあちゃんが、かごづくりが上手で、それから太鼓が上手で、観光客みんなそこに連れて行って見せたぐらい。今はもう亡くなれているけどね。

浅沼拓道 役場ですよ、山下さん。

<美智子さんが島に来る時の話>

聞き手 守身さんの話を一通り、お聞きしましたけど、本日のメインイベントですね。美智子さんが島に来られたあたりから、お話を聞かせてください。

沖山美智子 恥ずかしい（笑）もう、もう忘れました（笑）

聞き手 今帰仁で保母をされていて、それが島に来ることになったのは、どうしてですか？

沖山美智子 大東島におじさんたちいるっていうのは聞いているが、大東がどこにあるかもわからなかった。東にあるとは聞いていても、地図で見たこともなかったんですね。私は、昭和31年、1956年に高校卒業して、すぐ地元の幼稚園で働いていた。ウエマノリコという先生が、ひめゆり学徒の生き残りの方だったんですけど、その方が今帰仁の人と結婚して幼稚園を建てたわけですね。卒業しないうちから、おいで、おいでということで、私のいとこと2人、すぐそこに入ったわけ。そこで、2カ年ぐらい働いてるときにね、うち帰ったらね、きょうは大東の清四郎君が来たんだが、君にちょっと話があるって、父が私を呼ぶんですよ。何事かねーと思って、何で？って聞いて

たら、君をね、この3月いっぱいで大東に連れていきたい。何で？向こうの保母さんが結婚して全くいないから、君を連れに来たと言ってね。何言ってるの、お父さん、私、今のところとってもいいのに行かないよって言ったら、いや、もう相談したんだよ、って。父がもう決めているわけですよ。そういうことで、グーとも言わさんでね（笑）

浅沼拓道

グーとも言えなかったんですね。

沖山美智子

で、この清四郎おじさんというのは、今のセイチュウヤね？

そこの清三郎おじってというのは、私のおじになるわけね。父のお兄さんで。清四郎兄さんは、師範学校をトップで卒業したらしい。10人きょうだいで、貧乏なもんですから、成績の優秀な人が3名かな、官費で学校が出られるように、猛勉強したそうですよ。島から出ていきたいが、出られなかったんですって。私の父のきょうだいで、一番上のおじが、沖縄で校長してたんですね。そして、ここの社長にか知らないが手紙を書いて、動物がいっぱいいて、草刈り、飼葉刈りにどうしても人が必要なんだけど、よこしてくれないかって。あのときは電話もないですよ。この島から誰も出さないという時代でしたから。だけど兄さん、勉強が大好きで、広島大学を目指してたんですね。だけど、広島大学は2人しかとらなくて、あのころは、身体検査といって、身長と体重の比例が合わないと落とされるんだって。勉強はトップだったのに、体重がなくて、勉強するのに骨と皮になっていたんですね（笑）2時間寝ないぐらいだったんだって。あんまり勉強してね。それで落とされて。しょうがない、じゃあ師範学校行くよって言って行ったらしいけど。それぐらい頭はよかった。この島からは誰も出さなかったそうですが、おじさんが気をきかせて。社員が手紙を見るんだそうですよ、見てから、親に渡すんだそうだから、大変な時代だったんですね。おじさんに感謝していたんですが、ここにはあと9人いるわけですから、きょうだい男6人に女4人だからね。うちの父は当時独身だったんですが、ここにはお金送れないから、清四郎兄さんに学費を送ってたんですって。兄さんはどうしても、私たち兄妹の面倒を見たいって。私の兄は琉大出て、最初はここ、北大東の教員を希望した

のに、ここは満杯してるから、南大東あいてるからって南に行った  
んですね。1カ月ぐらいしてから、空きができるみたいよーって言っ  
たけど、向こうなれているからいいって言って、兄は南大東の教員  
になったんですが。兄は南で落ち着いたから来ない。今度は美智子  
を連れてこようっということ（笑）保母さんが、ここにはいなくな  
ったから、すぐ私を迎えに来たわけですよ。

私はそれ知らないわけね。うち帰ったら父がそう言って、もうしよ  
うがないなーと思ったんですけど。大東島どこにあるんだろうっ  
て、地図帳そのときに初めて見たら、もう点と針の先しかないわけ  
ですよ。えー、ここに行くのかなーって。

向こうに何でもあるから、衣類さえ持てばいいからっていうこと  
で、ボストンバッグに雨靴なんかもないはずと思って、新しいの買  
ってから、持っていったの覚えているんだが。泊港行ったらそりゃ  
小さな海幸丸って木造船の、ここら辺泳いでるような小さな船な  
のよ。えっ、これに乗るのって言ったら、何言ってるのこんな小さ  
い船で行かんよ、糸満のほうに豪華船が待ってるんだよって。私も  
うほんとだと思ってさー。もうばかだったっていえばもう。知識が  
足りないものはこんなものかなーと思って。女の人も2人ぐらい  
しか乗ってない。あと、7人ぐらいは男の人で。あいてるもんだ  
からごろごろごろごろ、寝返りしたりして、揺れてね。

南大東におりたときに当時、ミーちゃんのお父さんが助役さんだ  
ったので、この人が今帰仁の人だったから。美智子さん、そんな心  
配しなくていいのよ、今帰仁の人もいっぱいいるよ、一緒にここ上  
がろうって言って、南大東で上陸して、いろいろ用事するまで、2、  
3時間いたんですよ。北大東の港に来たら、ものすごい人が迎え  
ているわけですよ。迎えたのか何かわかりませんが（笑）大勢人  
がいた。そこでね、今は亡きオヤフソのおばあちゃんか、ジンスケ  
さんとこのおばあちゃんかわからないけれど、おいしいお茶を持  
ってきて私に、どうぞ喉渴いたでしょって言ったときは、あーこの  
島って温かいところだなー、こんないい人がいっぱいいるんだな  
ーと思って安心したら、うちの12トントラックっていうかなー。  
ドアもない車に乗って、清四郎おじさんのところ連れていっても



らって、兄さんがきょうからうちの長女なんだから、君はうちの娘になってくれよーって言って。私はどうしたらいいのかわからない、ほんとに、初めて親元離れて夜は泣きましたよ。

そして、すぐ手紙を出しに郵便局に行ったんだって。そこで、(昇さんは) こんなに手紙出す人誰だろうと (笑)

聞き手 ああ、そうか、郵便局の時に顔を見てるのね。

沖山美智子 寂しいもんだから、友達に出したり親に出したり。でも親に愚痴は言えなかったねー。当時はね。親に言うと親が困るだろうということで、愚痴もこぼさなかったが。

清四郎兄さんが大変よくしてくれて、またお嫁さんのツネコさんが、みっちゃん、みっちゃんってね、いろいろ教えてくれて、私、接待上手になったんですよ。兄さんは製糖工場の所長をいたしましたから、毎日お客さんが来るんですね。社員の人たちが何か相談に。毎日、接待しないとイケない。お酒出す。姉さんがおかずつくるといっておかずのお手伝い。料理も上手になりましたよ。

そのうち青年会に入って、青年活動していると、この人と会って。よかったのか悪かったのか知らんけど、まあね。

浅沼拓道 北大東では幼稚園の先生やってたんですか。

沖山美智子 ここで2カ年やりましたよ。もうすぐ就学するような子供たちで、今で言えば、キヌエさんとか、村長さんとか、ナオ姉ちゃんとか、ミヤギヨシオさんなんかを教えたの覚えている。

浅沼拓道 美智子さんだけですか？先生は。

沖山美智子 そのときは1人よ。

浅沼拓道 1人で30名ぐらい見てたってことですかね。

沖山美智子 そうね、たくさんいましたよ。

聞き手 島に来られて33、34年と保育園で働いて。

沖山美智子 そうね、2年はもうずっと。

#### <結婚のこと>

聞き手 結婚したのはいつですか？

沖山美智子 昭和36年1月5日。こっちのお父さんが最初に行ったときに、うちの父母がとても気に入ってくれて。このお父さん見たら、昇君は

しっかりしているだろう、これはオッケーだって言って、お父さん喜んでね。守身おじいもね、喜んで、すぐもう決めようっていうことで、1月5日、正月終わったらすぐ結婚式でした(笑) 一切合財、清四郎兄さんが私の面倒を見て。

たくさんの人たちみんな招待してね。ドラム缶を下に置いて、上に板を載せて、ござを敷いてだったから、私の前が全部お客さんだったの覚えてますけどね。

でも、言いたくないけど14年間、いつも帰りたかったです。だけど、14年過ぎてから何かがふっ切れて、あ、私はここに骨を埋めるしかない、もう子供も4人もできたんだから、帰るわけにいかない。今のように飛行機が飛んでいましたら、お父さんが仕事行っている間に、飛行場に行っていたかもしれないけど(笑) この人が嫌で離婚するとかでもない。おじいちゃん、おばあちゃんが嫌で、離婚するわけでもない。何か帰りたくて。幸いに、けんかするときには船がない。何もけんかしないとき、穏やかなときに船があるの。だから、私はやっぱりここにいとくなさいって。昇の嫁になりなさいと言ったんでしょね。14年過ぎてからは、もう諦めましたねー。

聞き手 14年っていうのはちょうど、お子さんが全部生まれた後ぐらいですネ。

沖山美智子 はい、そう。

聞き手 昇さんが助役になる手前ぐらいで、美智子さんは役場に入ったころぐらいですね

沖山美智子 子供が2歳になったときに、いとこの姉、清四郎さんの嫁さんから、清四郎一家が沖縄本島に行くので、後任を探さないと私やめられないから、みっちゃんあんた役場に入ってって言われて。あのころは試験がなかったですよ。

聞き手 後任っていうのは、清四郎さんの奥さんの後任なんですね。

沖山美智子 役場にいたんです。すぐ私を後任にね。したら、総務の戸籍係に。戸籍係は何十何年かして、出納でも十何年かして卒業しましたね。卒業する2カ年前にね、収入役さん、もうこの檻から出してください、もう刑は外れていると思いますのでって言ったら、そうだな

一と言って。それで、住民課に行って 2 カ年したら定年になりましたよ。

聞き手 さいごは住民課長ですね。課長 2 カ年の前は、ずっと戸籍係と出納係ですか。

沖山美智子 は一、出納でしたね。長かったですよ。五百何名ですよ。みんなの生年月日、覚えてました。きょうは、あんたのとこの次男、あしたはあんたとこの旦那さんよ一とか言ってね。それぐらい。今は個人情報だから言えないが。この人が幾つぐらいっていうのは、すぐ勘でわかりましたね。あの人は昭和の 10 年生だな、あの人は 5 年生だとかして、すぐわかりましたよ。

聞き手 しかし、帰りたい、帰りたいの 14 年があって、吹っ切れたところに、ちょうど飛行機が来るようになったんですね。

沖山美智子 あ一、ですね。

聞き手 よかったですね。

沖山美智子 そのころ、もうけんかがないんですね。けんかって言っても、ちょっとした子供のことでのいさかい。私は信じていたからかわかんないけど、もうついていくしかないと思いました。その間にね、私の独身のときに、うちの東京にいるおじさん、おばさんがちょっと脳梗塞か何かで倒れたから、東京に来ないか？って、母のところへ電話か手紙が来た。母は、お父さんのきょうだい、おばさんなんだから、あんたが行くべきだよと。ううん、私、東京行かないよと言って行って断ったら、母は、お父さんの顔に免じて行ってちょうだいって何回もお願いしてましたけど、東京って、1 人で行ったこともないところに行けなかったです。今どんな人生だったかなと、また思うわけですよ。

浅沼拓道 東京じゃなく、大東を選んだんですね。

沖山美智子 で、お父さんみたいな人、探せなかったかもしれん。

沖山昇 入ってるよ一、あんた。

沖山美智子 消してくださいね（笑）だからね。

<出会った頃の話>

聞き手 話が戻りますけど、昇さんに最初に会ったときは…

沖山美智子 青年会役員会とかで、私とこの人が仲よくなって、お互い、話し合ったりして、青年活動やったわけですね。エイサーも、踊り、劇などもやりましたよ。大変楽しかったです。

聞き手 最初に会った当時の昇さんの印象はどんな感じだったんですか？

沖山美智子 優しいなという。この人に優しさがないと、もうほんとに逃げよったね。誰も兄弟ここにいない。いとは1人、いますけどね。やっぱり女だったら絶えず行ったはずだけど、男の人なので。よくはしてくれますけども。この人の優しさで我慢しました。

沖山昇 美ゆ記お母さん仕込みで、料理も上手だしね（笑）

沖山美智子 うちの兄弟も、君は行くべきところに行ったから、一番安心してるよって言われてね。私もよかったと思う。

#### <子育てのころ>

聞き手 製糖工場で10年ぐらい仕事をしていてたころは、ちょうど子育ての時期に重なっていますね。

沖山美智子 でも、おばあちゃん、養母がいたので。一番下の子のかおりが2歳になったときに、みっちゃん、ツネコ姉さんからお仕事の声があるのに、女が2人家にいないから、私が下の子とおうちのことやってあげるから、あなたは働きなさいって言われて。私は働きたいわけですが、言えないわけですよ。まだ子供小さいからねって言ったら、おばあちゃん非常に物知りでしたから、女が2人うちにいたらもったいないから、あなた若いんだから、早く役場でツネコ姉さんの後任として働きなさいって言われたので、もうすっごくうれしかったです。

そのかわり、子供は一切職場に連れて行ってはいけない、これだけは守りなさいって、強く言われましたよ。

だけど、ひょっこり幼稚園になった次男が来てるんですよ。カウンターで「お母さん」って言ってるんですよ。見て、びっくりして、どうしてここに来たって。農協の前でね、あんたのお母さんここにいて聞いたから来たって言うんですよ。カウンターのそばにいた経済課の子が、お菓子をやったらすぐ帰りよった。

うち帰ってからまた注意したんですよ。役場に来たらだめだよ、村

長さんにすぐ縛られるよって。あれつきり来なくなりましたが、おばあちゃんの教えが大変よかったですよ。

聞き手 昇さんは製糖工場のころも、結構仕事一途だったんですか。

沖山美智子 は一、一途でねえ。製糖工場の機械がちょっと故障したら1週間帰らないんですよ。毎日、肌着、靴下、お弁当はね、運んだ。おばあちゃんが運んでくれたから。つくるのは私だけけれども、おばあちゃんが一番下の2歳になる子供おんぶしてね。

沖山昇 浅沼さんと2人でね。

聞き手 結構故障したんですね？

沖山美智子 故障しましたよねー。

聞き手 そうすると泊まり込みですか。

沖山美智子 はい、泊まり込みで。

沖山昇 新しい機械が入ったりしたときなどには、皆さんが習得するまで、私も浅沼さんいなくても大丈夫なようにって、教えないといかんわけですから。ずーっとついていてね。

沖山美智子 専門は電気ですよ。当時は農協さんが電気を回していたから、近いうち復帰したら、沖縄電力ができるというのを聞いていたからね、大急ぎで農協に入って。2カ年ぐらいいました？農協は。

沖山昇 利用課。

沖山美智子 利用課ね。復帰と同時に、沖縄電力の所長になりましたよ。もう安心でしたね、専門でしたからね。

聞き手 その転職は奥さんとしては、パチパチですか？

沖山美智子 あ、うれしかった、うれしかった。

子供に言われたんですよ。高校生だった長男の功がいうんですけどね、何でお父さん、専門の電気に行かないで、製糖工場なんかに行くのって言ってたんですよ。で、電気屋さんに行ったって言ったら、あーやっぱり喜んでくれましたよ。私も、電気の仕事が好きで工業高校に行ったのに何でと思ったけど、人がいなくてね。製糖工場にすぐ引っ張られて。

聞き手 みんな島田清四郎さんが引っ張ってるんですね。

沖山美智子 そうですよ。

<清四郎兄さんへの結婚報告>

沖山美智子 清四郎兄にね、この結婚のこと言うときに、きょうはお客さん来ない？、きょうは来ないよ、何で？、ちょっとお話したいことが、話？っていってもうびっくりするわけですよ。じゃあきょうは夕飯食べてから、美智子の話を聞こうと言って、3人で、兄さん夫婦と私。実はね、私ね、おつき合いしている人がいるって。まさか、昇君じゃないよね？ってすぐ言われたんですよ（笑）

沖山昇 はは（笑）

沖山美智子 くぎ打たれたのよ。

沖山美智子 どうしてわかったの？って。これ変な話ですけど、男が男にほれると言ったら昇君だと思ってって言われたのよ。

沖山昇 あーはは（笑）

聞き手 最高の褒め言葉ですね。

沖山美智子 それで、今すぐじゃないよって。一応おつき合いしてるということをお伝えと言ったら、そうか、僕も大好きだと言われたんですよ。昇君なら大丈夫って。だから1年ぐらいつき合ったかな、それから、来年は結婚しようって。みんな年寄りを抱えてるから。おじいちゃん、おばあちゃんも孫の顔を見たいって言ってるし。それじゃあ早く結婚して子供。

で、年明けたらすぐ、1月5日。えー！って。当時は、マシヤ食堂のサダノブおじいのご馳走をつくる。もう、てんやわんやだったみたい。私なんかは知らなかったんだけど。

沖山美智子 うちのひとは、サダノブおじいの次男と太鼓がよく合うんですよ。

沖山昇 沖山ハルジさんというのね。サダノブおじいは謙作さんの息子。

沖山美智子 郷友会でもよくたたくんですけど、必ずハルジさんというんです。

沖山昇 沖縄本島にいますがね。

沖山美智子 2人は呼吸がぴったりで。

沖山昇 上手。

聞き手 その場合は、昇さんが上拍子ですか。

沖山昇 私が上拍子。ハルジが下拍子。

沖山美智子 一番呼吸が合うんですよ。もう一人、キュウコウさんと言ってね、勝彦さんのお父さんだったけど。だ一、事故で亡くなったので、今

はハルジさんだね。どこからでも合図する。昇おじいとかいって  
(笑)

聞き手 清忠さんともたいた？

沖山昇 清忠さんともたいた。

沖山美智子 私、いどこなんですよ、その清四郎さんの弟なんですけど。

<助役を頼まれる>

聞き手 沖縄電力の初代電業所長になって、みんなが喜んでよかったと。でも、そんなに長く勤めることなく(笑)助役になっちゃうわけなんですよ。

沖山美智子 そうなんですよ。

聞き手 そのときはどう思いましたか？

沖山美智子 そのときですね、新の1月16日沖縄のお墓参りの日。村の大きな無縁仏があるじゃない。村の役場の職員全員でお参りに行くわけですよ。そしたら、私にね、助役さんだったかね、帰りはみっちゃんのおうちに行こうねって、何で？って言って、ちょっと用事があるからって。知花村長さんでしたよ。みんなで押しかけていこうって言って、20人ぐらいさ、全部うちに来たの。

そしたら、昇さん呼んできなさいって言ってね。あの一、電気屋さんにいたんじゃない？こっちはわからないわけよ。電業所にいたのを村長さんに呼ばれて。うちにはもういっぱい来てね。

聞き手 役場職員がぞろっといるわけですか？

沖山美智子 どっと来たんですよ。それで、お茶準備していたら、(昇さんが)引っ張られて、連れてこられて、知花村長さんの前に座んなさいって言ってね。ちょっと昇君、きょうはみんなの前でお話があるんですけど。

浅沼拓道 怖いですね。

沖山美智子 今、電業所の所長なってるけど、ぜひ村には、君が必要だから、助役になって。みんな拍手するわけですよ。初めて聞いてね。あー上等、上等って言うけど、いやいや、こっちはできないって断ってるのにね。村長さんは、大丈夫、大丈夫、俺のほうから電話するからとかいって、一生懸命。みんな酔っ払ってるのね、もうあっちで

お酒いっぱい飲んでるから。  
聞き手 酔っ払ってるんですか (笑)  
沖山美智子 もうどうしようと思ったけど。  
浅沼拓道 昔はお墓参りのときに飲んでたらしいですよ。昼間からみんな。  
沖山美智子 今ないねえ。  
浅沼拓道 お墓参りは行くんですけど。ちゃんと線香あげたり。  
沖山美智子 職員全員で、お線香上げての帰りよ。  
して、何事かわからないさ、なぜなんだろうと思って、まさか助役。  
こっちはずっと断っても、毎日来るもんだから。  
浅沼拓道 毎日 (笑)  
沖山美智子 専門は電気ですのに、所長なったばかりですのに、は一、許しませんよって、こっちも同じことばかり言うのね。  
知花村長はちょっと酔っていた。僕が一応電話するから、君からもしなさいと言って。何日かしてから沖縄電力の係に電話したら、部署はどこかって、で、助役になって。それならとめられない、オッケーって言ってすぐ下されて。電業所よりは上だったのかな。  
沖山昇 よーくまた覚えているね、あんたは。  
浅沼拓道 役場職員が押しかけたっていうのがね (笑)  
沖山美智子 知花村長がいいだろ、いいだろ、みっちゃんってから、いやー。  
聞き手 みっちゃん (笑)。

<一緒の職場になる>

沖山美智子 (昇さんが助役になると) 職場一緒になるじゃないですか、私は。  
聞き手 美智子さんとしてはどうでした？  
沖山美智子 私は、今までのように、意見が余り言えなくなって。ちょっと小さくなりましたね。  
聞き手 奥様としては、電業所長でいるのと、助役になっちゃうのと、どちらがよかったですか？  
沖山美智子 それがね、こんなこと言っちゃいけないかね？給料が倍になったわけ。うれしかったというかね。  
聞き手 ああ、そういうことで (笑)  
沖山美智子 でも、出張も多いんですよ。交互に出張、私も。



聞き手 戸籍係も出張多いんですか？

沖山美智子 出張行ってわからないことを確かめたり、会合があつて勉強したり。この後は出納係になるんだけど、出納には行きたくなかったのよ、あのおりの中にはね。

聞き手 おりの中（笑）

沖山美智子 出張も月 1 回ぐらいしかなかったし。ほとんどないらしいね、かおりになってから。何で親も子も。

沖山昇 娘を金網に入れて（笑）今はもう出てましたがね。

沖山美智子 ことし出たそうです。

浅沼拓道 住民課、いまの福祉衛生課。

聞き手 あそこはおりと呼ばれるんですね。

沖山美智子 またかおりも、また住民課なってるって、おかしいよね。

聞き手 因果がめぐっていますね。  
沖繩電力行ったとき、やっと専門になったってみんなで喜んだんだけど、助役になると、今度は専門ではなくなりますね。

沖山美智子 自治法ですか。一から勉強しないとわからない。大変だったね、お父さん。

聞き手 はたから見ていても大変でした？

沖山美智子 いろんな議題をみんな持ってくるんですよ。私が 5 時に帰ってきて、お父さんがいるとね、あい、どうしたのきょうは？って驚いて、何で帰ってきたらこんなびっくりする？と言うんだけど、それぐらい忙しくて。

沖山昇 土曜、日曜もなかったですからね。

沖山美智子 土曜、日曜は全然ないでね。

聞き手 助役時代はずーっと。

沖山昇 そうそう。

沖山美智子 子供も 4 人とも出ていった後だし、非常に自由でしょ。

沖山昇 で、事務処理もあるけれども、接待もあるでしょ。

浅沼拓道 接待が多いですからね。

聞き手 このころから、強くないお酒も少しは飲まなきゃいけない。

沖山昇 酒はもう、要領よく。

沖山美智子 飲めない酒を練習して飲んでいて。

<助役時代の苦勞>

聞き手 助役時代ずっと忙しかったということでしたけど、随分大変そうだったなというような時期はありましたか？

沖山美智子 この人が役場の助役になったときに、道路拡張かな、そのために畑を削らないといけないから。それをお願いに行ったら、だめだって言われて。これで非常に悩んでましたよ。お父さん、守身おじいに話したら、カメヤッチーに頼んでみようって言って、製糖工場の所長さん、伊波亀太郎さん。カメちょっとおいでって言ってからね、昇が今これで悩んでいるんだが、君、ちょっと相談してくれんかって言ったが、すぐオッケーしたよ。

亀太郎さんとうちのおじいちゃんのおうちは、すぐ隣なもんだから、毎朝6時に、人のおうちにこんな早く行ったら、朝寝坊したい日もあるだろうに、亀太郎さんは来るなどとは言わない。カミー、カミーとついてから、向こうでコーヒー飲んでから、帰るわけですよ。亀太郎さんが行って、村のために拡張するんだから、潰れ地のちゃんど保障もあるし、何とか融通してくれないかって、やさしくしゃべったんだろうね、相手が納得して、それで解決しましたがね。

聞き手 人のつながりで仕事がうまくいったんですね。

沖山昇 つながりです。

沖山美智子 宝ですね。

沖山美智子 お父さんに助けられました。

沖山昇 いい勉強になりましたよ。本当に人のつながりというのはね。

沖山美智子 そこのおじいちゃんが、その後亡くなったの。全部この人がやってあげた。お葬式の準備、いろんな書くものもありますでしょ。今でも、みんな、位牌やら、書くものはいっぱい書いてあげるのね、この人ね。私は一つも文句は言わない。人のためにやってあげなさいって。

聞き手 そのほかにも昇さんが難儀していた時期ってありました？

沖山美智子 当時ね、沖縄県で医者足りなくて。お医者さんが本土からとか、外国、韓国から、お医者さんいらしたんだが、島で殺されたという事件があつてですね。そのころ助役なったばかりだったかな。

<健康のこと>

沖山美智子 私は平成10年で定年になった。この人は平成15年。それから、20年たったけど、何したかなと思う。

でも、2人とも健康に恵まれて。大きな病気も一度もしませんし。私は食事に気をつけているの。バランスよくね。野菜をしっかり幾つもとってね。そして、きょうはお魚、で、あしたはお肉というふうにしてね。もう、バランスよく食べようということだね。ちょっとお金かかるけど、あの、医療費に金かけるの嫌いなんですよ、私。病院行ってから食べようと思ったって、食べられないじゃない？

浅沼拓道 料理好きですよ。離島図書フェアでいつも料理の本たくさん買ってきますよね。

沖山美智子 あ！どうしてわかる？

浅沼拓道 いや、もう、毎年見ているので（笑）

沖山美智子 ぜいたくは本買うことかな。料理の本、いっぱい買ってね。

どれか1つマスターしようと思うんだがね。

本当うち、娘もですけど、病気したことないですよ。

聞き手 みんな体が強いんですね。

沖山美智子 みんな、健康に育てたつもりだけど。息子たちもこれだけが心配でねえ。健康が一番大事。

沖山昇 嫁さんがいい嫁さんだから心配しないでいいよ。

沖山美智子 あ、世界一。長男のお嫁さんも、次男のお嫁さんも、最高にいいんです。もうね、仲よしで。

浅沼拓道 次男の靖さんは、物知りというか、スポーツ好きとか、飛行機好きとか、趣味が多彩ですよ。

沖山昇 あれ、添乗員していたから。

浅沼拓道 エンジンの音聞いて何かわかるって言っていましたよ。

沖山昇 うちの守身おじいがですね、孫の靖に、おまえは何しているかつって言ったから、旅行社に行って、添乗員しているよつったから、おまえの仕事は家族泣かせだなって。

沖山美智子 朝早く出るから、お父さんが来たの知らないわけですよ。子供はやっぱり恋しがるわけですよ。そうしていたら城間村長のときに、大東海運に北大東出身の職員がいなくてということで、その旅

行社から引っ張ってきたのよ。ここにおまえは勤めてくれって言って。向こうは離さないと言ったらしいけど。

浅沼拓道 靖さんがいるだけで、連絡がとりやすいですね。

沖山美智子 みんなね、事務所に、靖一って行って、来るんだって（笑）  
私はいつも言うの。人に尽くしなさいって。いいことがいっぱいあるよって。

この子は、優しいのね、身寄りのないお年寄りに毎日弁当持っていったり。うちに来て、お母さん、ちょっとおかず入れて、おにぎり1つ、2つ、刺身も入れてちょうだい、って。

#### <昇さんの趣味>

聞き手 昇さんは、ほとんど趣味なんかなかったよってという話をされていますが、趣味はなかったんですか？

沖山美智子 囲碁はやりましたね。

聞き手 やっぱり囲碁なんですね。

沖山美智子 私もまた、人が来るのが大好きでね。学校の先生方が土曜、日曜、独身の先生たちもいっぱい来て。8個か、囲碁の台をずら一つと向こうまで並べて。私なんかがお昼をつくる。夜の酒のさかなもつくる。一人、同郷で私の後輩がいたもんですから、次はあなたのおうちでというふうにもしましたが、ほとんど私のおうちで、3回したら、あっちは1回ぐらいだったんですよ。そのようにして、囲碁クラブやりましたよ。一般の人もいたんですよ。学校の先生だけでもなくて。学校の先生もね、伊江島とか、今帰仁とか、本部とか、あちこちからだったけど。

聞き手 助役になる前の、製糖工場とか電業所の時代は、余り趣味はなかったんですか？

沖山美智子 釣りなんかもあったね。

沖山昇 一番釣りしたのは電業所のころ。

沖山美智子 必ず釣れるんですよ。うちには持ってこないよ。電業所の人たちと一緒に食べるの。5時あとから、1、2時間くらい釣りに行って。

沖山昇 小魚を釣って、運転員との交流。あんたは運転だから酒飲むなよ、終わった人は飲んでいいから。こんなしてやりましたよ。

聞き手 所長としてのもてなしですね。  
沖山昇 そうそう。従業員あつてのね。  
沖山美智子 だからみんなよくしてくれましたよ。私がね、出納の研修で座間味に行ったときもね。電業所所長の奥さんが来てるよって聞きつけて、タコやらなんやら持ってきてね。人のためにしているともらえるという意味じゃないけど、だから、私、子供たちにも、お友達とか周りの人、困っている人を大事にしてくださいよっていつも言っているんですよ。

<島田清四郎さんのこと>

聞き手 いとこの島田清四郎さんは人となりというか、どんな方だったのかを聞かせてください。  
沖山美智子 欲のない人ですね。だから、校長でいたのに、新しい製糖工場つくる時、島の人やっぱり清四郎さんにさせようというので、みんな持ち上げて、製糖工場の所長になったわけですけど。校長会に行ったら、君はばかだよって言われて、給料も少ないし、無欲な男だからっていつも言われたって言ってね。自分を犠牲にしてでも島を救いたいという、この心はいつも持ってましたね。私は、兄さんが亡くなったときにはもう涙がとまらなかったですよ。入院したときも行ったけど、音楽が大好きで。宮良長包先生っていつて八重山のね、師範学校の音楽の先生ですけども。兄も音楽も教科だったというけど、ずーっと枕元に置いて、亡くなるまでこの宮良長包先生の全集を聞かせてましたよ。  
聞き手 清四郎さんは製糖工場の所長から、役員になられて。  
沖山美智子 役員なった。それで引き揚げって行って。  
沖山昇 本社に行ってね。  
聞き手 そのまま那覇に行ったままで。  
沖山昇 うちら、那覇に行くときはいつも行って、いろいろお話しして。  
沖山美智子 美智子、美智子、来てごらん、栄養学を僕、勉強したけどね、豆腐にはタンパク質と何と何があつて、はあーもう、行ったら必ずこれを私に教えるわけですよ。ダイエットするならなー。豆腐を食べなさいってから（笑）何でも追求するのね、もー。

聞き手 やっぱり賢い人だから。

沖山美智子 ちゃーんとまたメモをとっというて。

沖山昇 きちんとやる人ですよ。

沖山美智子 この人にメモを教えたかもなーと思うぐらい。うつったんじゃないかなーと思うぐらい。何でも記録して。

聞き手 やっぱり昇さんは、若いころからメモしてましたか？結婚した当初から。

沖山美智子 もうもう。やっています。手帳も幾つあるかなー。

沖山昇 清四郎先生の教え子だ。

沖山美智子 兄さんが喜んでくれるから、那覇に行くたびに 2 人で一緒に行って、食事をしたりして。兄がなくなったときは、ほんとに寂しかったね。

聞き手 清四郎さんと美智子さんはいどこですよ？

沖山美智子 はい。

聞き手 お父さんが兄弟。

沖山美智子 はい、そうです。

聞き手 美智子さんのお父さんは。

沖山昇 ずっと今帰仁。

沖山美智子 たくさん兄弟いますよ。

沖山昇 清四郎先生のお父さんはこっちに出稼ぎに来たのね。

沖山美智子 戦前ね。今帰仁から。10 人子供いました。6 男 4 女でね。もうほとんど亡くなって 4 名ぐらい残ってるかな。戦争中は引き揚げていたそうですよ。戦後、またここに来たんですって。

私の同級生で、高良シゲミツっているんですけど。同級会のときに、美智子、君、大東行ってるかって、僕、大東のことよくわかるよーと言って、何でって、隣のラサ島で僕生まれたんだのにな。やっぱり、出稼ぎに行ってたそうですよ。僕ら砂糖で育ったんだよって、水がなくて、お母さんが小さいときに海水で風呂入れていたんだよーって。君、そこにいるのか。僕ね、知花村長に使われて、土地の返還のときに、事務処理をしたんだよ、知花村長が僕のところに来て。登記所にいたのかな？お兄さんは高良先生と言ってたけど。

沖山昇 今、土地の話ですけど。土地所有権を獲得して、北大東に字ラサの行政区をつくる時に、地主がラサ工業だから、ラサ工業にわざわざ、あなたの土地がこっちにあるよーということを伝えて。内地の新聞に大きな拾い物をしたという記事が出たという話も聞きました。知花村長も、笑い話ではあるけども、黙っておけば、北大東の島になっていたのにならね(笑) まあ冗談でね、言っていましたけど。真面目な村長でしたがね。

沖山美智子 無番地でしたよ、ずっと。土地獲得してから字中野何々番地になったのね、ほんと。

<おわりに>

沖山昇 これでよろしかったですかね。

聞き手 あの、2日半、大変ありがとうございました。

沖山美智子 もう、4、5年前だったらよかったのに。だんだんとね、記憶が薄れてきて、2人とも細胞が一つずつなくなってるので。

沖山昇 まだ12年は大丈夫です。100歳まで生きるってことだよ。

沖山美智子 私もそれは希望だけどさー。

沖山昇 は一な、この気力で頑張りましょう。

どうもどうも、ありがとうございました。

沖山美智子 ありがとうございました。どうも。

聞き手一同 ありがとうございました。

あとがき

北大東島とは、10年にわたるお付き合いである。しまづくりのお手伝いをしてきたこの10年、沖山昇さんには、何度もお話を聞く機会があり、島の歴史・文化に根ざした貴重なヒントをいただいた。

燐鉱山遺跡の史跡指定の出発点になったのは、昇さんの燐鉱山の記憶である。八丈島から伝わる太鼓の名手としての技を残そうと、昇さんの記録映像を企画・制作したこともある。この時も、八丈太鼓にまつわる貴重なエピソードを聞いた。村誌改訂版・歴史編の執筆の際にも、昇さんからの的確なアドバイスをもらった。昇さんは、教育長として旧版村誌の編纂にあたった先達でもあった。

改訂版の村誌が完成した時に、ひとつ悔いが残った。島の歴史・文化を知る方々にお話を聞く機会を十分に持つことができなかつたことである。特に、沖山昇さんには、そのルーツに始まり、生まれてから現在までの全個人史をお聞きして、残して置かなければならないと思うようになった。ちょうど、この時、北大東村の文化的景観の継承を検討する委員会で、委員長の高良倉吉先生から、昇さんの個人史を聞く機会を逃してはならないと強く指摘され、背中を押された。

北大東村・教育委員会と相談し、ぜひということ、昇さんの個人史を聞き取り、書籍の形で残し、後世に伝えることとなった。

聞き書きは、北大東島で2018年6月1日から4日までの計14時間に及んで行われた。私は、企画、聞き手、構成、編集を担当した。村教育委員会の浅沼拓道さんが予算の確保、日程調整・場の設営などを行い、国建の石垣綾音さんが録音等の記録、テープ起こしを担当した。浅沼さん、石垣さんが聞き手となることもあった。初日は打ち合わせを兼ねて1時間、2日目・3日目は午前2時間（9時—11時）、午後2時間（14—16時）、4日目は午前2時間、計11時間の予定であった。2日目以降は、各回とも30分程度の延長があり、また2日目の午後は燐鉱山遺跡での現場検証も加わって、計14時間に及ぶことになった。

昇さんは、長い間書きためてきた記録のノートを脇において、時折見返して記憶をたどりながら、静かな熱を込めて話してくださった。終始、にこやかで、時折、いたずらっぽい笑みをうかべて、冗談が交えることもあった。強く印象に残ったのは、正確な事実を語ろうととても慎重で真剣であったこと、また、自分の手柄を語ったり、誰かを悪く言ったりすることが全くなかつたこと、である。最



終日の2時間、奥さんの美智子さんが加わってくれた。昇さんの人生を別の視点から色鮮やかに捉えることができ、貴重な機会となった。昇さんの記憶力には常々感服していたのだが、奥様の記憶力、描写力にも驚きを禁じ得なかった。

当然のことながら、今回の聞き書きで、昇さんからすべて聞き出せたわけではない。しかし、生の声に基づいて、沖山昇さんの個人史を一貫した全体像としてひとまず描きだすことができたのではないかと肩の荷を少し下ろしている。

聞き手・編集 服部敦

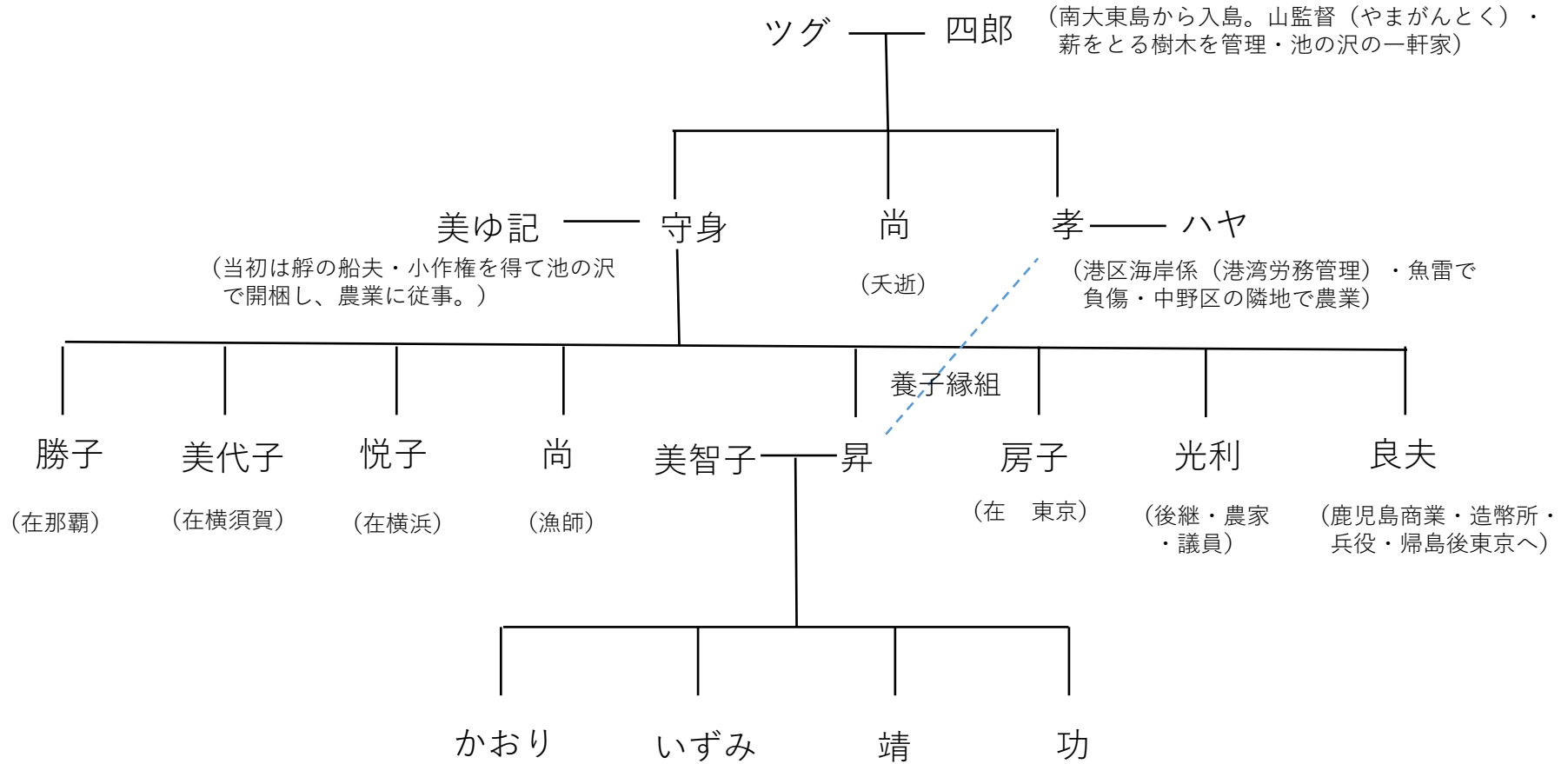
# 付録

1885	M18	国標建立			
1900	M33	開拓団上陸			玉置半右衛門
1902	M35		父：守身（もりみ）誕生（八丈島末吉村） 母：美ゆ記誕生（八丈島中之郷村）		
1903	M36	北大東島上陸			
1910	M43	燐鉱採掘開始 玉置商会の設立			（玉置商会）
1911	M44	燐鉱採掘中止、開墾開始			
1916	T5	東洋製糖と合併	守身、両親・兄とともに南大東島に来島		（東洋製糖） 天野蓮夫
1917	T6	小作制度開始			安田
1918	T7	燐鉱再開、西港建設 分校設立	守身一家が北大東島に移住		藤田琢磨
1919	T8	燐鉱山開業、大東宮遷宮			
1924	T13	開墾終了			
1927	S2	大日本製糖と合併			（大日本製糖） 吉原武
1928	S3	最大人口 2690 人			
1930	S5	小学校舎全壊・再建	誕生（8/23 池の沢村無番地） 8人兄弟4番目	0	山成不二磨
1934	S9	第1回試錐調査		4	
1935	S10	第2回試錐調査		5	渡辺道生
1936	S11		尋常小学校入学	6	
1937	S12		妻：美智子誕生	7	
1939	S14			9	石橋喜代治
1941	S16	（太平洋戦争開始）	（北大東錬成学校に改称）	11	江頭芳一
1943	S18		北大東錬成学校高等科入学	13	丹羽彦之
1944	S19	守備隊上陸		14	江越道孝
1946	S21	燐鉱積出再開、民政官来島 村制開始、大日本製糖引揚	5月 北大東鉱業所採鉱事務所入所（鉱夫、 後に書記）	16	（北大東村） 前城嘉達
1948	S23	初の村長・村議選挙		18	
1949	S24	人口が戦後最多 1256 人	3月 進学のため退職	19	
1950	S25	燐鉱山閉山		20	与那城苗健
1951	S26	土地所有権問題顕在化		21	知花俊夫
1952	S27	北大東小中学校に改称	3月 沖縄県立工業高等学校電気科卒業 4月 沖島電気水道工事社入社 （電気工事人）	22	

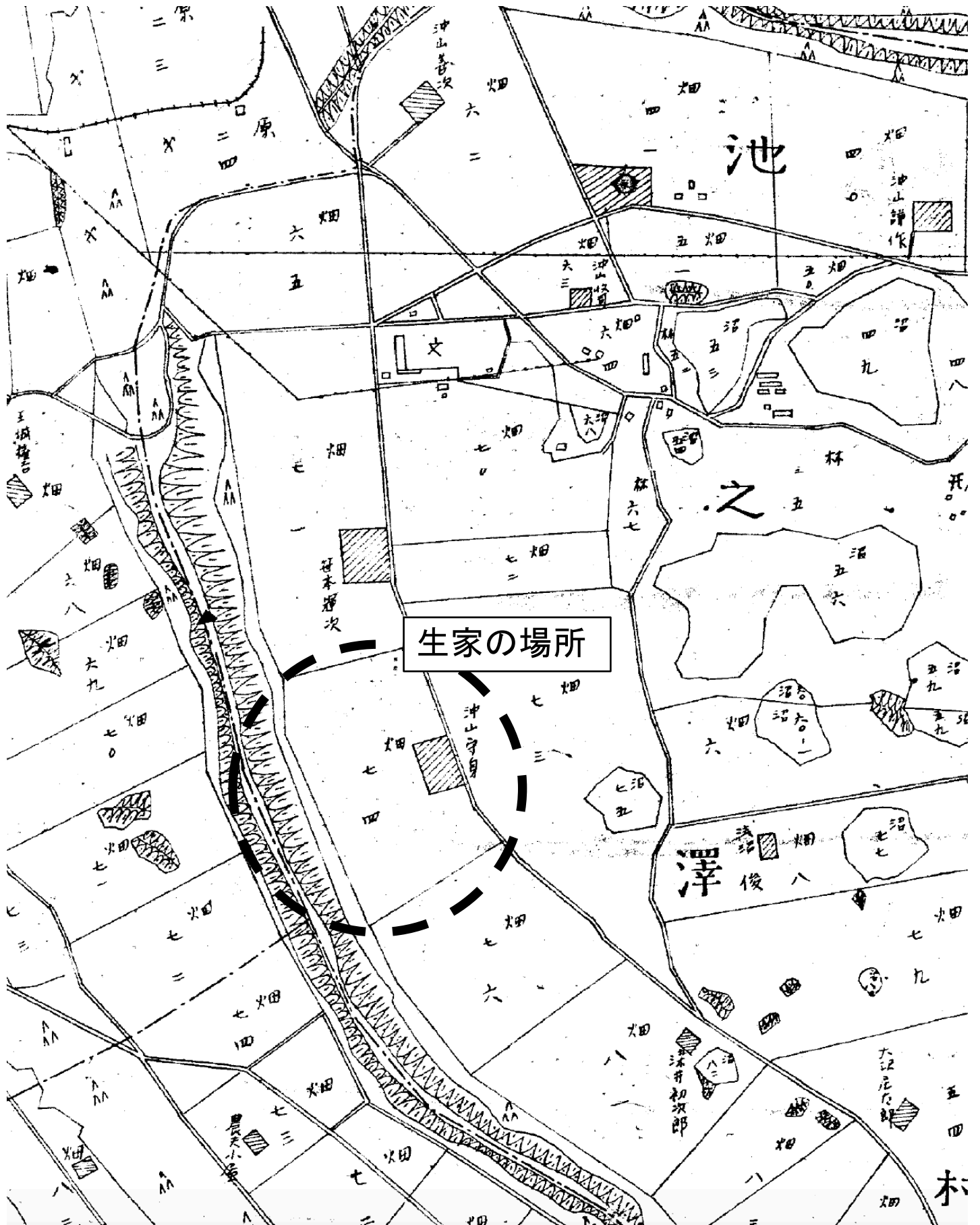
1954	S29	親子ラジオ開始	3月 退職 4月 沖縄電設株式会社入社(電気工事人)	24	
1955	S30	農協設立、北映館開業		25	大城久四郎
1956	S31	西港にマストクレーン設置	3月 退職 4月 北大東運送業社入社(書記)	26	
1957	S32	農協電気事業開始		27	
1958	S33	郵便局開局	4月 退職 5月 北大東郵便局臨時採用(書記) *美智子、今帰仁村より入島。保母になる。	28	
1959	S34	大型含蜜工場完成	2月 退職 3月 北大東製糖株式会社北大東事務所 (電気室勤務)	29	知花俊夫
1961	S36	島内電話開通、外国船難破	1月5日 結婚 1月 工事課工務係長	31	
1962	S37	難破船マストクレーン設置	長男：功誕生	32	
1963	S38	島外電話開通		33	
1964	S39	土地所有権獲得・全島電化	1月 工務課長代理 次男：靖誕生	34	
1966	S41	分蜜工場完成	長女：いずみ誕生	36	
1967	S42	区から字に変更	次女：かおり誕生	37	
1968	S43	旧大正村に牧場設置		38	
1969	S44	与儀組設立	1月 工務課長	39	
1970	S45	製糖本土直送	8月 退職 9月 北大東村農業協同組合利用課長 *美智子、役場に就職。住民係。	40	
1972	S47	本土復帰、ハーベスタ導入 江崎港整備	1月 退職 2月 琉球電力公社北大東電業所勤務 5月 沖縄電力株式会社北大東電業所長	42	
1976	S51		2月 退職、北大東村役場助役	46	
1978	S53	空港完成、村章公募		48	
1979	S54	沖大東射爆場解除要請		49	
1982	S57	土地改良開始		52	
1983	S58	火葬場完成、秋葉神社		53	宮城一夫
1984	S59	衛星放送開始		54	
1986	S60	海水淡水化施設完成		56	

		大東海運設立			
1987	S61	歯科診療所完成、魚市場	12月 助役任期満了（3期12年） 北大東村教育委員会教育長	57	城間盛秀
1991	H3		母：美ゆ記没	61	
1993	H5	村営塾開塾		63	
1997	H9	ハマユウ荘開業		67	
1998	H10	地上波放送開始	父：守身没 *美智子、住宅課長をさいごに退職。	68	
1999	H11	携帯電話営業開始		69	宮城光正
2000	H12	開拓100周年		70	
2003	H15		3月 教育長任期満了（4期16年） 4月 教育委員会教育委員長	73	
2004	H16	新庁舎、県内所得1位		74	
2005	H17	北曙会改称		75	
2009	H21	漁港建設着手		79	
2011	H23	海底ケーブル開通	3月 教育委員長任期満了（2期8年）	81	
2018	H30			88	

# 沖山家 系図



# 昭和初期の地図

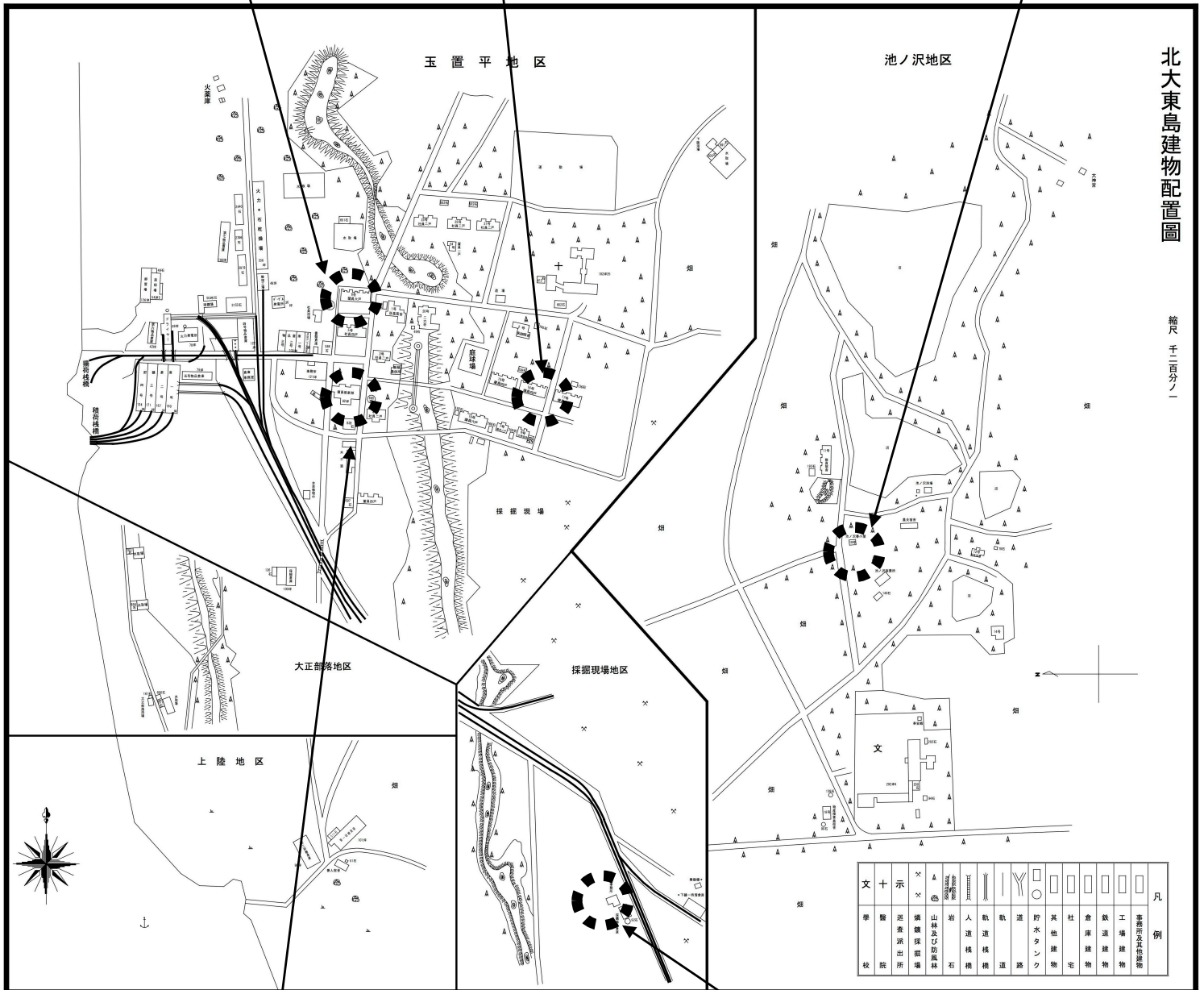


# 昭和10年代後半の地図

守身さんがいた家

四郎さんがいた社宅

孝さんがいた社宅



北大東島建物配置圖

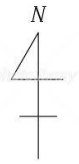
縮尺 千二百分の一

鉱業所の本庁の場所

昇さんが働いた探鉱事務所



沖山昇 生家 略図



親豚 (メス) 1 頭

山羊 5 ~ 6 頭 (長幕で放牧)

水肥タンク  
(兼 便所)

豚  
小屋

風  
呂



牛小屋

牛 7 頭 (役牛 6、乳牛 1)



水  
タンク  
100石程度

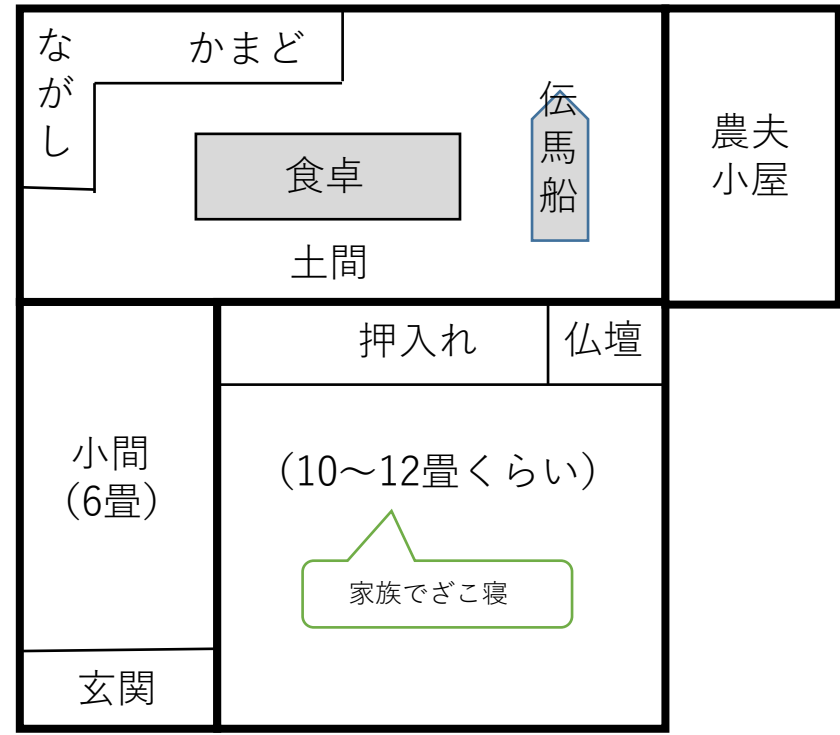
内壁を小石で補強し、モルタル仕上げ。屋根なし。

屋根裏に倉庫。ジャガイモ等を保管。



堆肥置き場

にわとり  
300羽  
(放し飼い)



ながし

かまど

食卓

伝馬船

農夫  
小屋

土間

押入れ

仏壇

小間  
(6畳)

(10~12畳くらい)

家族でざこ寝

玄関

道  
路

石垣